

林 田 遺 跡 Ⅲ

県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005. 2

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

林 田 遺 跡 Ⅲ

県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005. 2

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



調査区北側（南西から）



調査区西側（東から）

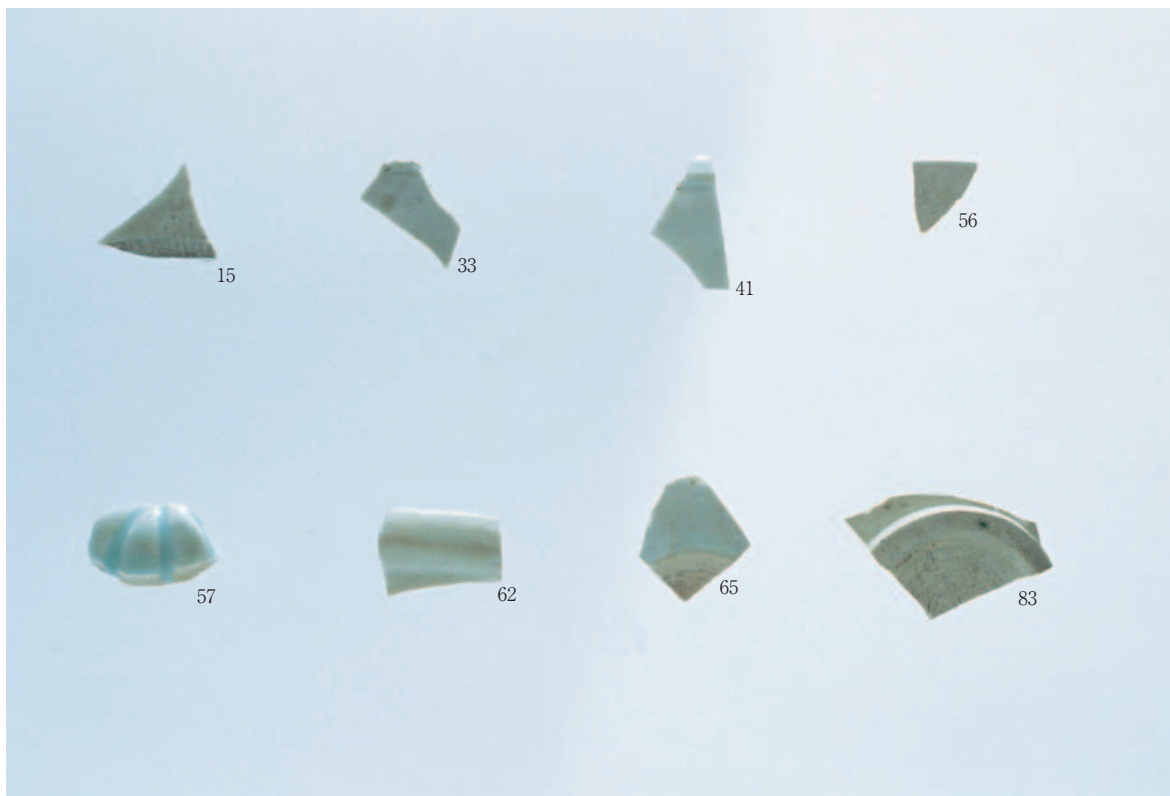
巻頭図版2



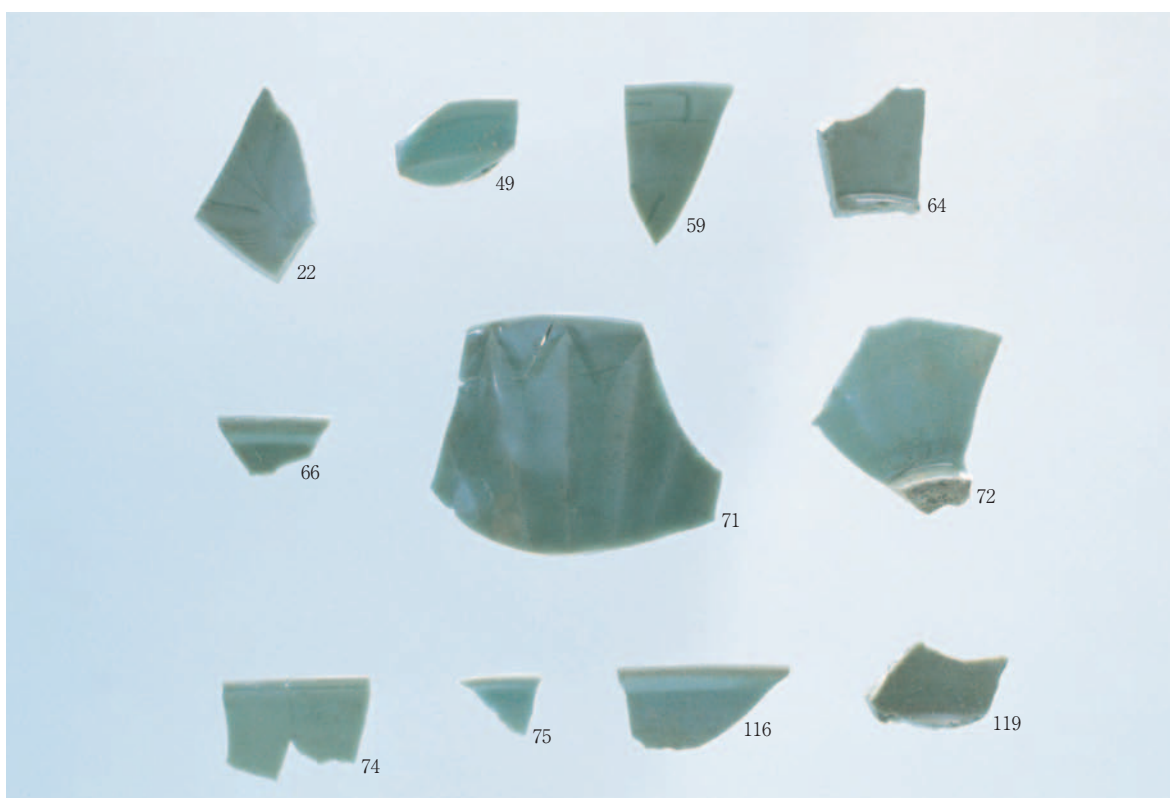
調査区東側（西から）



同上（東から）



出土遺物



出土遺物

卷頭図版4



出土遺物（左：111，奥：113，右：112，手前：28）



出土遺物（68内面）

序

高知県は北側に深い山間部を持ち、南側は太平洋に面した長い海岸線を有しています。人々の暮らしは、谷間できた狭い平野部や小さな入り江に面した文字通り津々浦々で営まれています。全般的には、海洋性の気候の下、比較的温暖な独特の気候・風土であり、ここに暮らす人々から生み出された文化にも多少なりとも影響を与えています。これは日本と呼ばれる一つの枠で括られてはいるものの、地域ごとに大小の差あることを示すものですし、またそれは高知県の中にも小さな文化集団が存在していることにも繋がるでありましょう。

林田遺跡は香長平野の東北部、物部川左岸に立地しています。遺跡の立地には、文化を担う人々の流れ、物の流れが存在します。険しい山を越えて人との繋がりを求めた場合もあるでしょう。また、海を介して遠く隔てられた土地が結びつく事もあります。現在の発達した陸上交通網は、ともすれば、われわれの祖先も同じような手段で他所に交わりを求めていたと考え勝ちですが、自然との関わり方に長けていた彼らは、もっと自由で多元的なものの見方ができていたことでしょう。文化の流入についても、海や河川は決して人や物を隔てるものではなく、人と人を結ぶ大動脈と考えられるからです。

今回の林田遺跡に於ける発掘調査成果は僅かなものですが、地域の人や物、そして文化の流れを考える一助となれば幸いです。

調査に際しましては、加茂、林田地域の皆様をはじめ、土佐山田町民の方々、高知県南国土木事務所、高知県教育委員会、土佐山田町教育委員会にご協力いただきましたこと厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 川村 寿雄

例 言

1. 本書は県道宮ノ口～深淵線整備計画に伴う、発掘調査報告書である。1999年に実施され、報告された『林田遺跡 I』に、原因を同じくし、調査区は隣接する。

2. 林田遺跡の所在地は、高知県土佐山田町加茂字である。

3. 調査期間ならびに発掘調査面積は次のとおりである。

(調査期間)

(調査面積)

平成16年1月20日～同年3月17日

約700㎡

4. 発掘調査及び整理作業は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県南国土木事務所の委託を受け、これを実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査事務 池野かおり（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主幹）

同 長谷川明生（同上）主任

調査総括 横山耿一（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査課長）

同 出原恵三（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・調査第三班長）

調査担当 藤方正治（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主任調査員）

5. 本書の編集・執筆は藤方が行った。

6. 遺構等の名称については、SK（土坑）、SD（溝状遺構）、SX（性格不明遺構）、P（柱穴及びピット状遺構）等の略号を使用した。

7. 遺物実測図の縮尺は、土器・土製品と石器・石製品が1／3と1／1である。遺物番号は通し番号であり、挿図及び写真図版中の番号と遺物番号は一致している。

8. 出土遺物の色調については『新版標準土色帖1996年版』の名称を使用した。

9. 遺跡の測量は、国土座標第IV系に則っておこなった。挿図中の北は原則として座標北である。また、挿図中の標高は海拔高を示す。

10. 発掘調査に際しては、地元土佐山田町加茂をはじめとした町内にお住まいの方々や隣接する地域に在住の方々の全面的な御理解と御協力を得ることができ、調査を円滑に進めることができました。記して衷心より謝意を表します。

11. 発掘調査及び報告書作成に際しては、出原恵三、吉成承三（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）や土佐山田町教育委員会、高知県教育委員会、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から御助言・御協力を得た。謝意を表します。
12. 発掘調査にかかる掘削作業では株式会社共運工業に御尽力頂き、調査を完遂することができた。
13. 発掘調査に伴う測量基準点設置は、山中設計事務所に委託して実施した。
14. 整理作業に際しては、次の方々に御尽力頂いた。御芳名を記して衷心より謝意を表します。
宮本幸子　橋田美紀　入野三千子　元吉ゆみ子　竹村延子　佐藤浩美
20. 遺跡の略号は下記のとおりとし、出土遺物の注記にはこれを使用した。
03-16YH
21. 出土遺物は、財団法人高知県文化財埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

I	林田遺跡の位置	1
II	調査に至る経過	5
III	調査の概要と経過・方法	5
	1. 調査の概要	5
	2. 調査の経過・方法	6
IV	調査の成果	6
	1. 基本層準	6
	2. 遺構と遺物	13
	3. 包含層からの遺物	43
	4. まとめ	44

挿図目次

Fig.1	林田遺跡の位置 (S : 1 / 25,000)	2
Fig.2	林田遺跡全体図 (S : 1 / 160)	7~10
Fig.3	林田遺跡北東壁・北西壁セクション図 (S : 1 / 40)	11~12
Fig.4	SK1平・断面図 (S : 1 / 40)	13
Fig.5	SK2・3平・断面図 (S : 1 / 40)	13
Fig.6	SK4平・断面図 (S : 1 / 40)	14
Fig.7	SK5・6平・断面図 (S : 1 / 40)	14
Fig.8	SK7・9平・断面図 (S : 1 / 40)	15
Fig.9	SK11・12平・断面図 (S : 1 / 40)	16
Fig.10	SK13・14平・断面図 (S : 1 / 40)	17
Fig.11	SK15・16・17平・断面図 (S : 1 / 40)	18
Fig.12	SK18・18-1・19・P52平・断面図 (S : 1 / 40)	19
Fig.13	SK21・22平・断面図 (S : 1 / 40)	20
Fig.14	SK23・24・25平・断面図 (S : 1 / 40)	21
Fig.15	SK26・28・29平・断面図 (S : 1 / 40)	22
Fig.16	SK30・31平・断面図 (S : 1 / 40)	23
Fig.17	SK32・33・39平・断面図 (S : 1 / 40)	24
Fig.18	SK34平・断面図 (S : 1 / 40)	24
Fig.19	SK35・36・37平・断面図 (S : 1 / 40)	25
Fig.20	SK38・40平・断面図 (S : 1 / 40)	26
Fig.21	SK41・42・43平・断面図 (S : 1 / 40)	27
Fig.22	SK44・45平・断面図 (S : 1 / 40)	28
Fig.23	SK46・47・48平・断面図 (S : 1 / 40)	29
Fig.24	SK49・50・51平・断面図 (S : 1 / 40)	30
Fig.25	SX4平・断面図 (S : 1 / 40)	31
Fig.26	SX7・8平・断面図 (S : 1 / 40)	32
Fig.27	SX9平・断面図 (S : 1 / 40)	33
Fig.28	SX10平・断面図 (S : 1 / 40)	34
Fig.29	SX11平・断面図 (S : 1 / 40)	35
Fig.30	SX14平・断面図 (S : 1 / 40)	37
Fig.31	SX15-1~SX15-4平・断面図 (S : 1 / 40)	37
Fig.32	SD2・3平・断面図 (S : 1 / 40)	39
Fig.33	SD4平・断面図 (S : 1 / 40)	40
Fig.34	P39・43・47・48平・断面図 (S : 1 / 40)	41
Fig.35	P86・97平・断面図 (S : 1 / 40)	42
Fig.36	SK出土遺物 その1 (S : 1 / 3)	45
Fig.37	SK出土遺物 その2 (S : 1 / 3)	46
Fig.38	SX出土遺物 (S : 1 / 3)	47
Fig.39	SX・SD出土遺物 (S : 1 / 3)	48
Fig.40	ピット出土遺物 その1 (S : 1 / 3)	49
Fig.41	ピット出土遺物 その2 (S : 1 / 3)	50
Fig.42	包含層出土遺物 (S : 1 / 3)	51
Fig.43	出土石器・石製品 (S : 1 / 1)	52

表目次

表1	林田遺跡と周辺の遺跡	3
表2	林田遺跡ピット計測表1	55
表3	林田遺跡ピット計測表2	56
表4	林田遺跡ピット計測表3	57
表5	林田遺跡ピット計測表4	58
表6	林田遺跡出土遺物観察表1	59
表7	林田遺跡出土遺物観察表2	60
表8	林田遺跡出土遺物観察表3	61
表9	林田遺跡出土遺物観察表4	62
表10	林田遺跡出土遺物観察表5	63
表11	林田遺跡出土遺物観察表6	64

写真図版目次

巻頭図版	1	上；調査区北側（南西から） 下；調査区西側（東から）
巻頭図版	2	上；調査区東側（西から） 下；調査区東側（東から）
巻頭図版	3	上；出土遺物（15,33,41,56,57,62,65,83） 下；出土遺物（22,49,59,64,66,71,72,74,75,116,119）
巻頭図版	4	上；出土遺物（左；111, 奥；113, 右112, 手前；28） 下；出土遺物（68内面）

PL.1	上；調査区北部（南西から） 下；調査区西部（北東から）		下；SK49（右）・P147（左）完掘状態（北から）
PL.2	上；調査区東部（西から） 下；同上（東から）	PL.24	上；P95 遺物出土状態（96） 下；P158 遺物出土状態（111・112・113）
PL.3	上；SK1 検出状態（北から） 下；同 半截状態（西から）	PL.25	上；SX3 半截状態（東から） 下；SX7 完掘状態（西から）
PL.4	上；SK2 半截状態（東から） 下；SK4 完掘状態（北から）	PL.26	上；SX10 半截状態（南西から） 下；同上（北西から）
PL.5	上；SK5 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（南東から）	PL.27	上；SX10 完掘状態（東から） 下；同上（南から）
PL.6	上；SK6 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（西から）	PL.28	上；SX11 半截状態（南西から） 下；SX11 完掘状態（北から）
PL.7	上；SK7 半截状態（南東から） 下；同 完掘状態（北東から）	PL.29	上；SX15-1,-2 半截状態（南東から） 下；同上（南西から）
PL.8	上；SK9 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（北から）	PL.30	上；SX15-3,-4 半截状態（南西から） 下；SX15-1~4 完掘状態（北西から）
PL.9	上；SK11 完掘状態（北東から） 下；SK12 完掘状態（北から）	PL.31	上；SD2 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（東から）
PL.10	上；SK13 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（北から）	PL.32	上；SD3 完掘状態（北から） 下；SD4 完掘状態（北から）
PL.11	上；SK15・16・17 半截状態（北から） 下；SK15 半截状態（東から）	PL.33	上；出土遺物1（外面；1~10） 下；出土遺物1（内面；1~10）
PL.12	上；SK15・16 半截状態（北から） 下；SK17 完掘状態（北から）	PL.34	上；出土遺物2 （外面；12~14,17,18,20,21,23,24） 下；出土遺物2 （内面；12~14,17,18,20,21,23,24）
PL.13	上；SK19 半截状態（南西から） 下；同 完掘状態（西から）	PL.35	上；出土遺物3（外面；25~27,29,32,34,35） 下；出土遺物3（内面；25~27,29,32,34,35）
PL.14	上；SK21 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（北東から）	PL.36	上；出土遺物4（外面；36~40,42,44~46） 下；出土遺物4（内面；36~40,42,44~46）
PL.15	上；SK25 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（南から）	PL.37	上；出土遺物5（外面；50~55,58,60,61） 下；出土遺物5（内面；50~55,58,60,61）
PL.16	上；SK24 半截状態（東から） 下；SK29 完掘状態（東から）	PL.38	上；出土遺物6（外面；63,67,69,73,76~80） 下；出土遺物6（内面；63,67,69,73,76~80）
PL.17	上；SK30 半截状態（南東から） 下；同 完掘状態（東から）	PL.39	上；出土遺物7 （外面；81,82,84,86~88,90~95） 下；出土遺物7 （内面；81,82,84,86~88,90~95）
PL.18	上；SK34 半截状態（南東から） 下；SK35 完掘状態（南から）	PL.40	上；出土遺物8 （外面；97~101,103~106,108,109） 下；出土遺物8 （内面；97~101,103~106,108,109）
PL.19	上；SK37 半截状態（南東から） 下；同 完掘状態（北から）	PL.41	上；出土遺物9 （外面；110,115,117,118,120,123,126,130,132,134） 下；出土遺物9 （内面；110,115,117,118,120,123,126,130,132,134）
PL.20	上；SK39 半截状態（南東から） 下；SK35（手前）・SK45（奥）完掘状態（南から）	PL.42	出土遺物10（28,85,111,112,113,131,133,68,96）
PL.21	上；SK41 半截状態（南から） 下；同 完掘状態（東から）		
PL.22	上；SK43 半截状態（南西から） 下；同 完掘状態（北から）		
PL.23	上；SK46（手前）・SK48（奥）半截状態（北東から）		

I 遺跡の位置

林田遺跡の位置

物部川は南四国を流域とし、太平洋に注ぐ規模の大きな河川の一つである。地質的には、流域の多くが秩父累帯に属している。流域面積は決して広くないが、その卓越した運搬力により山間部から土砂をもたらし、形成された香長平野は、南四国では数少ない纏った平野部を形づくっている。この川の中流域には、見事な河岸段丘が残されており、それらの多くは人々の生活の場として今なお活用され、今日までに多くの痕跡を留めてきた。下流域に至ると、嘗ての河道が形成した新旧の扇状地が後に浸食を受けたものの明瞭に残されており、これらは段丘崖と共にこの地域一帯の景観を構成し、特徴付けている。

林田遺跡は、このうち古い扇状地上に立地している。東側は大峰山－烏ヶ森山系と相接する場所を限りとし、西側は段丘崖によって画されている。遺跡域の多くは、段丘上の平坦面に在り、北側と南側は山裾に発する湧水を集めた小規模な河川によって、刻み込まれた谷と切り通し状に挟られた段丘崖となっている。現在の物部川河道は、遺跡域の南側で山裾に阻まれ大きく西へ迂回し、東岸では段丘状の平坦部は浸食を受け残存不良である。丁度、物部川左岸に広がっていた段丘平坦面の連続性が途切れる南端部分に相当する。

物部川下流域の遺跡

物部川の下流域右岸には、稲荷前遺跡、原遺跡、原南遺跡、高柳遺跡、高柳土居城跡、岩村遺跡群などが存在する。また、段丘上には、大塚遺跡やひびのき遺跡群などが存在している。稲荷前遺跡では、弥生中期後半の竪穴住居跡、古代の掘立柱建物跡や溝跡、中世の掘立柱建物跡、柵列、柱穴と時期不明な石室状遺構が発見されている。原遺跡では、弥生中期後半の竪穴住居跡と溝、古墳後期の土坑が発見されている。原南遺跡では、弥生中・後期の竪穴住居跡や溝などの遺構群、古代・中近世の遺構が検出されている。高柳土居城跡と高柳遺跡では、平成2年に発掘調査が実施されており、高柳土居城跡のものと考えられる二重の堀が城館を囲む形で発見されている。これらは、15世紀後半から16世紀前半に機能したものと考えられている。周辺の高柳遺跡では、城館が機能していた時期に相当する柱穴やピットが発見されている。また、12世紀～13世紀の土器が出土したSK1の存在から、周辺にもこの時期の遺構群があるものと考えられている。岩村遺跡群では、2条の堀が検出されており、15世紀代の岩村土居城跡にかかわるものと18～19世紀の近世屋敷地を囲むものと考えられている。出土遺物には、青磁、白磁、天目茶碗、東播系須恵器、東播磨系土師鍋、瓦質鍋、土師鍋などが見られている。

旧予岳寺跡は、山田氏が建立したとされる寺院跡であり、掘立柱建物跡3棟、礎石建物跡、苑池遺構が検出されている。大溝SD-5から出土した遺物から、機能時期は15世紀後半から16世紀前半と考えられている。大塚遺跡では、弥生時代の溝1条、土壇1基、性格不明遺構1基、古墳後期の円筒埴輪状須恵器、中世の溝4条、土壇7基、屋敷の区画溝、中世墓地区画などが発見されている。このうち、SK51は集石遺構であり、火葬墓と考えられている。出土遺物の多くは15世紀後半から16世紀前半のものであり、中にはSK57のように16世紀後半の遺構が存在する。ひびのきサウジ遺跡では、ひびのき遺跡群の構成する弥生後期後半から古墳時代初頭の集落跡が発見されてい

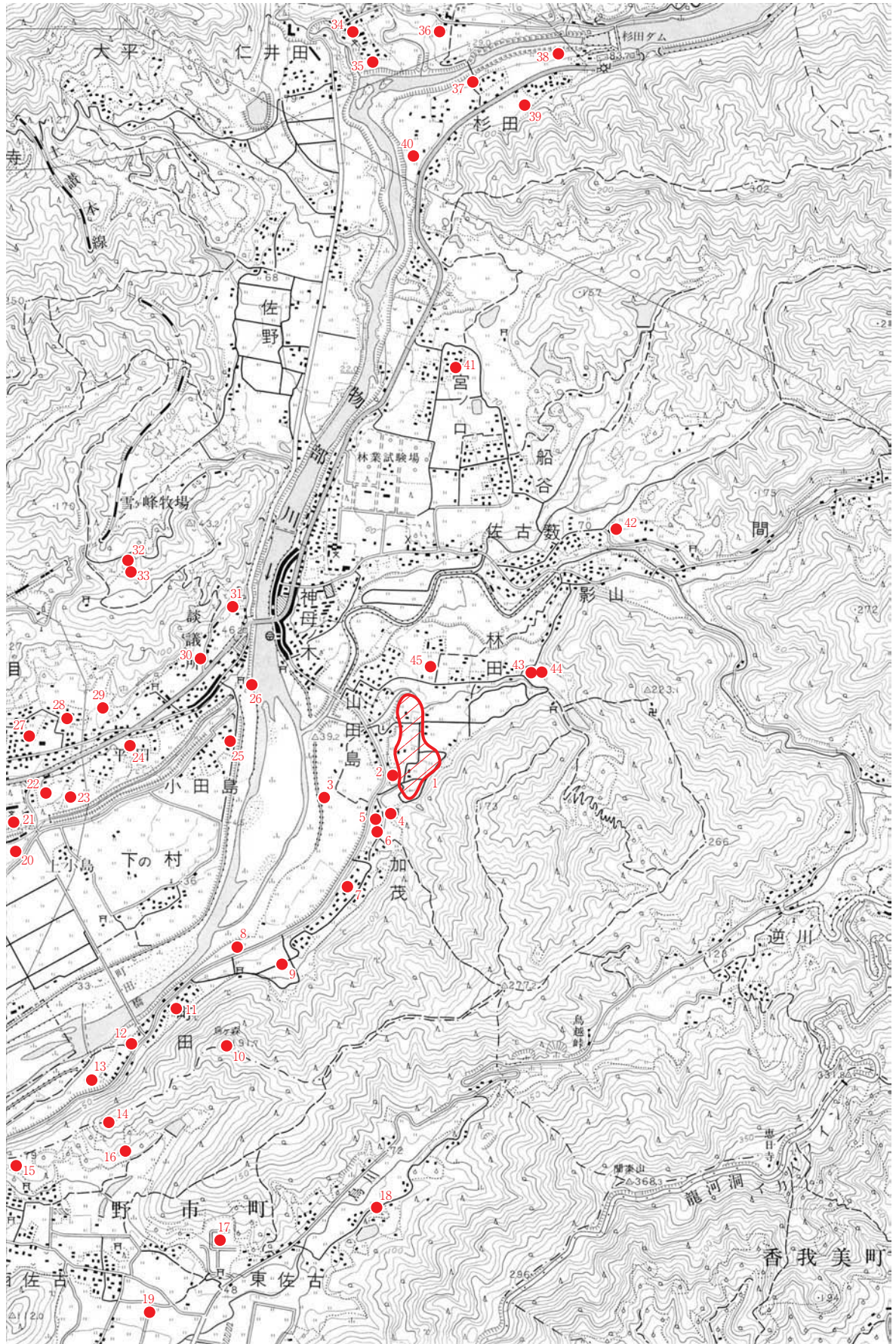


Fig. 1 林田遺跡の位置 (S : 1 / 25,000)

表1. 林田遺跡と周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	林田遺跡	弥生～中世	24	郷本遺跡	弥生・古墳
2	林田城跡	中世	25	小田島遺跡	奈良・平安
3	山田島遺跡	古墳・近世	26	山田堰	近世
4	日吉神社遺跡	平安	27	田所神社裏遺跡	弥生～中世
5	加茂ハイタノクボ遺跡	奈良・平安	28	横田遺跡	弥生～中世
6	山本前田窯跡	平安	29	南森城跡	中世
7	加茂遺跡	古墳～中世	30	宮田遺跡	弥生～近世
8	賀茂神社西遺跡	古墳～中世	31	雪ヶ峰城跡	中世
9	加茂城跡	中世	32	雪ヶ峰1号墳	古墳
10	烏ヶ森城跡	中世	33	雪ヶ峰2号墳	古墳
11	ガニウド遺跡	古墳～中世	34	佐岡土居城跡	中世
12	町田遺跡	弥生～中世	35	佐岡神殿遺跡	弥生～中世
13	町田堰東遺跡	縄文～中世	36	山田本村遺跡	奈良・平安
14	高田山城跡	中世	37	八坂神社遺跡	縄文～古墳
15	秋葉山城跡	中世	38	サルガ内ノ下遺跡	弥生
16	ノッゴ遺跡	弥生・平安	39	若一王子神道遺跡	中世
17	上分古墳	古墳	40	椎ノ木元遺跡	古墳～平安
18	小山谷古墳	古墳	41	宮ノ口遺跡	古墳～平安
19	東左古遺跡	弥生	42	影山城跡	中世
20	稻荷前遺跡	弥生～近世	43	林田1号墳	古墳
21	楠目遺跡	弥生～近世	44	林田2号墳	古墳
22	大西土居遺跡	弥生	45	シタノヂ遺跡	古墳～平安
23	前ノ芝遺跡	弥生～平安			

る。他に、10～11世紀の黒色土器や土師器が大量に出土した井戸跡が検出されている。また、中世の掘立柱建物跡、土坑状遺構、溝状遺構などが存在する。

物部川下流域の左岸には、深淵北遺跡、深淵遺跡、下ノ坪遺跡などが存在している。

深淵遺跡では、弥生後期後半と終末期の竪穴住居跡や古墳時代後期の集落跡が確認されている。古代では、掘立柱建物跡や土坑などが検出されており、鉞尾、円面硯、風字硯、墨書土器、緑釉陶器などが出土している。下ノ坪遺跡では、弥生後期前半の竪穴住居跡や土坑を伴う集落跡、古墳後期の竈を有した竪穴住居跡などが発見されている。また、古代官衙関連の掘立柱建物群が検出されており、八稜鏡や円面硯・風字硯、緑釉陶器などが出土している。

林田遺跡周辺の物部川左岸には、林田シタノヂ遺跡や加茂ハイタノクボ遺跡などが存在する。

加茂ハイタノクボ遺跡では、古代瓦が出土している。奈良時代の前期に善通寺、中村廃寺～宝幢寺～道音寺で使用された范型が、奈良時代の中・後期に当地にもたらされたものと考えられている。

龍河洞洞穴遺跡は、弥生中期の標識遺跡である。ここでは、鉄族、石錘、有孔鹿角製品、貝輪、骨製管玉、瑪瑙製勾玉や貝類・獣骨類の自然遺物が発見され、石灰華にまかれた「神の壺」が見られる。林田シタノヂ遺跡では、縄文後・晩期の土器が出土しておりP8からは中津式古段階の土器が出土している。また、時期は不明であるが、二重の溝による円形周溝状遺構が発見されている。

林田遺跡では、これまでに数度の発掘調査が実施されている。昭和58年に行われた調査では、弥生後期後半の竪穴住居跡5棟と土坑、ピットが検出されている。このうち、ST2からは多くの鉄族やヤリガンナなどが出土している。また、古代から中世にかけてのピット群が発見されており、白磁や青磁などの遺物が出土している。平成11年と12年にも調査実施されており、弥生後期中葉か

ら古墳時代初頭の集落を構成する竪穴住居跡11棟や土坑、ピットなどが発見されている。この中には、中世の大溝SD1が検出されており、16世紀代にその機能を失ったと考えられている。また、近世火葬墓SK10が発見されている。

中世に於いて、物部川左岸の段丘上で比較的水を得やすい山裾部分の宮ノ口、佐古藪などに、山田氏に係わる家臣、豪族の居館や城が存在した。このことを示す地名が良く残されており、林田遺跡と周辺にも小字地名として、“八幡”“御婆屋敷”“神ノ前”“前土居”“谷ノ屋敷”“北ノ屋敷”などの名が見られ、遺跡域の西側、段丘崖上に城館が存在していたと推定されている。また、加茂地区の南、烏ヶ森には山城が残されている。

古代国家に於ける官道の整備は精力的に進められたにも関わらず、南海道の路線変更などに見られるのは、河川や海を介した流通が各時代を通じて確立されており、経済的な基礎が出来上がっていたことを示唆するものであろう。そして、河川の利用は流域間を結びつけるだけに止まらず、海から直接河川を通じて河岸一帯にもたらされ、陸上交通を凌駕していたと考えられる。物部川が早くから交通の動脈として利用されていたことは、先述のような古代から中世にかけての主要な遺跡が立地し、官衙や城館にかかわる遺構や流通の痕跡を残す遺物が発見されていることから、想像に難くない。

参考文献

- 『日本の地質8 四国地方』共立出版1991年
- 『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会1979年
- 『稲荷前遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会1990年
- 『原南遺跡発掘調査報告書』財団法人高知県文化財団1991年
- 『高柳土居城跡、高柳遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会1994年
- 『岩村遺跡群Ⅰ』南国市教育委員会1996年
- 『旧予岳寺跡』土佐山田町教育委員会2003年
- 『大塚遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会1991年
- 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会1990年
- 『ひびのきサウジ遺跡Ⅱ』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- 『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会1989年
- 『下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会1997年
- 『林田シタノヂ遺跡Ⅱ』土佐山田町教育委員会1993年
- 『林田シタノヂ遺跡Ⅰ・Ⅲ』土佐山田町教育委員会2004年
- 『加茂ハイタノクボ遺跡』土佐山田町教育委員会 2000年
- 『林田遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会1985年
- 『林田遺跡Ⅰ』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- 『林田遺跡Ⅱ』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年

II 調査に至る経過

県道宮ノ口深淵線の整備事業は、土佐山田町の東部あたる宮ノ口から物部川左岸を通り、野市町の市街地へ至る主要道路として計画され、工事が実施されている。

現在、土佐山田町神母ノ木から野市町に至る県道は、物部川左岸を通る唯一の幹線道路である。しかし、多くの部分で道幅は狭く、日常生活はもとより物流の主たる大型車両や緊急車両の通行に困難を来す場合が多く、高知市や南国市域に隣接するものの、居住域としてその整備が遅れがちである。また、この道路が整備されることで、安芸・室戸などの県東部地域から土佐山田町域、とりわけ産業振興を目論んで設置された高知工科大学や史跡天然記念物である龍河洞等へ至る最短距離となる。

県道の整備計画域には、幾つかの遺跡が一部、または隣接して存在している。今回の工事計画地点は、林田遺跡の南端に相当し、現在は消滅しているものの林田城跡に隣接する部分である。

平成15年4月に高知県南国土木事務所は、高知県教育委員会に対して平成15年度内工事計画地点についての埋蔵文化財発掘調査の要請を行った。協議の結果、遺跡の保存状態を確認する為の試掘調査を財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターに委託した。当センターは、11月16・17日にこれを実施した。結果、遺構の保存状態が良好であったことから、平成16年1月20日から3月17日に亘って本調査を実施した。

III 調査の概要と経過・方法

1. 調査の概要

調査区は林田遺跡の南端であり、河岸段丘の崖上部に位置している。調査区の西側は10m程度の急斜面、南側は排水路と市道による切り通し、また北側は階段状に標高を下げる狭い耕作地によって画されている。調査区の西側では、表土掘削が終了した時点で、灰褐色砂礫層を検出面とする遺構群が検出された。遺構の多くは、灰褐色から黒褐色を呈する埋土を持ち、ピット以外の遺構については形態的に捉えづらい。中には、扁平な河原石を遺構内に留めているものがある。一部の遺構は、埋土として黒ボク土（旧表土）を起源とする土を有しており、出土遺物は僅かであるが、固く締まった遺構壁を保っている。調査区西端部の段丘崖傾斜が始まる部分には包含層が残されており、黒ボク土を起源とする堆積層が確認されている。東側では、表土下にシルト質の茶褐色土が発見され、これを検出面とする遺構群が存在していた。平面形態が長楕円を呈する規模の大きな遺構が見られ、これらの残存は良好であった。円形から楕円形を呈する土坑群の重複や先行すると考えられるピット群と土坑、またはピットとピットの切り合いが顕著である。遺構の状態はやや悪いものが多く、検出面からの深さが浅いものや遺構の底・側面に凹凸のあるものが見られる。後世に於ける削平や生物擾乱を受けたものであろう。

調査区内で検出された遺構は、掘立柱建物を構成するであろうピット約250個と土坑51基、竪穴状の性格不明遺構17基、溝状遺構とした3基である。出土遺物は、約2,000点であり、土師器、土師質土器を始め、縄文土器、弥生土器、須恵器、陶器、貿易陶磁、石製品、鉄製品などが見られる。

2. 調査の経過・方法

試掘調査に於いて遺構が良好に発見された部分を中心として調査区を設定した。表土の排除に際して土置き場を確保する為に、東西に大きく調査区を二つに分けた。先ず、北端部分の約100㎡について先行して調査を開始し、平成16年1月20日から重機による表土及び盛土の排除を行った。北端部の調査は1月26日に終了し、1月28日には調査区西側の包含層と遺構の精査を開始した。西側の部分では、調査区内に部分的な高さ1m程度の盛土が残されており、機械によってこれらの盛土は耕作土を主とする表土とともに一旦東側に排除した。西側の調査は2月4日の写真撮影によって終了した。最後に、東側の表土掘削は2月5日から2月9日まで行い、東側の調査は2月27日に終了した。遺構の掘削に際しては、遺物の出土状況及び、半截状況、完掘状況を適宜、写真と図面に記録した。全体的な完掘状態の写真については、先述のとおり調査区を分割したことから、北端部と調査区東西の3回に分けて記録した。また、遺構及び遺物の測量や取り上げに際しては、国土座標第IV系に則ってこれを行った。

IV 調査の成果

1. 基本層準 (Fig.3)

強い削平または侵食的環境の中で、経年の堆積状態を良好に残す部分を、ここでは提示することができない。ここに提示したのは、調査区の北東壁北端と北西壁西端である。前者は調査区中央平坦面から北側へ向かって緩やかに下る傾斜面であり、後者は西の段丘崖へと下り始めた部分に相当する。

北東壁セクション図に示したのは、1から4層であり、1層の盛土を除く2.灰黄褐色土、3.黒褐色土、4.にぶい黄橙色土のうち、2と3層は表土を形成したと考えられる。また、4層は段丘の構成層乃至は幾らか擾乱を受けたものであろう。遺構は2及び3層の堆積層中から下位層におよんだものとするのが適当であり、調査区の中央部に於いても北東壁に見られるような表土が存在他であらう。遺構の多くは検出面から比較的浅いものが多く、掘削当時は現在のような平坦な地形ではなく、多少の起伏を本来は持っていたであらう。調査区の東側で遺構検出面としたのは、4層下の明黄褐色土である。

北西壁セクション図に示したのは、1.褐色土、2.暗褐色土、3.暗褐色土、4.にぶい黄橙色土である。1層は表土層であり、現在の耕作土に相当する。2・3層は包含層であり、出土遺物によっては時期差が見られるが、分層はできなかった。遺構の埋土には一部で共通するものが見られることから、それらの土坑が機能していた時期には、この包含層が表土として卓越していたものであろう。出土遺物は、土師器、土師質土器他 (Fig.42) である。IV章3項では、この包含層をⅢ層として報告する。4層は段丘の構成層と考えられるが、やや固結が弱い。整地が行われたものか？

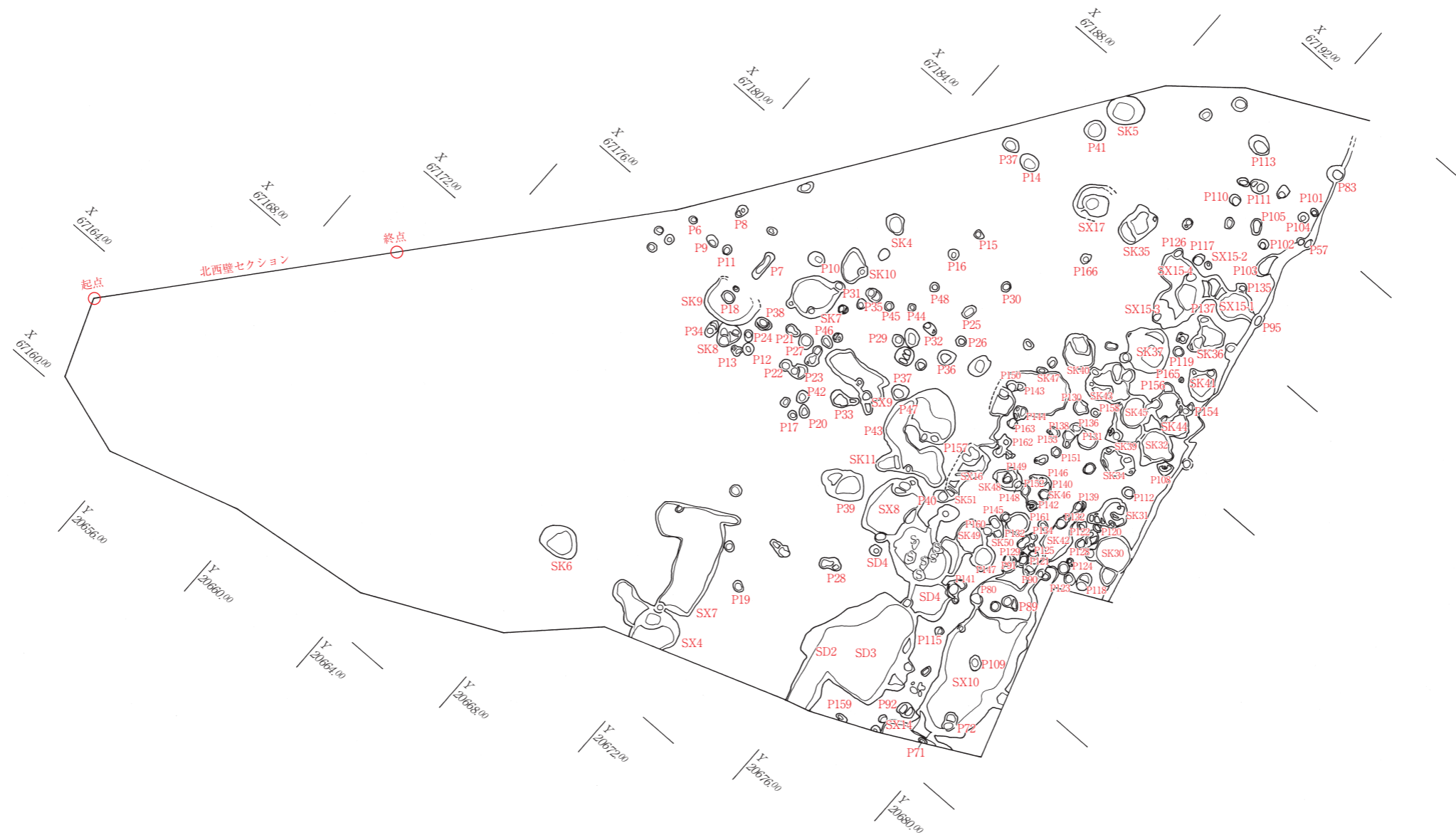
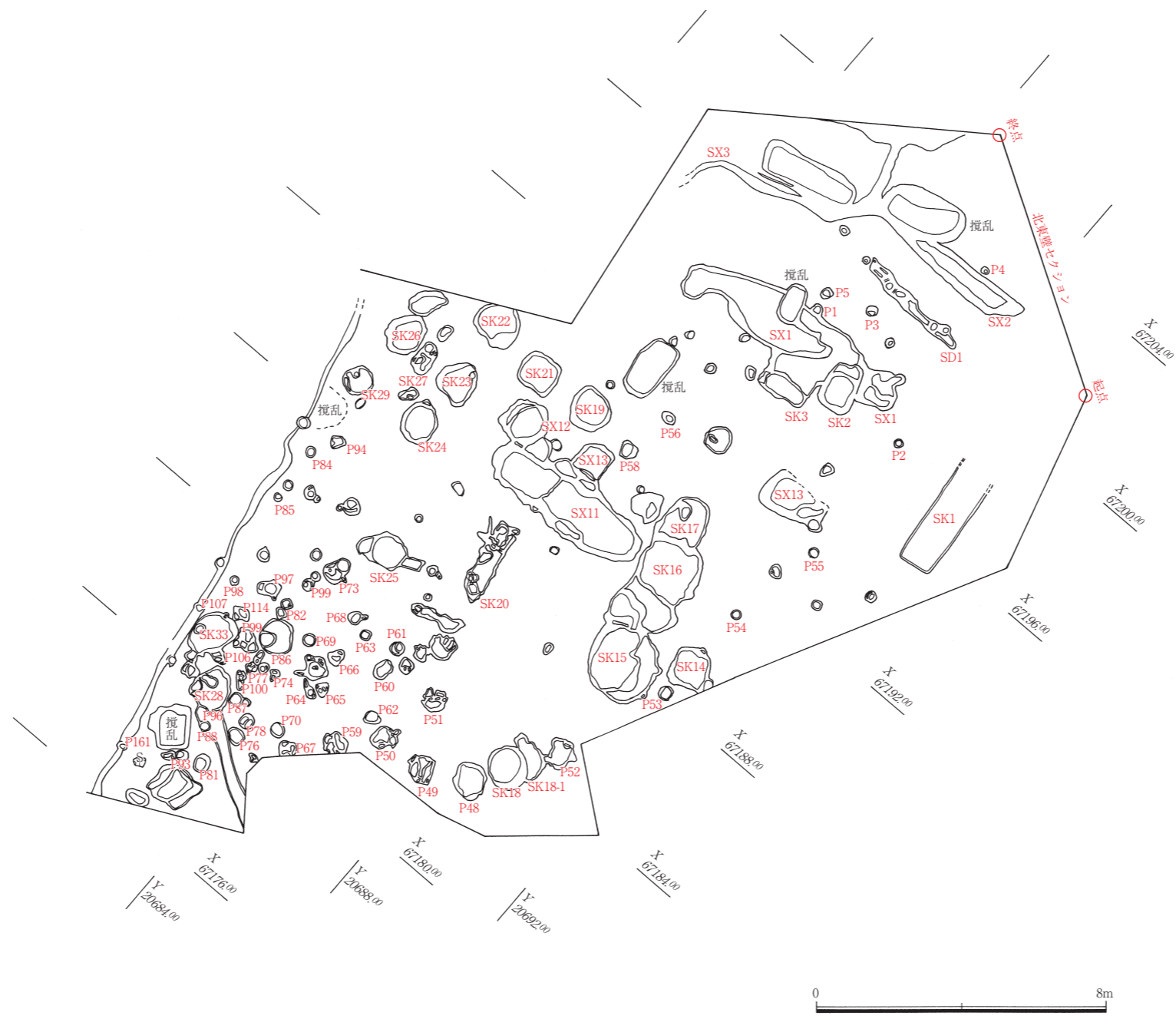
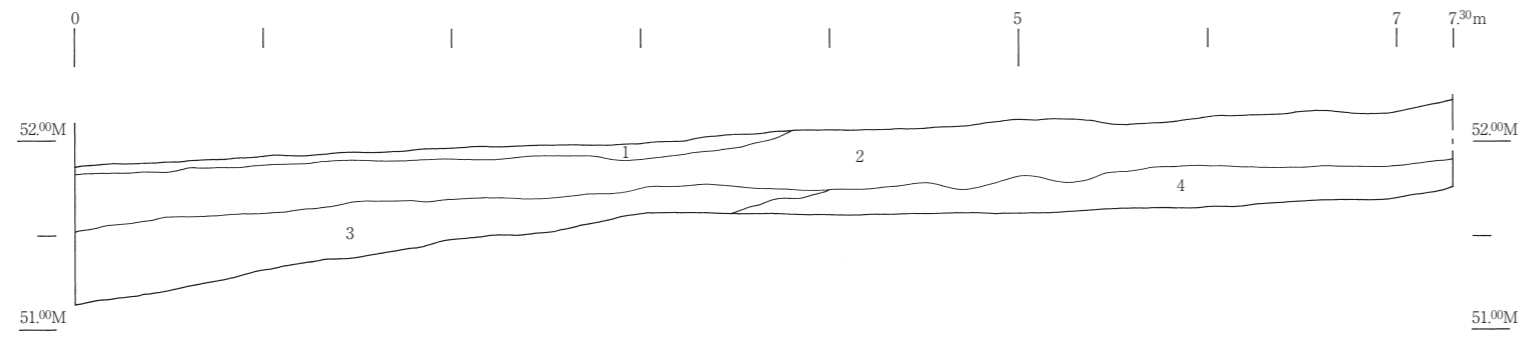


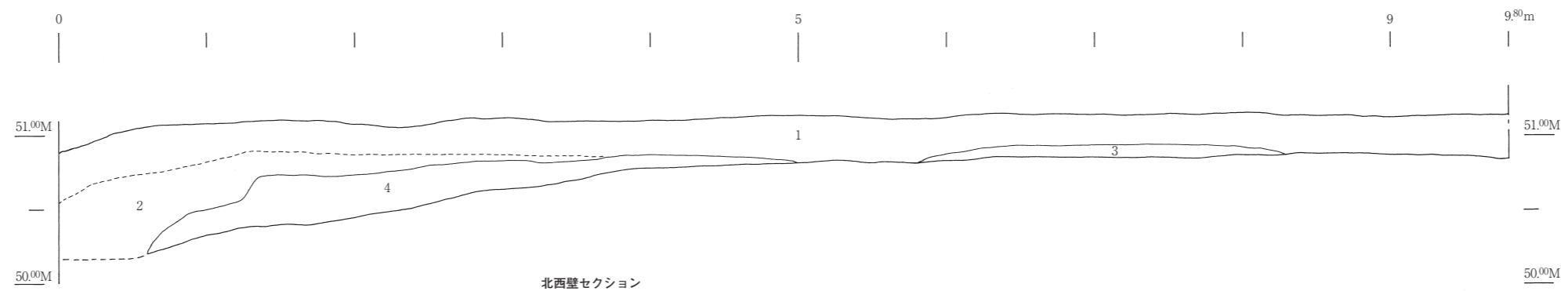
Fig.2 林田遺跡全体図 (S : 1 / 160)





北東壁セクション

- 北東壁セクション層序
- | | | | |
|---|---------|----------|----------------------------------|
| 1 | 浅黄褐色土 | 7.5YR8/4 | 盛土 |
| 2 | 灰黄褐色土 | 10YR6/2 | 東側上位では、木（竹）の根を多く含み、西側では締まりがやや強い。 |
| 3 | 黒褐色土 | 7.5YR3/2 | 遺物を少量含む。（黒ボク混） |
| 4 | にぶい黄褐色土 | 10YR6/4 | 固く締まりが強い。遺構検出層に近似する。 |
| 5 | 明黄褐色土 | 10YR6/6 | 遺構検出層 |



北西壁セクション

- 北西壁セクション層序
- | | | | |
|---|---------|---------|---|
| 1 | 褐色土 | 10YR4/4 | 表土 |
| 2 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 締まりややあり、粘性ややあり。色調は、下位に向かって漸移的に濃く変化する。土師器、土師質土器の破片を含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 締まりややあり、粘性ややあり。 |
| 4 | にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 締まりややあり、粘性ややあり。拳大から人頭大の河原石を多く含む。 |



Fig. 3 林田遺跡北東壁・北西壁セクション図 (S : 1 / 40)

2. 遺構と遺物

1) 土坑

SK 1 (Fig. 4)

調査区の北部に位置する。検出時点で遺構の北側は既に削平を受けており、全体規模は把握できていない。平面形態は長方形を呈し、南側の隅角は何れも直角に近く、また北側を除く各壁は垂直に掘削されており、人為的な制約が認められる。規模は東西幅約1m、残存長南北2m85cmを測る。遺構底面は砂礫層の上面であり、浅い凹凸を成す。検出面からの深さは、南側で約5cmを測る。長軸方向は南北(N-4°-W)である。SK1の検出は黄褐色土層の上面で行い、遺構埋土は黒褐色土(黄色土混)の一層であるが、下位には黄色土が多く混じるのが認められる。

出土遺物は弥生土器の胴体部2点、土師質土器の口縁1点、胴体部1点、底部1点である。

SK 2 (Fig. 5)

調査区の北部に位置する。不整形の広い竪穴状遺構SX1を切っている。平面形態は南側でやや幅が広がる隅丸長方形を呈している。規模は東西幅80cmから1mであり、南北1m30cmを測る。北側にやや浅い棚状の段部を有し、底面は船底状の緩やかな凸面を成す。検出面からの深さは、底部で約14cmを測る。長軸方向は、南北(N-11°-W)である。遺構埋土は、灰色土(黄色土混)の単純一層である。

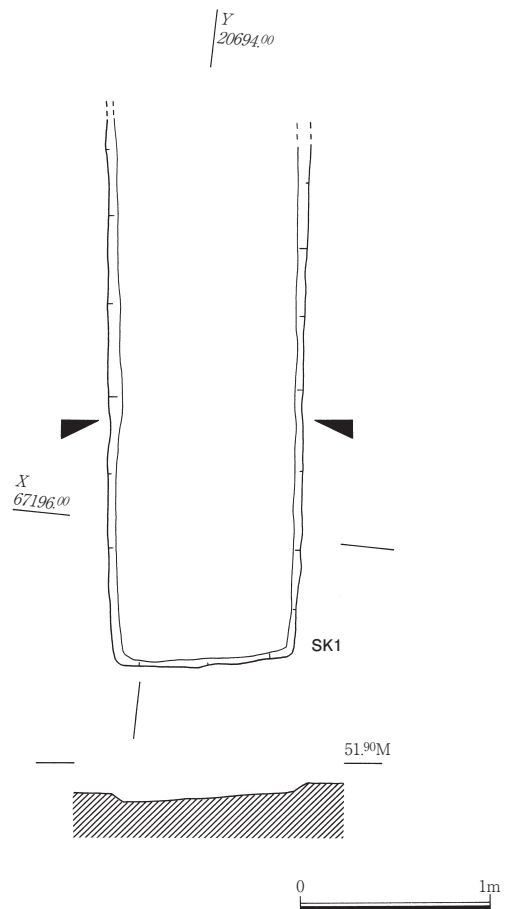


Fig. 4 SK 1 平・断面図 (S : 1 / 40)

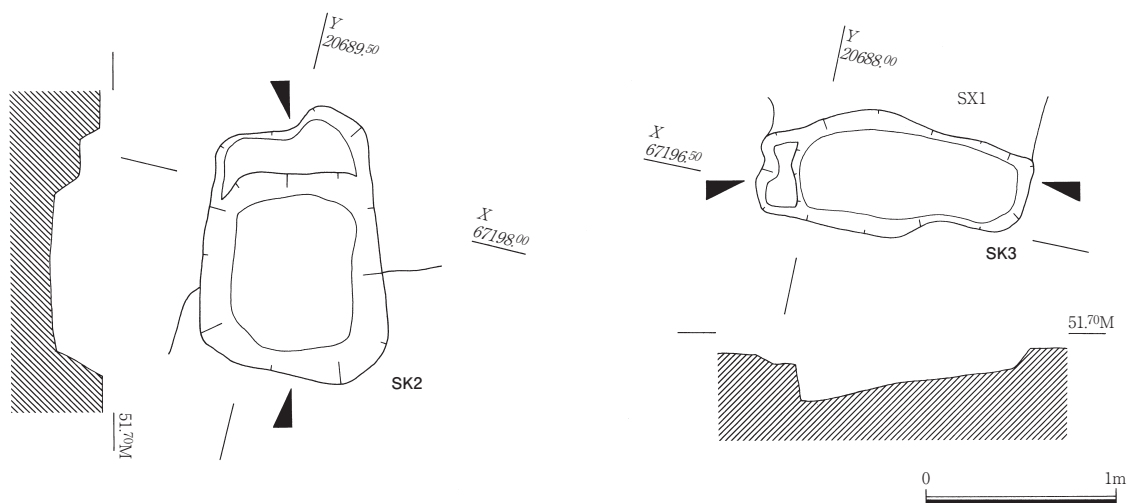
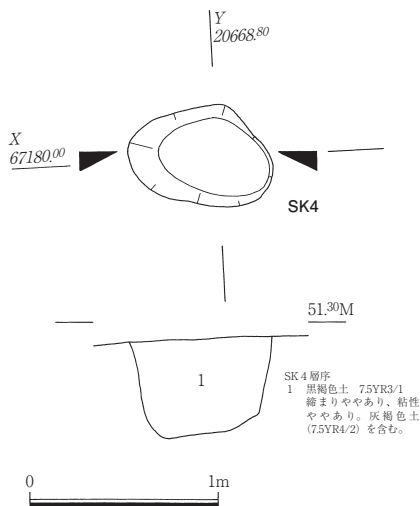


Fig. 5 SK 2・3 平・断面図 (S : 1 / 40)

出土遺物は弥生土器の胴体部2点、土師質土器の口縁1点、細片30点、陶器(釉掛け)の胴体部1点である。

SK3 (Fig.5)

調査区の北部に位置する。SK3はSX1よりも先行して存在した遺構の一部であった可能性があり、ここではそのうちやや深い部分をSK3として示した。平面形態は不整楕円形を呈する。規模は長径東西1m40cm、短径南北約60cmを測る。底部は東側で浅く西側では深い。南北方向は船底状を成す。検出面からの深さは、22cmを測る。長軸方向は東西(N-83°-E)である。遺構埋土は、茶褐色土(黄色土混)の単統一層である。



出土遺物は弥生土器の胴体部2点、須恵器の胴体部2点、土師質土器の口縁1点、底部1点、胴体部19点である。

SK4 (Fig.6)

調査区の中央部西寄りに位置する。検出面は固く締まりを有する段丘構成の砂礫層であり、柱痕などは認められないが中心の構造物を安定させる為か、周囲に円礫を積んだ(多く詰めた?)可能性が高い。平面形態は楕円形であり、規模は80×54cm、検出面からの深さは50cmを測る。遺構埋土は黒色土(黒ボク)であり、埋土の中には円礫を含んでいない。SK5・6などと共通する形態と埋土を持つ。

出土遺物は、縄文土器の細片である。

Fig.6 SK4平・断面図 (S : 1 / 40)

SK5 (Fig.7・36)

調査区の中央部北壁際で発見された。ここも検出面は砂礫層であり、SK4と同様に主な埋土は黒色土である。SK4ほど明瞭ではないが、遺構の周囲に円礫が多く存

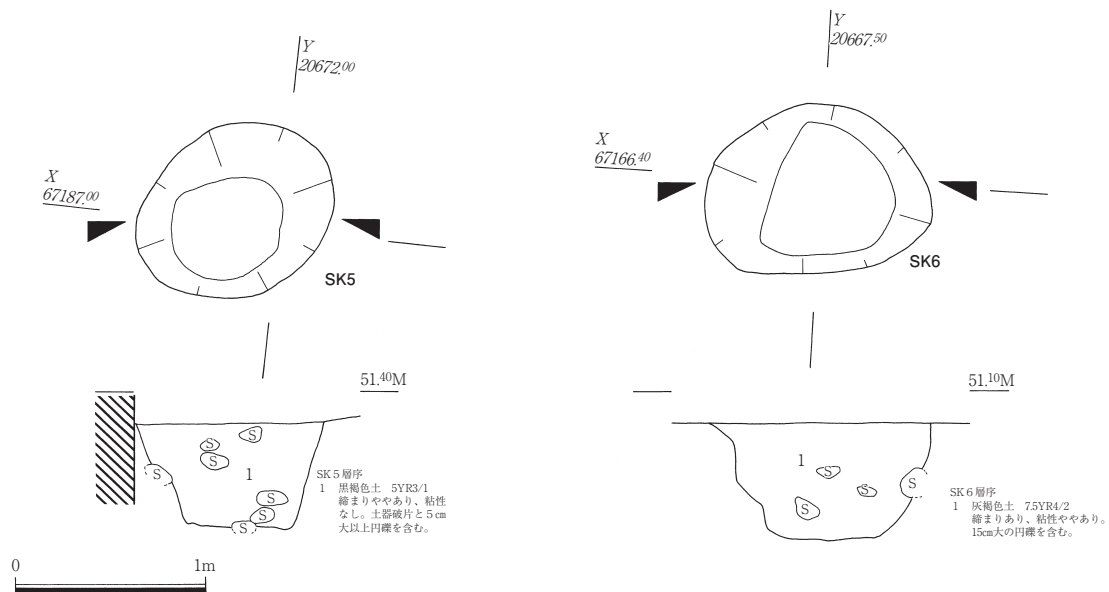


Fig.7 SK5・6平・断面図 (S : 1 / 40)

在し一種の壁を形成している。埋土中には拳から人頭大の円礫が入っている。平面形態は楕円形であり、規模は110×90cm、検出面からの深さは、57.5cmを測る。

出土遺物は、縄文土器の胴体部2点、弥生前期土器の胴体部1点、土師質土器の皿1点と細片である。このうち図示したのは、土師質土器の小皿(1)と外面に縄文を残す深鉢の体部破片(2)である。

SK6 (Fig. 7)

調査区の中央部南東寄りに位置する。検出面は砂礫層であることから、上位は幾らか削平を既に受けている。平面形態は楕円形であり、規模は118×90cm、検出面からの深さは、61cmを測る。遺構埋土は黒色土(黒ボク)であるが、SK4・5に比較するとやや灰色を強く帯びている。埋土の中には人頭大の円礫を底部に至るまで含んでいる。

出土遺物は、土師質土器の胴体部1点である。

SK7 (Fig. 8・36)

調査区の中央部西寄りに位置する。北東側をやや後出するP31に切られ、南と南西側でそれぞれ1個のピットを切っている。平面形態は円形であり、規模は直径1m30cmを測る。底部は広く概ね平らであり、壁は比較的急に立ち上がる。検出面からの深さは、39cmを測る。遺構埋土は、1.暗褐色土 2.暗褐色土 3.黒褐色土 4.黒褐色土が認められる。

出土遺物は、弥生土器の胴体部4点、土師器の底部2点、土師質土器の口縁24点、胴体部53点、底部9点、甕の胴体部2点、瓦質土器の口縁1点、鉢1点、陶器の胴体部1点、磁器の口縁1点である。このうち図示したのは、3が土師器の椀底部、4・5は土師質の杯底部で回転糸切り痕を残す。6は瓦質のこね鉢口縁、7は土師質の甕胴部か。

SK8 (Fig. 2)

調査区の中央部西寄りに位置する。数個のピットの重複により、土坑状の広がりを持った遺構であろう。北側をSK9に、西側をP18に切られている。平面形態は不整形円形であり、残存規模は70×66cmである。検出面からの深さは、ピット状の深い部分で37cmを測る。遺構埋土は、SK4と近似する黒色土(黒ボク)である。

出土遺物は、土師質土器の口縁4点、胴体部6点である。

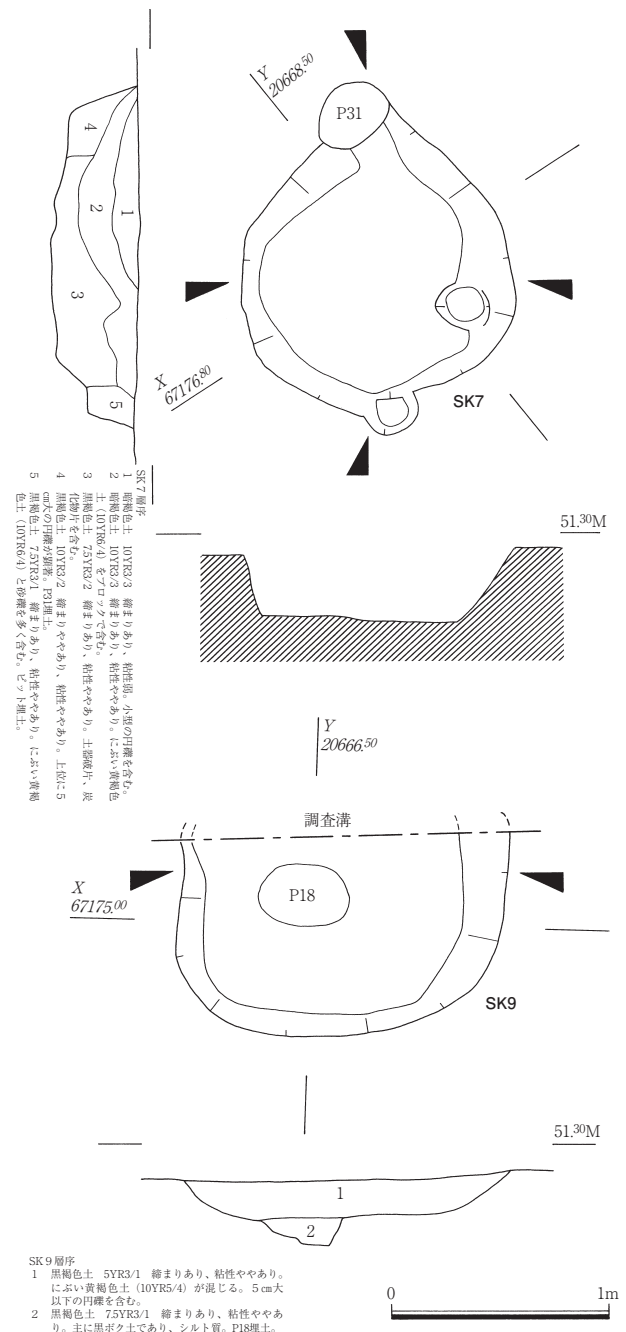


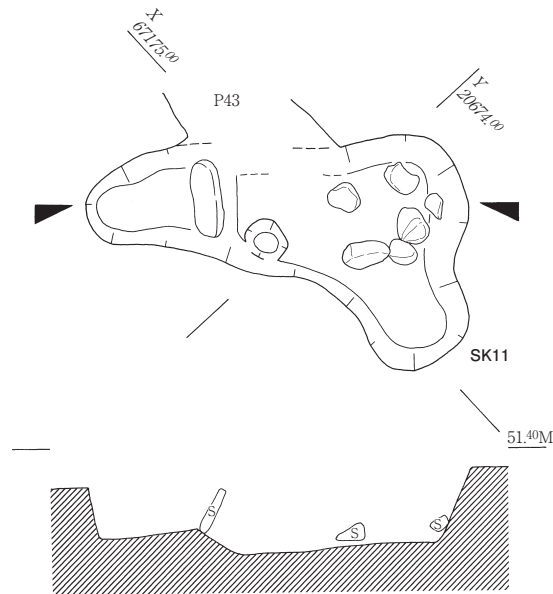
Fig. 8 SK7・9平・断面図 (S : 1 / 40)

SK9 (Fig. 8)

調査区の中央部西寄りに位置する。南側でSK8、中央ではP18を切っている。また、北側でピットに切られている。遺構の北端は、幅30cmの調査溝により明確にすることはできなかった。恐らく北への広がりはいささか小さいものであろう。平面形態は隅丸方形か、不正方形か。残存規模は150×100cmである。遺構底面は平らであり、検出面からの深さは、19cmを測る。主軸方向は南北(N-4°-E)である。遺構埋土は、黒褐色土(黄褐色土混)の単純一層である。

出土遺物は、須恵器の甕胴部1点、土師質土器の口縁4点、胴体部20点、底部1点である。

SK10 (Fig. 2・36)



調査区の中央部西寄りに位置する。SK7の北側に隣接して存在する遺構であり、東側でピットを切る。SK10の西端部分は調査溝の設定により明確にすることができなかった。平面形態は不整形と考えられ、残存規模は72×70cmである。遺構の底面は、浅い東側から西へ向かって傾斜する。検出面からの深さは、最大で23cmを測る。主軸方向は、N-59°-Wである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、土師質土器の口縁7点、胴体部9点、底部1点である。このうち図示したのは、土師質土器の杯2点である。8はやや肥厚する口縁部、9は底部で回転糸切り痕を残す。

SK11 (Fig. 9・36)

調査区の中央部西寄りに位置する。検出時には、平面形態が隅丸方形から楕円形を呈した小規模な遺構を想定していた。しかし、精査を行うにつれ遺構範囲は拡大し、最終的には他遺構との重複や結合に至った。遺構中には人頭大の円礫や40cm大の扁平な河原石が立った状態で出土している。また、炭化物や焼土の出土が見られた。平面形態は不整な隅丸長方形であり、遺構主体の残存規模は200×70cmである。遺構底部は先述の立石を境として、南西側で浅く、中央部から北東側では深い。検出面からの深さは、遺構中央部で36cmを測る。長軸方向は、N-38°-Eである。遺構埋土は黒褐色土であり、SK11

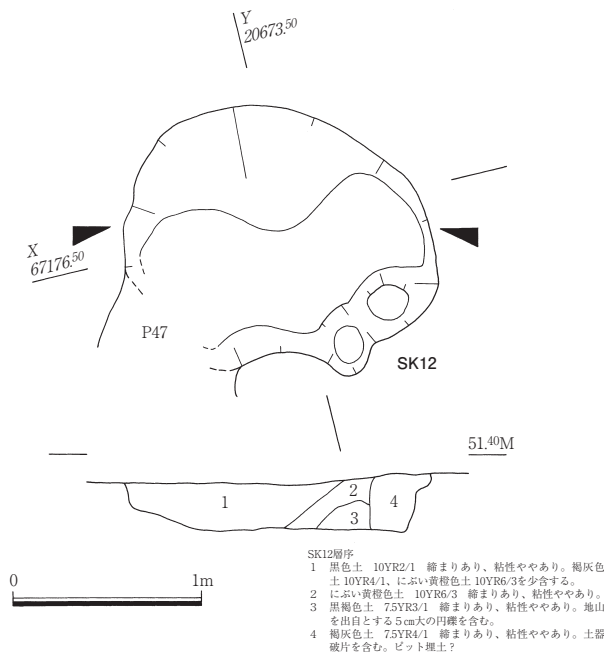


Fig. 9 SK11・12平・断面図 (S : 1 / 40)

を含めた周辺遺構の検出層である砂礫層の粗砂が多く混ざっている。SK11の南西側に存在するP39とした遺構からも扁平な川原石が出土していることから、土壙的性格の遺構と考えられる。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点、胴体部20点、鍋の胴体部1点、甕の口縁1点、磁器の口縁1点である。このうち図示したのは、土師質で短頸の壺口縁(10)と染付の皿口縁(11)である。

SK12 (Fig.9・36)

調査区の中央部西寄りに位置する。南側で後出する2個のピットに切れ、東端部もピットに切られていた可能性がある。また、南東側ではP47を切る。平面形態は不整円形から楕円形であり、規模は168×140cmである。遺構壁は北側と南側で緩やかであり、本来は播鉢状に近い形態を示していたものか。東側壁の急なのはピットに由来するものであろう。検出面からの深さは、38cmを測る。遺構埋土は、1.黒色土、2.にぶい黄橙色土、3.黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点、胴体部20点、鍋の胴体部1点、甕の口縁1点、磁器の碗口縁1点である。このうち図示したのは、3点である。13は土師器の椀で形骸化した高台が付く。12と14は土師質土器の杯底部である。

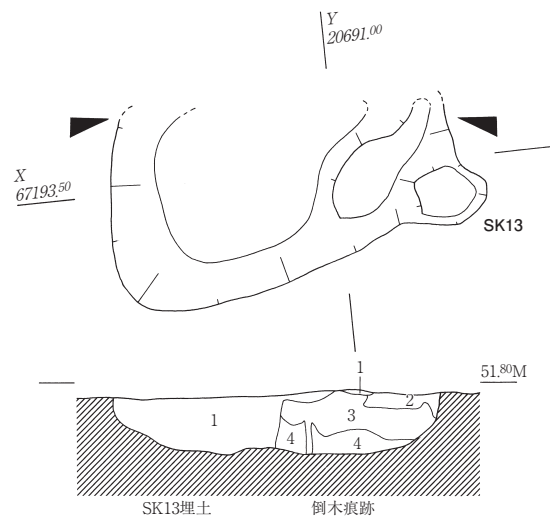
SK13 (Fig.10)

調査区の中央部東寄りに位置する。倒木痕跡のうち、腐植土を含んだ層準の一部を破壊して掘削された遺構であり、遺構全体のおよそ半分について調査を行った。確認された部分から推して、平面形態は不整楕円形と考えられる。確認規模は184×95cmである。遺構は壁から底部にかけて連続的な傾斜を持つ。検出面からの深さは、33cmを測る。遺構埋土はにぶい黄褐色土であり、暗灰褐色土を含んでいる。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、須恵器の胴体部1点、甕胴体部1点である。

SK14 (Fig.10)

調査区の中央部東寄りに位置する。北側と東側で、黒褐色土を埋土とする浅い円形のピットを切っている。平面形態は隅丸方形であり、規模は一辺約110cmを測る。遺構底部は概ね平らであり、壁は急に立ち上がる。検出面からの深さは、11cmを測る。主軸方向は、N-19°-Wである。遺構埋土は礫を



- SK13層序
- 1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 締まりあり、粘性ややあり。暗灰褐色土が混じり、検出状態では不明瞭で白く乾く。5~10cm大の礫を含む。SK13埋土。
 - 2 にぶい黄褐色土 10YR6/4 締まりあり、粘性ややあり。地山の黄色(明黄褐色土 10YR6/4)に比べてやや暗色。
 - 3 黒褐色土 10YR2/3 締まりあり、粘性ややあり。黒ボク土、5mm大の砂粒を少量含み。
 - 4 にぶい黄褐色土 10YR6/4 黒褐色土10YR2/3をブロックで含む。2~4層は、倒木根の埋積土層。

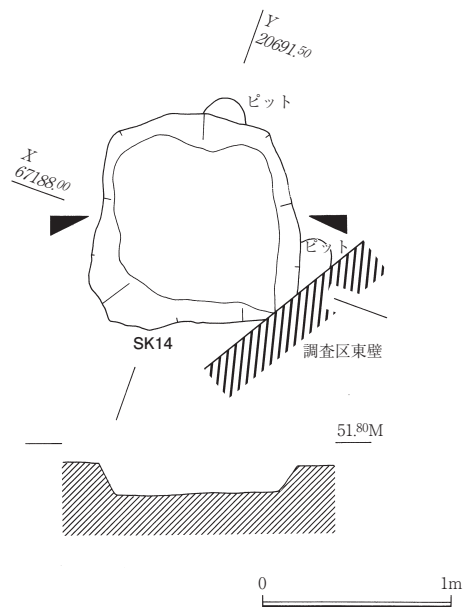


Fig.10 SK13・14平・断面図 (S : 1 / 40)

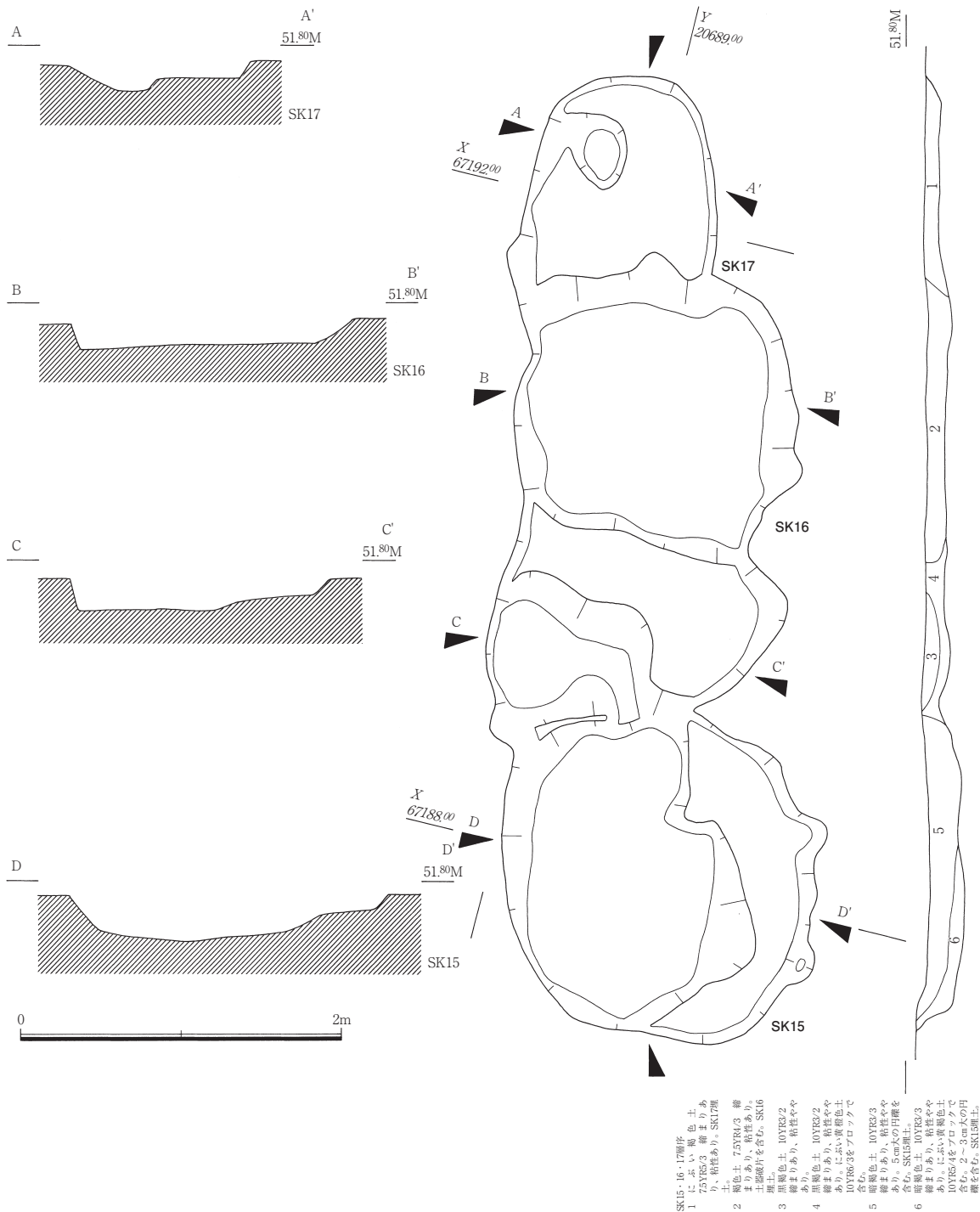


Fig.11 SK15・16・17平・断面図 (S : 1 / 40)

少量含んだ灰褐色土であり、炭化物を含んでいる。

出土遺物は、弥生土器の胴体部2点、土師質土器の細片である。

SK15 (Fig.)

調査区の中央部東寄りに位置する。SK15からSK17は互いに一部または大部分が重複しており、検出時には長楕円の遺構として捉えられた。SK15は北側でSK16との間に先行して存在した遺構を破壊している。

平面形態は不整形円形であり、規模は直径約2mを測る。遺構は西側で深く、東側では浅い。漸移的に東壁は緩く立ち上がる。検出面からの深さは、28cmを測る。遺構埋土は、5.暗褐色土と底部に6.にぶい黄褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点、胴体部38点、底部1点と細片、磁器の染付胴体部1点である。

SK16 (Fig.11)

調査区の中央部東寄りに位置する。北側でSK17を切っている。また、南側ではSK15との間に存在した遺構を切っている。平面形態は不整形方形であり、規模は一辺約140cmを測る。遺構底部は緩い凸面を成し、壁はやや急に立ち上がる。検出面からの深さは、15cmを測る。主軸方向は、N-8°-Wである。遺構埋土は、褐色土の単統一層である。

出土遺物は、土師質土器口縁4点、胴体部22点と細片である。

SK17 (Fig.11)

調査区の中央部東寄りに位置する。南側でSK16に切られる。平面形態は隅丸方形から楕円形であり、規模は一辺120cmを測る。底部には浅い凹部が存在するものの概ね平らであり、壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは10cmを測る。主軸方向は、N-11°-Wである。遺構埋土は、黄色土を含むにぶい褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、土師質土器の胴体部3点である。

SK18 (Fig.12・36)

調査区の中央部東寄りに位置する。検出時には不整形を呈する一つの土坑と考えられていた。後に、SK18とした円形の遺構部分と、それよりも先行する不整形な遺構(SK18-1)の一部を認識するに至った。SK18の規模は、直径120cmを測る。底部は周辺部分がやや深く、中央部は緩い凸面を成す。検出面からの深さは、19cmを測る。遺構埋土は黒褐色土であり、にぶい黄褐色土を含んでいる。

出土遺物は、弥生土器の胴体部9点、土師質土器の口縁35点、胴体部

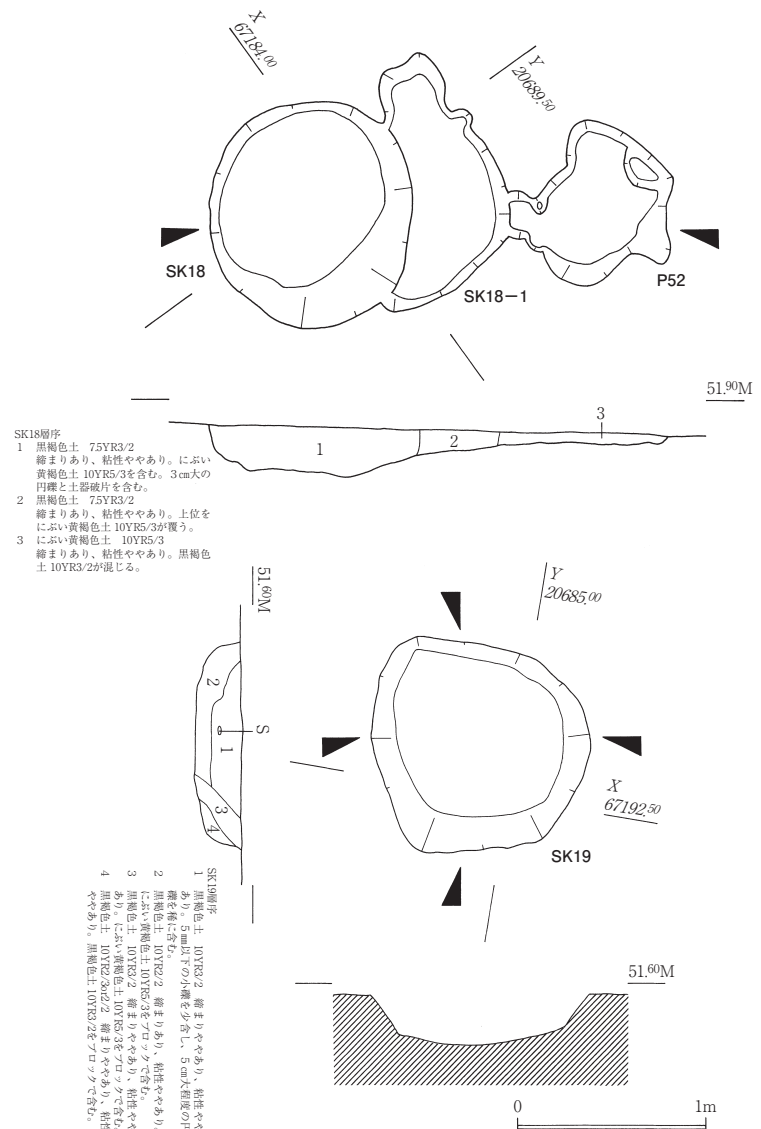


Fig.12 SK18・18-1・19・P52平・断面図 (S : 1 / 40)

264点、底部5点、陶器の胴体部4点、白磁4点である。このうち図示したのは、3点である。15は白磁の皿体部である。16は陶器の椀？ 17は土師質の鍋か釜胴部である。

SK18-1 (Fig.12)

調査区の中央部東寄りに位置する。西側で遺構の大部分をSK18に切られる。また、東側でP52と一部が接する。平面形態は不整形円形であり、残存規模は134×54cmを測る。底部はSK18に比べて浅く、西側に傾斜する。検出面からの深さは、10cmを測る。遺構埋土は黒褐色土であり、上位は黄褐色土が覆う。

出土遺物は、土師質の鍋1点である。

SK19 (Fig.12・36)

調査区の中央部東寄りに位置する。検出時の平面形態は円形と判断したが、完掘後は方形に近く、規模は一辺約110cmを測る。底部は、概ね平らな面を成し、断面は船底形を成す。検出面からの深さは、27cmを

測る。遺構埋土は、1.黒褐色土、2.黒褐色土(にぶい黄褐色土をブロックで含む)3.黒褐色土(にぶい黄褐色土をブロックで含む)4.黒褐色土である。主軸方向はN-12°-Wである。方形土坑SK20と関わりを持つものか。

出土遺物は、弥生土器の胴体部6点、土師質土器の口縁15点、胴体部54点、底部71点、瓦質土器の胴体部1点、鍋体部1点、陶器の胴体部1点、甕胴部1点である。このうち図示したのは、糸切り痕を残す土師質土器の杯底部(18)と黄灰色を呈す須恵器の甕胴部(19)である。

SK20 (Fig.2)

調査区の中央部東寄りに位置する。検出時はピット状の遺構として扱った。遺構埋土は薄い灰褐色を呈し、焼土塊を含んでいる。乾燥すると遺構検出面とした茶褐色土と区別し難い。ただ埋土部分は比較的固結が弱いことから精査を行った。結果、凹凸の激しい底面が現れた。SK20の極浅い部分に人為的な要素を残し、下位は生物擾乱?によるものであろうか。平面形態は不整形長方形を呈し、規模は長辺2m36cm、短辺約60cmを測る。検出面からの深さは、27cmを測る。SK20の南側にも似た埋土を有する東西方向の溝状遺構があるが、これも成因は同じであろう。

出土遺物は、土師質土器の胴体部1点である。

SK21 (Fig.13・36)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺100~110cmを測る。底部は、緩やかな凹面を成し、四壁はやや急に立ち上がる。検出面からの深さは、22cmを測る。遺構埋土は、黄色土の混じった黒褐色土である。主軸方向は、N-3°-Wである。東に隣接するSK19と何らかの関わりを持つ

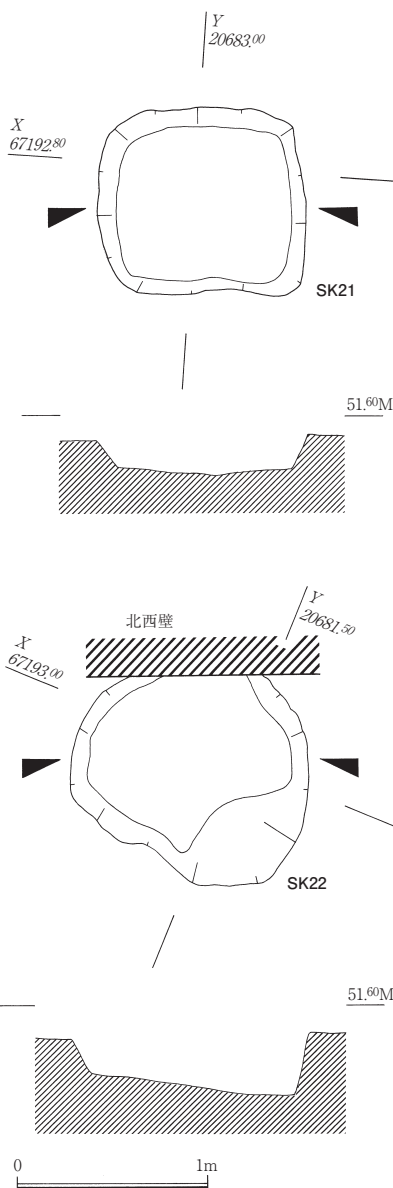


Fig.13 SK21・22平・断面図 (S : 1 / 40)

ものか。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、須恵器の甕胴部1点、青磁胴体部1点である。このうち図示したのは、糸切り痕を残す土師質土器の底部(20)である。

SK22 (Fig.13・36)

調査区の中央部東寄りに位置する。北側の一部を調査区北西壁に画される。平面形態は楕円形と考えられる。規模は長径1m30cm、短径1m16cmを測る。底部は東側に向かって傾斜する。検出面からの深さは、34cmを測る。長軸方向は、N-79°-Wである。遺構埋土はSK19埋土と近似するものであり、灰褐色土をブロックで含む黒褐色土(3cm大の円礫を含む)である。

出土遺物は、土師質土器の口縁6点、胴体部65点、底部6点、青磁の碗1点である。このうち図示したのは、4点である。22は龍泉窯系の青磁碗と考えられる。21は土師質土器の小皿、23と24は土師質土器の杯底部であり、回転糸切り痕を残す。

SK23 (Fig.14・36)

調査区の中央部東寄りに位置する。北側にピットを検出したが新旧関係は不明である。複数の遺構の重複か、検出時はやや形態が不明瞭であり、東側に張り出し部の存在を認める。ここでは、遺構埋土とされる黒褐色土の埋積範囲を遺構として扱った。

平面形態は不整形を呈し、規模は一辺110cmを測る。底部は、南へ向かって緩やかに傾斜し、特に北壁は底部から緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは、12cmを測る。主軸方向は、N-8°-Wである。遺構東側では埋土に黄色土が混じり、南側では黄色土がブロックで含まれている。

出土遺物は、土師質土器の口縁3点、胴体部9点、底部2点、陶器の胴部1点である。このうち図示したのは、土師質土器の皿(25)と静止糸切

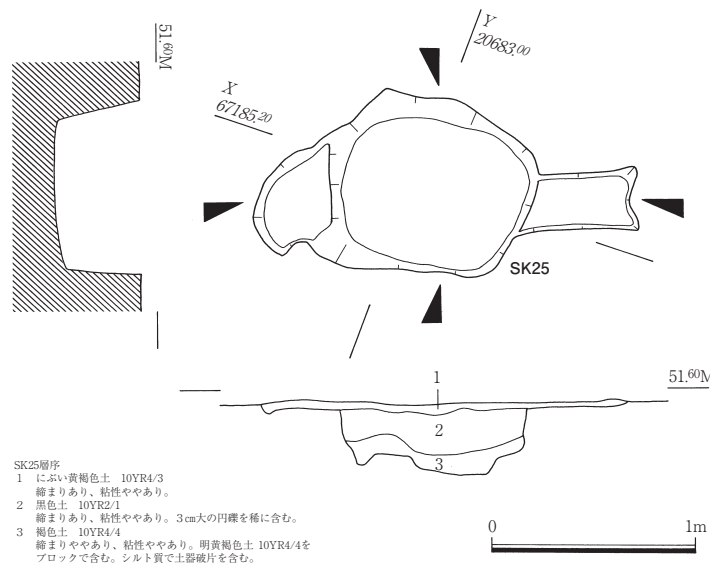
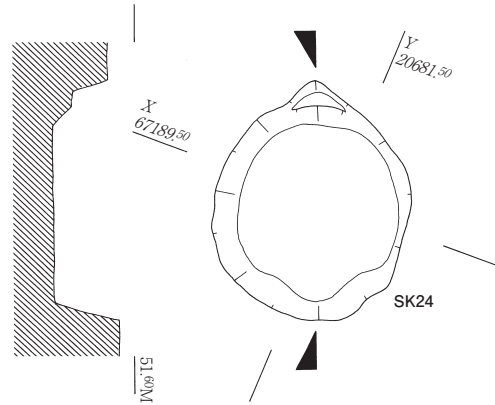
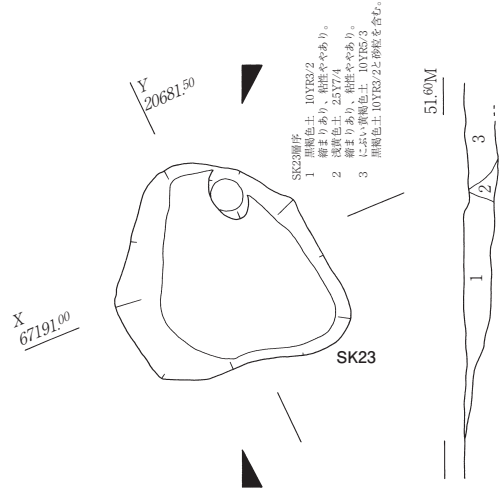


Fig.14 SK23・24・25平・断面図 (S : 1 / 40)

り痕を残す土師器の杯底部(26)である。

SK24 (Fig.14・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1m26cm、短径1mを測る。底部は平らな面を成し、壁は急に立ち上がる。北側の一部にやや浅い段部が存在する。検出面からの深さは、32cmを測る。長軸方向は、N-20° -Wである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、土師質土器の口縁21点、胴体部32点、底部8点、皿1点、瓦質土器の鍋口縁1点、三足鍋脚1点である。このうち図示したのは、4点である。27は瓦質の鍋である。28は土師質の小皿、29と30は土師質の杯であり、いずれも底部に回転糸切り痕を残す。

SK25 (Fig.14)

調査区の中央部東寄りに位置する。主体部の平面形態は円形を呈し、東側と西側には浅い張り出し部が存在する。規模は直径約1mを測る。底部には大きな起伏が存在するが、内部構造の痕跡は認められない。検出面からの深さは、40cmを測る。遺構埋土は、1.にぶい黄褐色土、2.黒色土、3.褐色土である。礫や粗砂のブロックが初期の埋積段階に認められ、東西の張り出し部分を含んだ埋積は最終段階で行われたものと考えられる。

出土遺物は、縄文土器の深鉢胴体部2点、土師質土器の胴体部1点である。

SK26 (Fig.15)

調査区の中央部東寄りに位置する。遺構は礫層に掘削されており、平面形態は不整楕円形を呈する。規模は長径1m30cm、短径1mを測る。底部は鍋底状であり、緩やかな凸面を成す。検出面からの深さは、20cmを測る。長軸方向は、N-10° -Eである。遺構埋土は黒褐色土であり、部分的に黄色土のブロックが見られる。

出土遺物は、土師質土器の口縁12点、胴体部25点、底部5点、陶器の鉢胴体部1点である。

SK27 (Fig.2)

調査区の中央部東寄りに位置する。SK26に隣接して存在する。平面形態は不整長方形を呈し、規模は90×52cmを測る。底部は、一様でなくやや起伏が激しい。

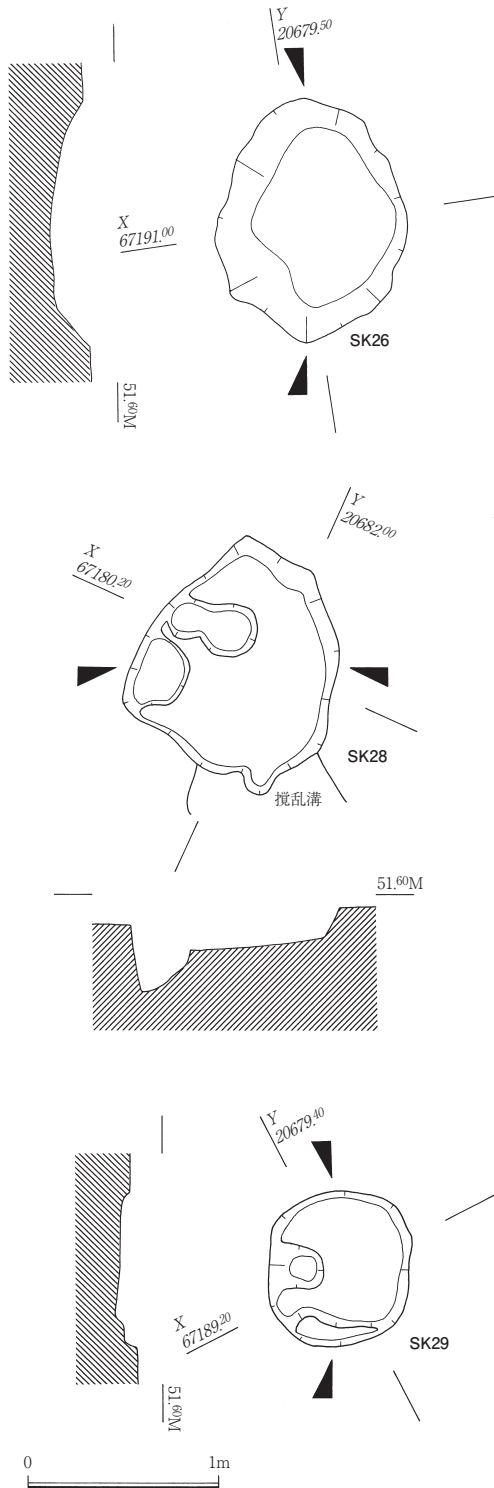


Fig.15 SK26・28・29平・断面図 (S : 1 / 40)

検出面からの深さは、14cmを測る。長軸方向は、ほぼ南北方向である。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点と細片である。

SK28 (Fig.15・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。上位は、浅く現代の溝によって攪乱を受けている。南端でP97と重複するが、先後関係は不明である。平面形態は不整形を呈し、規模は一辺1m10cmを測る。底部は平らな面を成し、一部では10cm程度のピット状をした落ち込みが認められる。検出面からの深さは、20cmを測る。主軸方向は、N-12° -Eである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁5点、胴体部24点、底部5点、陶器の底部1点である。このうち図示したのは、黄灰色を呈した陶器?の碗底部(31)と、糸切り痕を残す土師質土器の杯底部(32)である。

SK29 (Fig.15)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺約80cmを測る。底部は緩やかな凹面を成し、南側は小さな段状を成す。西端では7cm程度の落ち込みが認められる。検出面からの深さは、10cmを測る。主軸方向は、N-27° -Eである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点、胴体部1点と細片である。

SK30 (Fig.16・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。保存の良好な土坑の一つである。現代の溝に東端で接し、南端ではピットに切られる。西側でピットと重複し、一部を破壊している。平面形態は円形を呈し、規模は直径1m14cmを測る。底部は概ね平らであり、壁は急に立ち上がる。検出面からの深さは、46cmを測る。遺構埋土は黒褐色土であり、多くににぶい黄橙色土のブロックが含まれる。

出土遺物は、土師質土器の口縁34点、胴体部247点、底部20点、瓦質土器の鍋1点、白磁の碗口縁1点である。このうち図示したのは、6点である。33は白磁の碗口縁であり、口縁でやや外反する。34は土師質の鍋であり、水平な鏝が付く。35・37・38は土師質土器の杯底部であり、回転糸切り痕を残す。36は黒色土器と考えられる。

SK31 (Fig.16)

調査区の中央部東寄りに位置する。極浅い東側部分と西側のピット状に落ち込む主体部に分けられる。平面形態は不整形であり、規模は長軸1m14cm、短軸88cmを測る。底部は起伏を有し、西側では段状を成す。

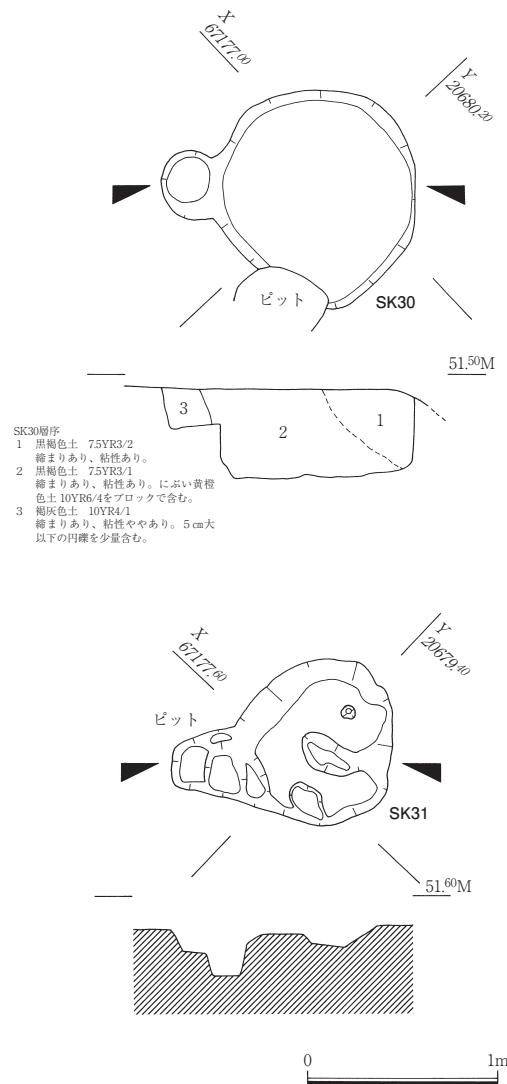


Fig.16 SK30・31平・断面図 (S : 1 / 40)

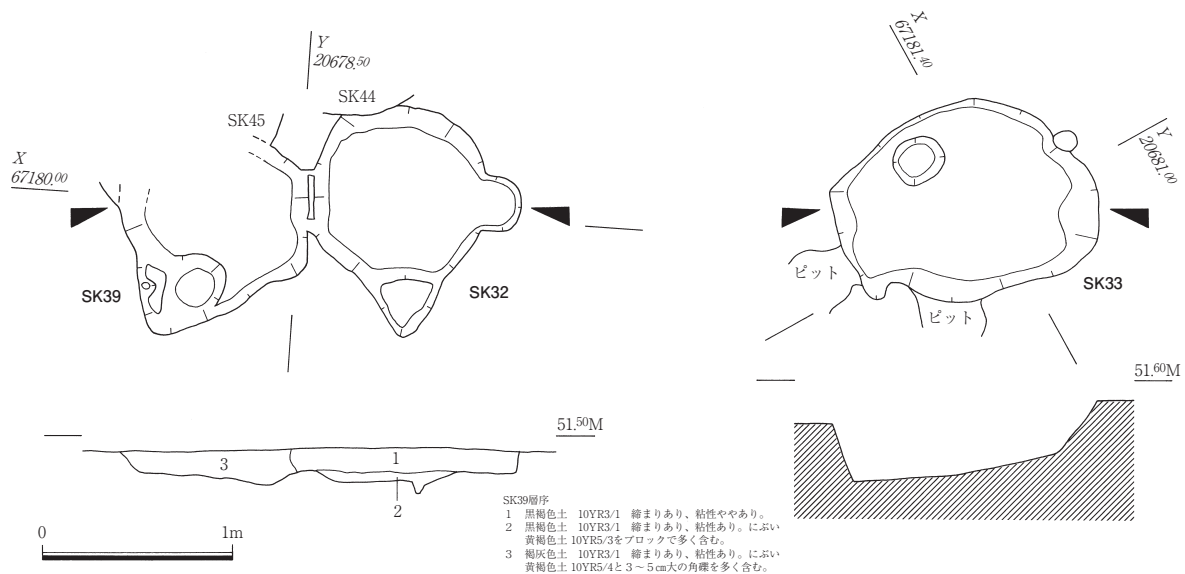


Fig.17 SK32・33・39平・断面図 (S : 1 / 40)

検出面からの深さは、東側で9cm、西側で25cmを測る。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、縄文土器の細片、土師質土器の口縁3点、胴体部76点、底部3点、磁器の口縁3点である。

SK32 (Fig.17)

調査区の中央部東寄りに位置する。西側でSK39を切り、北側ではSK44と接するが、先後関係は不明である。東と西端部にピット状の張り出しを認めるものの、埋土に違いを認められない。平面形態は円形であり、規模は直径1mを測る。底面には、一部で埋土の違う浅い落ち込みが認められる。先行して遺構が存在したのか。検出面からの深さは、16cmを測る。遺構埋土は黒褐色土であり、黄褐色土をブロックで含んでいる。

出土遺物は、土師質土器の口縁7点、胴体部46点、底部6点と細片である。

SK33 (Fig.17)

調査区の中央部東寄りに位置する。SK33の周辺は遺構が稠密であり、西と南の一部でピットを切っている。また、北では小型のピットに切られている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1m40cm、短径1m08cmを測る。底部は西側に傾きを持つ緩やかな凸面であり、木の根と思われる擾乱痕跡を多く残す。壁は概ね急に立ち上がる。底面でピット状の落ち込みが検出されたが、新旧は不明である。検出面からの深さは、17~21cmを測る。長軸方向は、N-27° -Eである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部2点、土師質土器の口縁4点、胴体部25点である。

SK34 (Fig.18)

調査区の中央部東寄りに位置する。東側と北東側、北西側にピット状の落ち込みを持つ。掘立柱建物等の立替えに伴う遺構

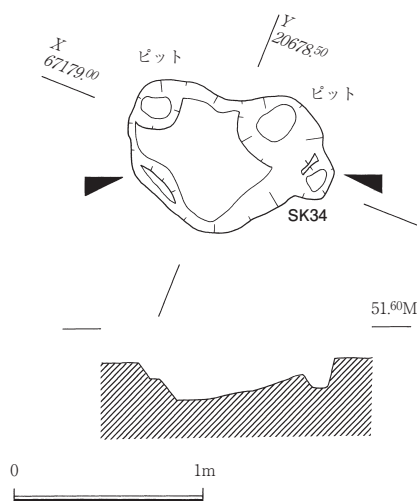


Fig.18 SK34平・断面図 (S : 1 / 40)

か。掘り方は明瞭であり、極浅い皿状を呈している。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1m10cm、短径94cmを測る。底部は概ね平らな面を成し、検出面からの深さは、19cmを測る。長軸は、東西方向である。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁4点、胴体部17点である。

SK35 (Fig.19)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長辺1m14cm、短辺80cmを測る。底部は船底状であり、南側に浅い段部を持つ。壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは、21cmを測る。長軸方向は、N-11°-Eである。遺構埋土は暗灰褐色土であり、黒褐色土と黄色土を含んでいる。

出土遺物は、土師質土器の細片のみである。

SK36 (Fig.19)

調査区の中央部東寄りに位置する。北西側でP137に切られる。南西部分のピットと、先行する浅い土坑部分を合わせてSK36として扱う。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1m20cm、短軸1m10cmを測る。底部は西側に傾きを持つ緩やかな凸面であり、木の根と思われる擾乱痕跡を多く残す。壁は概ね急に立ち上がる。底面でピット状の落ち込みが検出されたが、新旧は不明である。検出面からの深さは、30cmを測る。長軸方向は、N-29°-Eである。遺構埋土は、ピット部分がオリーブ黒色土であり、土坑部分が灰色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁2点、胴体部17点である。

SK37 (Fig.19)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1m52cm、短径1m36cmを測る。底部は緩やかな凸面を成し、壁は

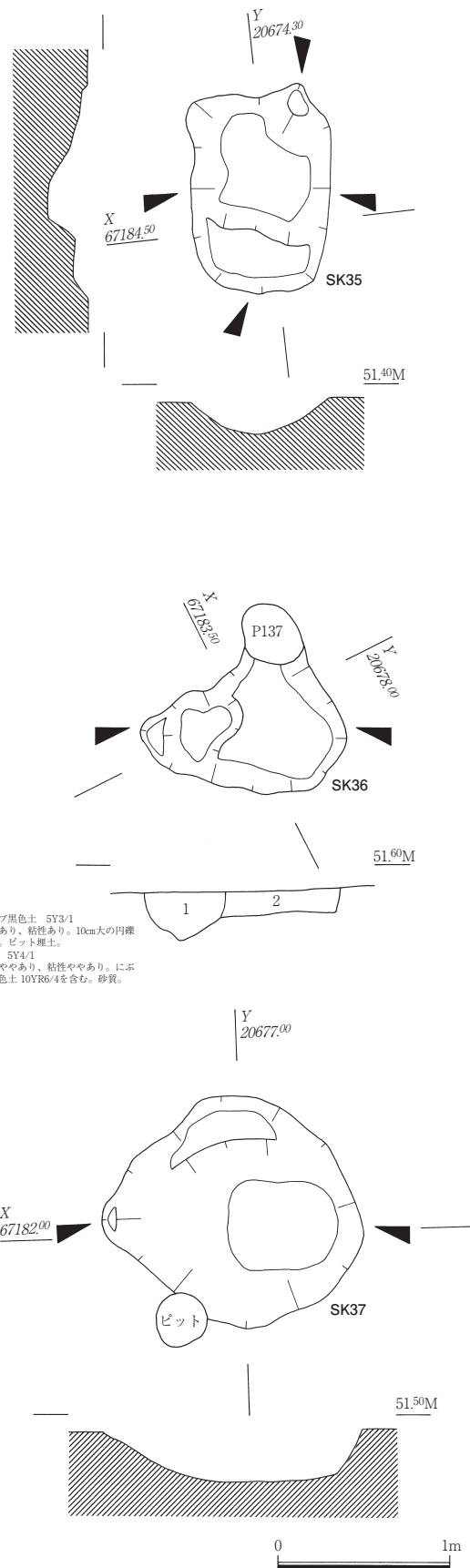


Fig.19 SK35・36・37平・断面図 (S : 1 / 40)

緩やかに立ち上がる。北側で浅い段部を有する。検出面からの深さは、31cmを測る。長軸は、ほぼ東西方向である。遺構埋土は黒褐色土であり、黄色土をブロックで少量含んでいる。また、炭化物の出土も見られる。

出土遺物は、弥生土器の胴体部2点、土師質土器の口縁10点、胴体部114点、底部7点、灰釉の陶器口縁1点、白磁の体部1点、緑色チャートの剥片である。

SK38 (Fig.20・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。先行する土坑状の遺構SD4の主体部に重複し、一部を破壊している。SK38の西側遺構壁は30cm大以上の円礫が露出するが、これらはSD4に伴う円礫と考えられる。SD4主体部には、円礫の出土が他にも多く認められることから、SK38の掘削に伴っては、幾らか円礫が排除された可能性が高い。平面形態は不整楕円形であり、規模は162×73cmである。遺構の東西断面は船底形を呈し、南側で段部を有して浅く成る。検出面からの深さは、27cmを測る。遺構埋土は黄色土をブロック状に多く含み、暗灰褐色土を少量含む。

出土遺物は、土錘1点、土師質土器の口縁1点、胴体部5点、底部1点、細蓮弁紋を留める青磁の胴体部1点である。このうち図示したのは、土錘(39)である。

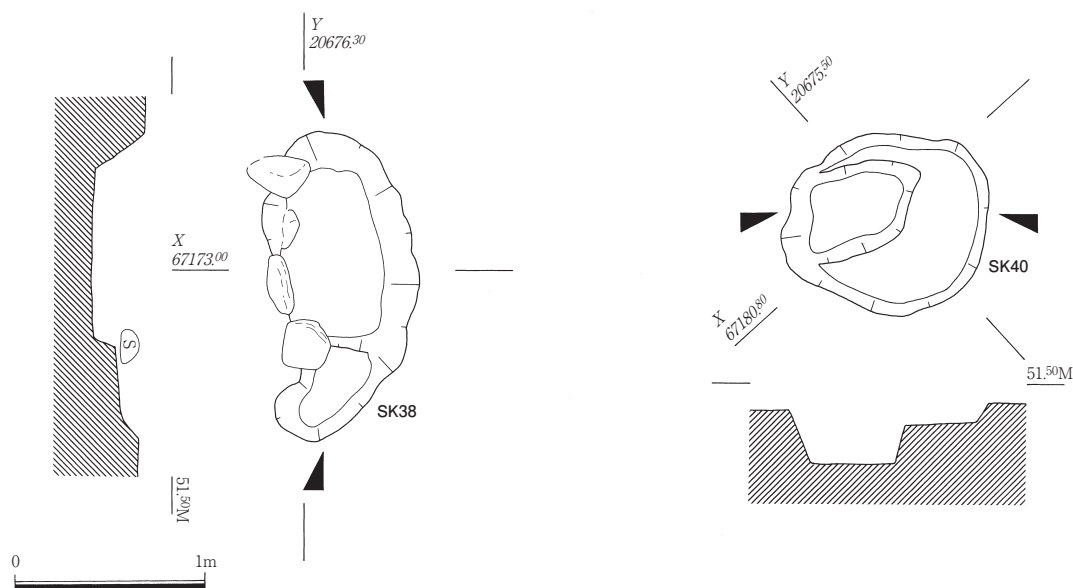


Fig.20 SK38・40平・断面図 (S : 1 / 40)

SK39 (Fig.17・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。他遺構との先後関係は、検出時には明らかにできなかった。東側でSK32に切られ、北側ではSK44との間に存在するSK45の上位を大半にわたって切っている。また、南側にもピットが存在していたものであろう。平面形態は不整円形と考えられ、規模は一辺約1mを測る。遺構底部は小さな凹凸面を成し、南東側へ緩く傾斜する。検出面からの深さは、20cmを測る。遺構埋土は黄褐色土をブロック状に含んだ黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の胴体部30点、底部4点である。このうち図示したのは、底部に糸切り痕の残る土師質の杯(40)である。

SK40 (Fig.20)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は不整形であり、規模は直径約1mである。底部は砂礫層まで掘削されており、西側にやや深い凹部が存在し、南側と東側に向かっては緩やかな段部を形成している。検出面からの深さは、深い部分で30cm、浅い棚状の傾斜面部分では10cmを測る。遺構埋土は、黄褐色土混じりの黒褐色土であり、5cm大の円礫を含んでいる。

出土遺物は、土師質土器の口縁2点である。

SK41 (Fig.21・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。西側に浅い張り出し部分と北側にはピット状の遺構部分を伴う。平面形態は不整形楕円形であり、規模は長径1m08cm、短径80cmである。底部は北側に向かって緩やかな傾きを持つ。検出面からの深さは、27cmを測る。長軸方向は、N-11°-Wである。遺構埋土は黄褐色土混じりの黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁4点、胴体部26点、底部1点、白磁の口縁1点である。このうち図示したのは、口縁が玉縁を成す白磁の碗(41)である。

SK42 (Fig.21)

調査区の中央部東寄りに位置する。SX10から北へ連なる溝状の遺構である。黒褐色土を遺構埋土とした遺構群、P132・139と他にピットをSK42の遺構範囲に認める。先後関係は明らかでないが、恐らくSK42がこれらピット群の上位を破壊する形で、掘削されたものであろう。平面形態は不整形であり、規模は長軸2m06cm、短軸83cmである。遺構底部の短軸方向断面は船底形であり、検出面からの深さは15cmを測る。長軸方向は、N-8°-Wである。遺構埋土は、暗灰褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁6点、胴体部16点、底部2点である。

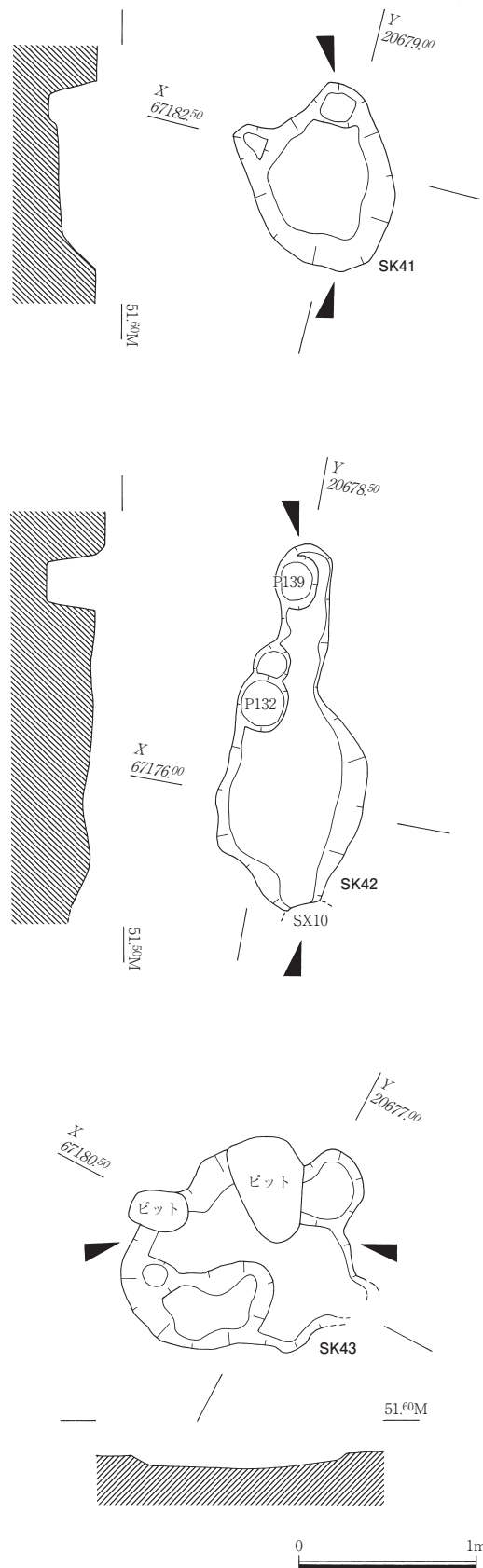
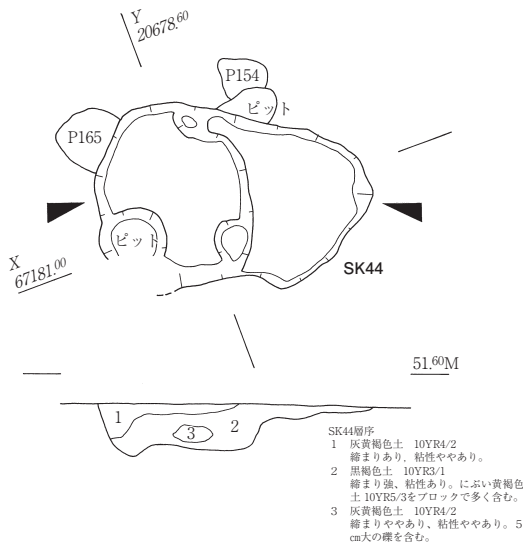


Fig.21 SK41・42・43平・断面図 (S : 1 / 40)



SK43 (Fig.21・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。北側と西側で数個のピットに切られる。東端では、SK45と接する。平面形態は不整円形であり、規模は長軸1m27cm、短軸1m18cmである。遺構壁から底部は、概ね連続的な傾斜を有し、南側がやや深く緩い凸面を成す。検出面からの深さは、14cmを測る。遺構埋土は、黄褐色土混じりの暗灰褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点、胴体部29点、底部3点と細片である。このうち図示したのは、糸切り痕を残す土師質土器?の杯底部(42)である。

SK44 (Fig.22・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。円形から方形を呈する2基の土坑が、重複したものと考えられる。北側でP154と他にピット1個を切っている。西側でP165を切っている。南端ではSK32を切り、南西側ではSK45を切っている。このSK45と切り合い部分には、先後関係を明らかにできないピット状の遺構が存在している。平面形態は不整長方形であり、規模は長辺1m44cm、短辺80cmである。SK44を構成するであろう2基の土坑は、それぞれが1mから80cmの規模を持つものと考えられる。それは、底部の形態からも明らかであり、段部を有して東側は極浅く、西側で深い。検出面からの深さは、西で27cm、東では6cmを測る。遺構埋土は、暗灰褐色土である。

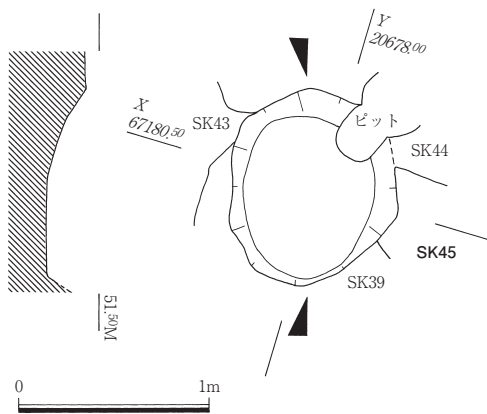


Fig.22 SK44・45平・断面図 (S : 1 / 40)

遺構埋土は、暗灰褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、土製品1点、須恵器の甕口縁1点、土師質土器の口縁7点、胴体部71点、底部4点、陶器の口縁1点、胴体部2点である。このうち図示したのは、3点である。43は須恵器の甕口縁である。44は土師質土器の皿、45は土師質土器の杯底部であり、いずれも糸切り痕を残す。

SK45 (Fig.22・37)

調査区の中央部東寄りに位置する。検出時にはSK45の存在自体は不明確であった。SK44の精査を進めるに、遺物の出土がこの部分で多く成ったこと、加えて最終的な完掘形態から遺構の存在を想定した。遺構の形態は、SK39とSK44によって上位の多くを破壊されている。北側には別遺構と考えられるピットが存在する。また、西端ではSK43と接している。平面形態は楕円形であり、規模は長径1m04cm、短径88cmである。底部は緩やかな凹面を成す。検出面からの深さは、14cmを測る。長径方向は、N-11° - Wである。遺

構埋土は、黄褐色土混じりの暗灰褐色土である。

出土遺物は、土師器または土師質土器の口縁6点、胴体部37点、底部1点である。このうち図示したのは、土師器の椀底部(46)と土師質土器の杯(47)である。

SK46 (Fig.23)

調査区の中央部東寄りに位置する。P140・142・146を切って存在する。また、P152に切られる。掘立柱建物の立て替えに伴う遺構か。これらのピットは、SK46の遺構底面から40~21cmの深さを有するものであり、安定した規模を持つ。SK46の平面形態は不整楕円形であり、規模は長径1m13cm、短径88cmである。底部は平らな面を成し、検出面からの深さは、15cmを測る。長径方向は、N-17° -Wである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、土師質土器の口縁1点、胴体部10点である。

SK47 (Fig.23)

調査区の中央部東寄りに位置する。浅い窪み状の遺構であり、西端は明確に検出できていないが、平面形態は長方形を呈すると考えられる。中央の西寄りではP143・150、南側でP144、北側でP164に切られている。規模は長辺2m、短辺1m30cmを測る。底部は北側から西側にかけてやや深く、南側では浅い。検出面からの深さは、9cmを測る。長辺方向は、N-51° -Eである。遺構埋土は、暗灰褐色土である。

出土遺物は、遺構の北側から土師質土器の口縁1点、胴体部4点、底部2点であり、南側からは土師質土器の口縁1点、胴体部5点と細片である。

SK48 (Fig.23)

調査区の中央部東寄りに位置する。P148・149を切って存在し、東端ではP152に切られる。SK46に隣接し、ピットに関わる遺構であることから、同様な性格を持つものか。P148には、廃棄に際して人頭大の礫を打ち割って、放り込んだ可能性がある。平面形態は楕円形であり、規模は長径93cm、短径88cmを測る。底部は平らな面を成し、検出面からの深さは、15cmを測る。長径方向は、N-73° -Eである。遺構埋土は、暗灰褐色土である。

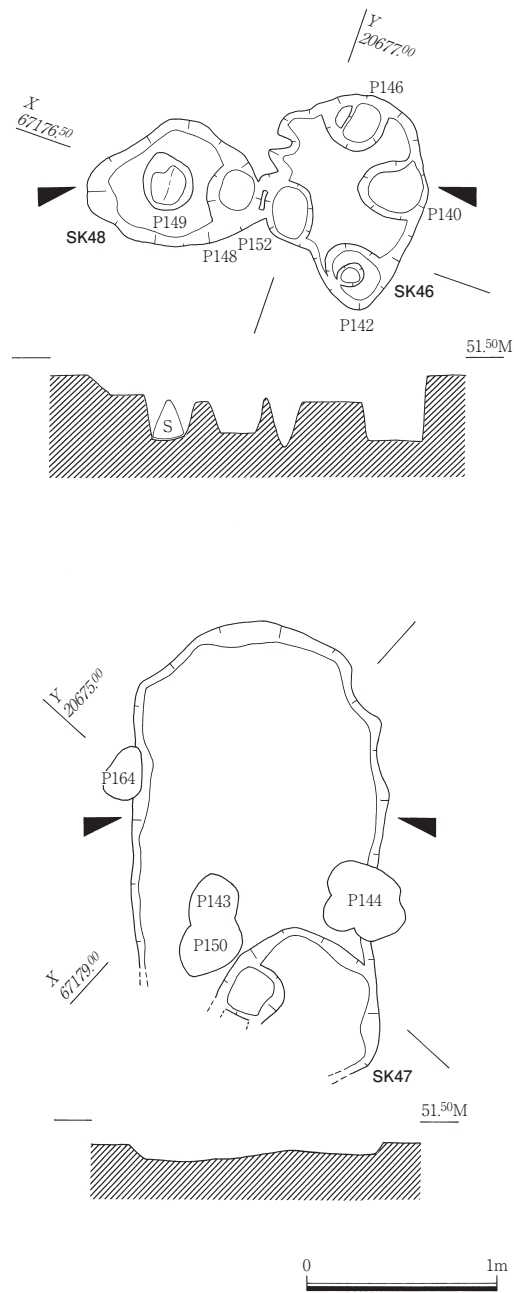


Fig.23 SK46・47・48平・断面図 (S : 1 / 40)

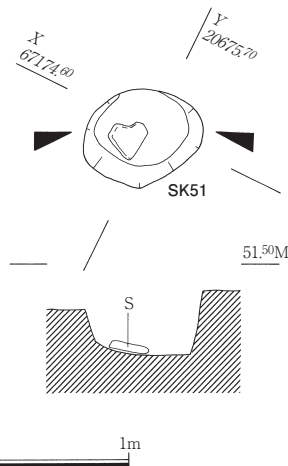
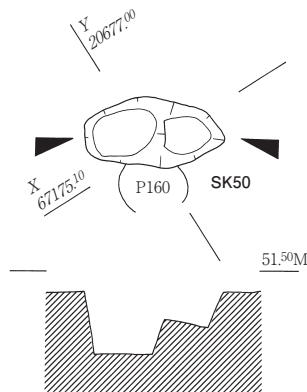
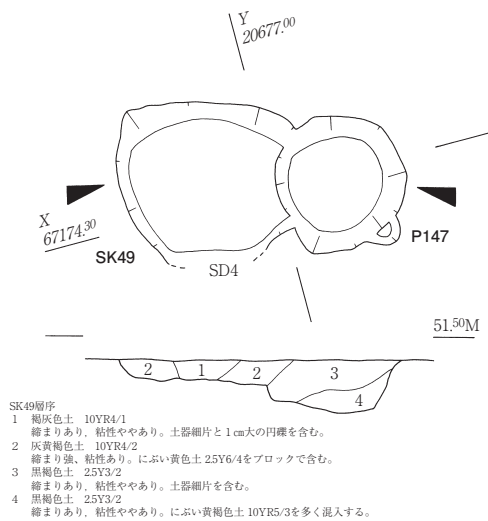


Fig.24 SK49・50・51平・断面図(S : 1 / 40)

出土遺物は、土師質土器の胴体部12点、底部2点、磁器の碗体部1点である。

SK49 (Fig.24)

調査区の中央部東寄りに位置する。東側で黒褐色土を埋土とするP147、北側でP160を切っている。また、南端ではSD4を切っている。平面形態は不整円形であり、規模は直径約90cmを測る。底部は小さな凹凸面を成し、東側へ傾斜する。検出面からの深さは、10cmを測る。主軸方向は、N-75° - Wである。遺構埋土は、1.褐灰色土、2.灰黄褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部2点、土師質土器の口縁4点、胴体部34点、底部3点である。

SK50 (Fig.24・37. 43)

調査区の中央部東寄りに位置する。南側でP160を切っている。平面形態は楕円形であり、規模は長径74cm、短径36cmである。底部は東側で浅く、西側では深い。検出面からの深さは、東側で14cm、西側では33cmを測る。長径方向は、N-57° - Wである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部2点、土師質土器の口縁3点、胴体部37点、砥石1点である。このうち図示したのは、回転糸切り痕を残す土師質土器の皿(48)と砥石(135)である。135は小型の携帯用か。

SK51 (Fig.24)

調査区の中央部東寄りに位置する。規模の大きなピットと捉えるべきか。底部直上に検出された扁平な河原石は、柱を安定させる為のものか。平面形態は楕円形であり、規模は長径66cm、短径53cmである。底部は緩やかに東側に傾斜する。検出面からの深さは、28cmを測る。長径方向は、N-55° - Eである。遺構埋土は、暗灰色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁1点、胴体部3点、底部2点である。

2) 性格不明遺構

SX 1 (Fig. 2・38)

調査区の北部に位置する。調査区の中でこの辺りは、はじめ緩くやがてやや急に北西に向かって下る傾斜面であり、北側に存在するSD1やSX2、SX3と同様な東西方向(傾斜と直行する)の長軸(主軸)方向を有している。SX1は南部でSK2と北部で攪乱土坑に一部を切られている。SX1の東半分には埋土と底部形態の違いが認められており、やや浅い先行した遺構が存在した可能性がある。SK3とした土坑もこの先行して存在した遺構の一部であろうか。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西6m70cm、南北方向の最大幅約2mを測る。長軸方向は東西(N-70° -E)である。

出土遺物は、古い東側の部分から弥生土器の胴体部2点、土師器の底部1点、胴体部5点、土師質土器の口縁3点、胴体部17点、底部2点、鍋の胴体部1点、須恵器の1点がある。また、新しい西側の部分からは弥生土器の細片と土師質土器の胴体部7点、底部1点、青磁の盤口縁1点が出土している。このうち図示したのは、3点である。49は青磁の盤口縁であり、恐らく輪花を成すであろう。50は土師器の椀底部である。51は土師質土器の杯底部であり、回転糸切り痕を残す。

SX 2 (Fig. 2)

調査区の北部に位置する。北西方向に下る傾斜面に位置し、長軸方向(N-88° -W)は傾斜方向と直行する。SX2は西側の一部を攪乱坑に破壊されている。平面形態は不整長方形であり、規模は南北(短辺)75cm、確認長3m30cmを測る。底部は平らであり、検出斜面の上位からは深さ約30cmを測る。

出土遺物は、土師質土器の胴体部2点と細片である。

SX 3 (Fig. 2)

調査区の北部に位置する。北西方向に下る斜面は、この辺りで大きく地山(砂礫層)を削り込んで段を成し、平坦面を造り出している。SX3はこの段下に掘削されていた。平面形態は隅丸長方形であり、規模は東西(長辺)2m80cm、南北(短辺)85cmを測る。底面は浅い凹凸面を成し、検出面からの深さは約20cmを測る。長軸方向は、N-76° -Eである。

出土遺物は、土師質土器の口縁2点と胴体部2点である。

SX 4 (Fig.25・38)

調査区の中央部南端に位置し、一部は調査区南東壁によって画される。段丘の構成層である黄色砂礫層と黒色から茶褐色を呈する腐植土(黒ボク)の組み合わせが見られることから、倒木痕跡と判断してよいであ

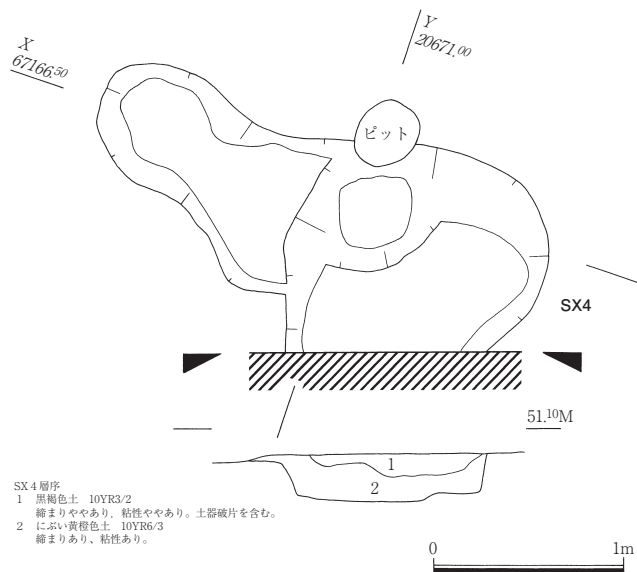


Fig.25 SX 4 平・断面図 (S : 1 / 40)

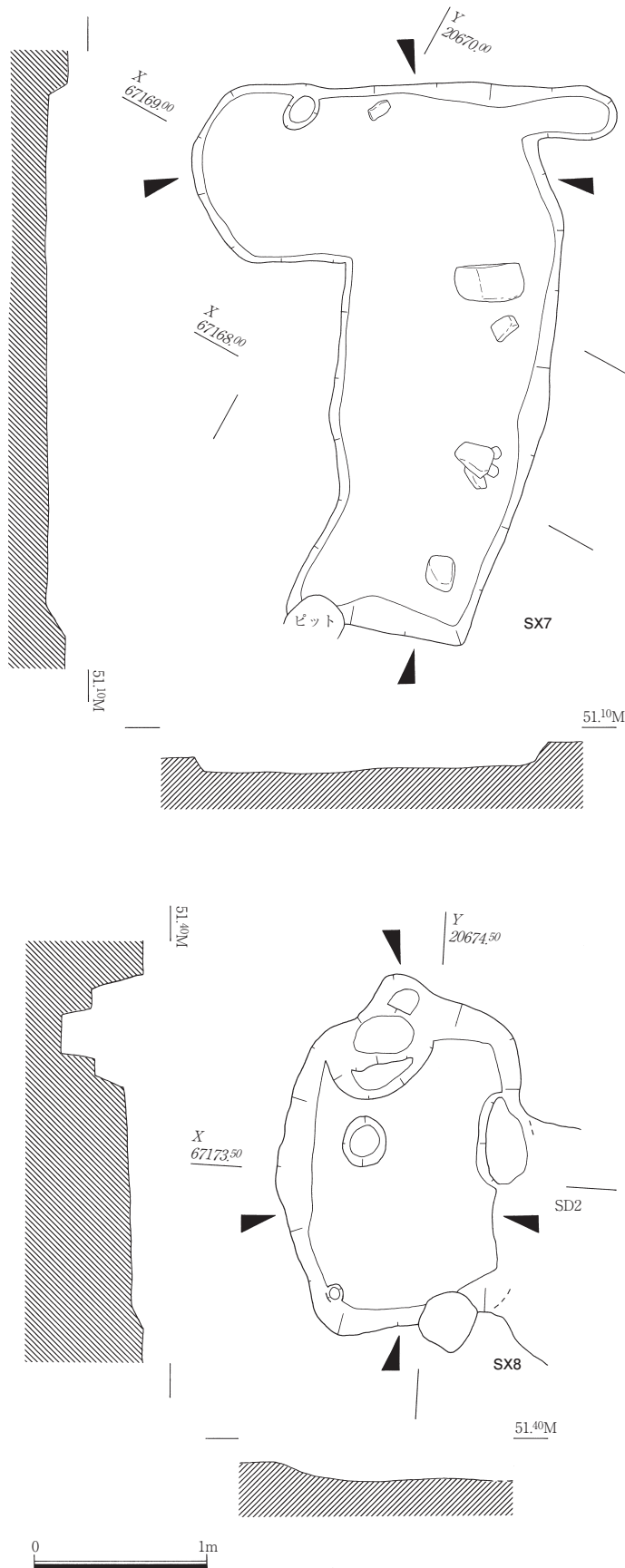


Fig.26 SX7・8平・断面図 (S : 1 / 40)

ろう。シルト質の腐植土部分は、確認された部分で規模150×130 cmを測る。風等の影響下、南東から東方向に倒れた木の根跡であろう。

出土遺物は、縄文土器の口縁1点、土師質土器の口縁2点、底部1点と細片である。このうち図示したのは、深鉢の口縁(52)である。

SX7 (Fig.26・38)

調査区の中央部南寄りに位置する。浅く広がりを持つ遺構であり、地形的な落ち込みとも捉えられるだろう。南部で後世のピットに切られる。遺構底には、疎らに最大で40cm程度の規模を持つ河原石が見られた。平面形態は、長方形を呈する主体部から、北部で南西側と北東端に幾分張り出しを持つ。規模は長辺方向南北3m20 cm、短辺東西方向は1m28cmから2m02cmを測る。遺構底部は平らであり、壁は標高上位となる東側でやや急、西側では緩やかである。検出面からの深さは、25cmを測る。長辺方向は、南北N-20° - Wである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、主体部からの土師質土器の鍋1点と壺1点、別遺構の可能性のある東張り出し部分から土師質の鍋胴部1点と土師質土器の口縁3点である。このうち図示したのは、3点である。53は土師質の羽釜である。54は土師質の壺口縁である。55は土師質土器の杯口縁である。

SX8 (Fig.26)

調査区の中央部東寄りに位置する。北端と中央でそれぞれピットを切っている。東側では調査時に明確にできなかったがSD4に、また南端ではピットに切られている。平面形態は隅丸長方形を呈し、西壁はやや膨らみを持って湾曲する。規模は南北180×東西136cmを測る。遺構底部は平らであり、壁はやや急に立ち上がる。検出面からの深さは、15cmを測る。主軸方向は、南北(N-6° -W)である。

出土遺物は、土師質土器の口縁3点、胴部16点、底部3点と細片、磁器の稜花皿口縁1点、染付(青花?)胴体部1点である。

SX9 (Fig.27)

調査区の中央部東寄りに位置する。南部と南東端でそれぞれピットと切り合いを持つと思われるが、新旧関係は明らかにできなかった。平面形態は不整長方形を呈し、規模は長辺の東西方向が2m04cm、東西方向が74cmを測る。遺構底部は西側で深く、東側ではやや浅くなる。検出面からの深さは、SX9の西側で21cmを測る。主軸方向は、南北(N-84° -E)である。遺構埋土は灰褐色土であり、遺構検出面である砂礫層を出自とする粗砂を部分的に多く含む。

出土遺物は、土師質土器の胴部2点、青磁の碗体部1点である。

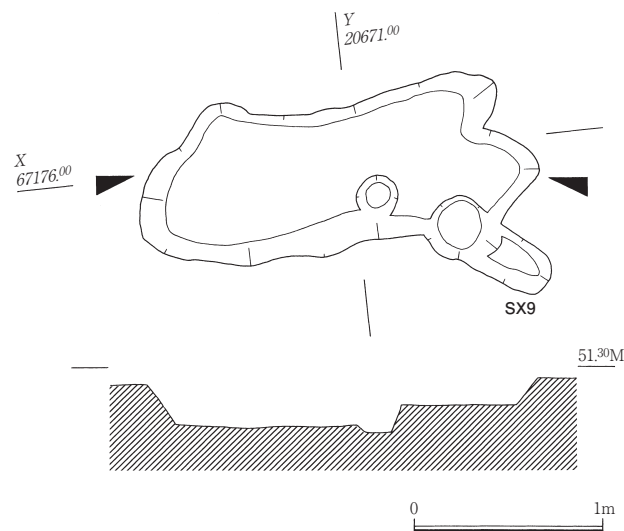


Fig.27 SX9平・断面図 (S : 1 / 40)

SX10 (Fig.28・38)

調査区の中央部南に位置する。遺構東壁は調査区南東壁に接して検出された。SX10の北側は遺構、特にピットが密集して存在する遺構稠密域であり、SX10もP80・89など幾つかのピットを切っている。南側ではP72を切っていたものと考えられる。遺構東壁には、ピットや溝状遺構存在を示すような落ち込みが観察されるが、調査ではその存在を明らかにできなかった。遺構西壁にもピットが存在し、恐らく先行する時期のものと考えられる。中央部には遺構底面でP109が検出されている。精査からは、時期差を認めなかった。機能を明確にし難いが、SX10に伴う遺構と考えられる。P109の底部では20cm大の河原石が検出されている。SX10の北側は浅く溝状に幅も狭く成り、後出する遺構と考えられるSK42に繋がる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径の南北5m52cm、短径の東西2m20cmを測る。底部は東西断面で船底形を呈し、北側を除く壁はやや急に立ち上がり、北側は段状を成して浅く成る。検出面からの深さは、遺構中央部で42cmを測る。長軸方向は南北であり、N-16° -Wである。

出土遺物は、弥生土器の口縁1点、胴体部9点、土師器の底部2点、須恵器の胴体部2点、土師質土器の口縁32点、胴部172点、底部32点と細片、鍋の胴部2点、瓦質土器の胴体部3点、青磁の碗底部1点、白磁底部1

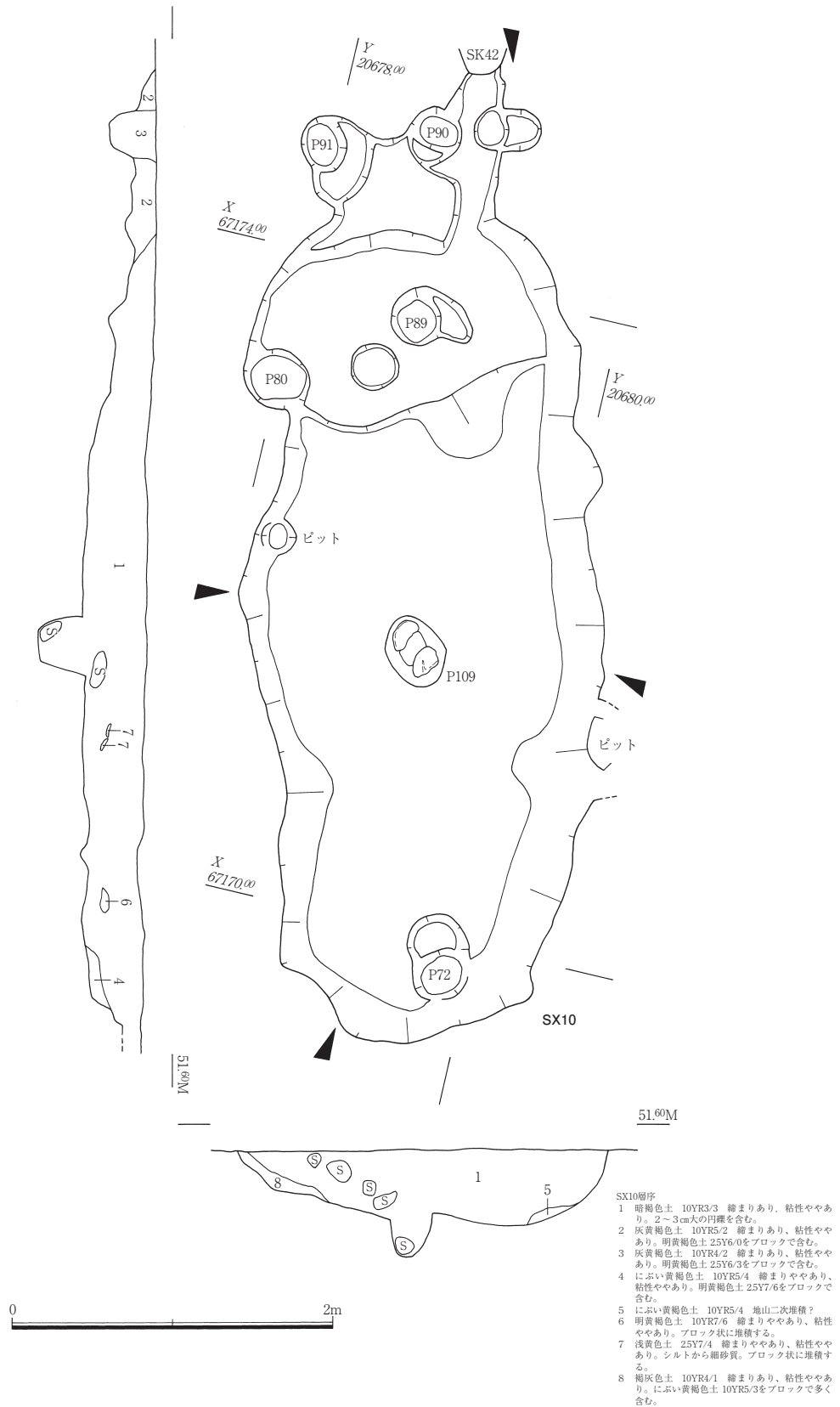
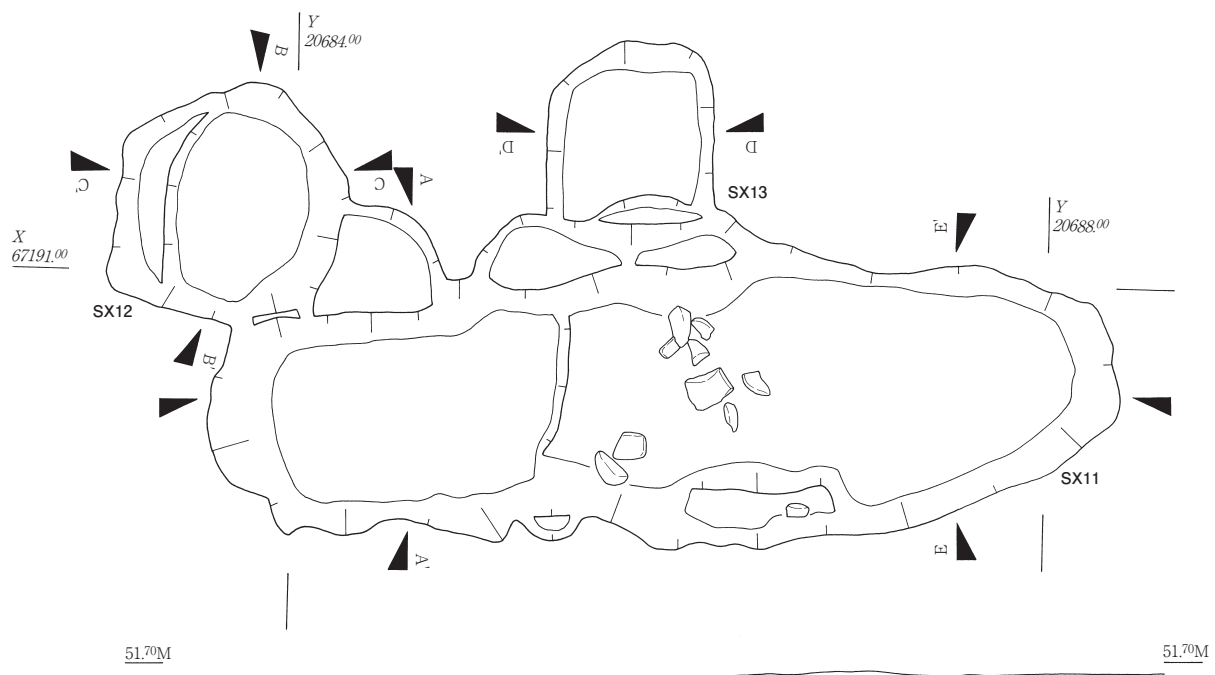


Fig.28 SX10平・断面図 (S : 1 / 40)



- SX11層序
- 1 黒褐色土 75YR3/1 締まりあり、粘性ややあり。下位に10cm大の扁平な円礫を稀に含む。
 - 2 にふい黄褐色土 10YR5/3 締まりあり、粘性ややあり。ブロック状を成す。
 - 3 黒褐色土 10YR3/2 締まりあり、粘性ややあり。
 - 4 灰黄褐色土 10YR5/4 締まりあり、粘性ややあり。土器細片、焼土片、黄色粗砂粒を含む。
 - 5 黒褐色土 75YR3/2 締まりややあり、粘性ややあり。にふい黄褐色土 10YR5/4 をブロックで含む。
 - 6 にふい黄褐色土 10YR5/4 締まりややあり、粘性ややあり。小規模なブロックで筋状に並ぶ。
 - 7 にふい黄褐色土 10YR5/4 締まりややあり、粘性ややあり。大きな規模のブロックで筋状に並ぶ。
 - 8 黒褐色土 75YR3/2 にふい黄褐色土 10YR4/3 をブロックで多く含む。

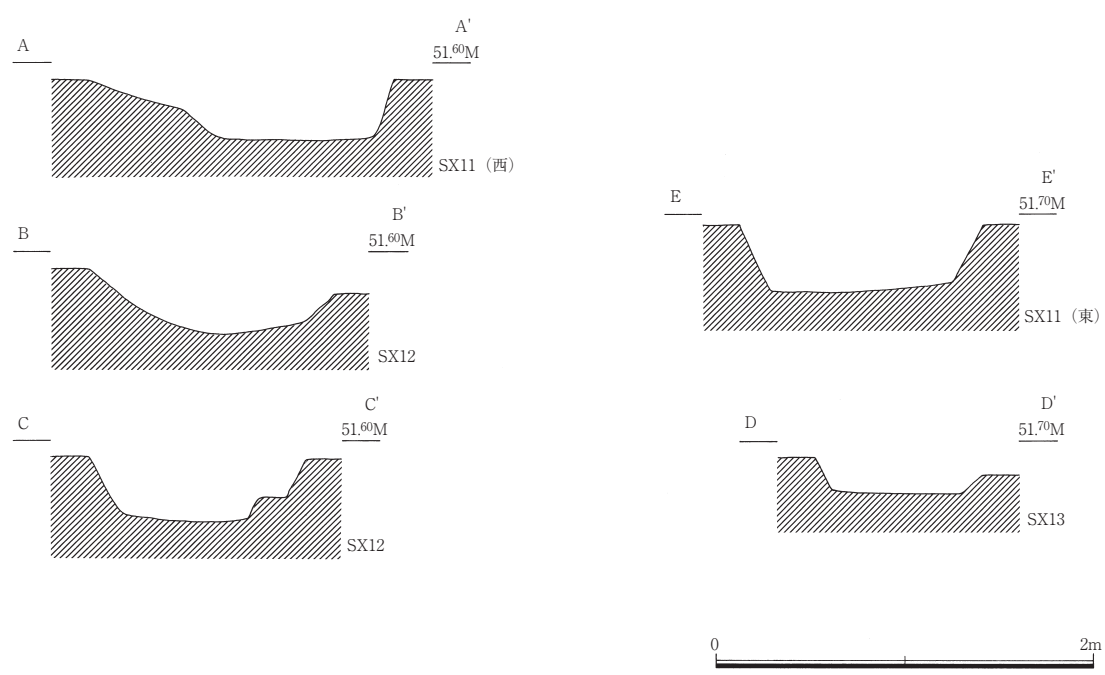


Fig.29 SX10平・断面図 (S : 1 / 40)

点である。このうち図示したのは、10点である。56は須恵器?の椀口縁であり、釉が付着する。57は磁器の合子蓋であり、型打ちにより蓮弁を成す。58は土師質土器の椀であり、糸切りの底部に高台が付く。59は雷紋を描く青磁の椀。62は玉縁を成す白磁の口縁。64は同安窯系の青磁碗。65は白磁の皿底部である。

SX11 (Fig.29・39)

調査区の中央部北に位置する。北西端をSX12に切られる。中央北側では浅い遺構SX13を切っている。また、南端にピットの存在を認めるが、時期差は明らかにできなかった。当初は東西に長く延びた遺構と考えられたが、精査の結果、遺構の東側と西側で形態と埋土に違いが認められ、西側に先行する遺構が存在し、のちに別遺構が東側に掘削された可能性が強い。平面形態は、全体で東西方向を長軸とする楕円形であり、西側は隅丸長方形、東側は楕円形を呈する。規模は、西側の遺構が長辺東西1m90cm以上、短辺の南北1m34cmであり、東側の遺構は長径東西2m90cm、短径南北1m56cmを測る。西側の底面は比較的平らな面を成して、壁は急に立ち上がるのを特徴とする。そして、北側には浅い段部が存在している。東側は南北方向の断面形が船底形を成し、北側の一部は段状を成して立ち上がる。東側の遺構底部西寄りには10～20cm大の円礫が多く存在する。検出面からの深さは、西側で32cm、東側では38cmを測る。長軸方向は、東西(N-86°-E)である。遺構埋土は、西側で主に黒褐色土が斜位の黄褐色土層を含んで堆積し、東側では多くが一様な黒褐色土で占められる。SX11からは粘土塊や炭化物が出土しており、西側からは焼土塊が見られた。

出土遺物は、弥生土器の胴体部4点、土師器の口縁2点、底部1点、須恵器の胴体部1点、土師質土器の口縁5点、胴部102点、底部12点と細片、鍋の胴部1点、瓦質土器の胴体部2点、陶器の甕胴体部1点、青磁の碗1点、口縁1点、胴部1点、底部1点、白磁の胴部1点、釘である。このうち図示したのは、3点である。66・68は龍泉窯系の青磁碗である。66の断面には3回に分けて施されて釉薬の痕が残される。68は外面に細蓮弁紋を施し、見込みには花卉と円圈内にスタンプによる文字?を印す。67は土師質土器?の杯底部である。

SX12 (Fig.29)

調査区の中央部東寄りに位置する。南西でSX11を一部切る。平面形態は円形から不整形であり、規模は直径1m20cmを測る。遺構底部は緩やかな凹面を成し、西壁で段状を成す。検出面からの深さは、33cmを測る。遺構埋土は暗灰褐色土であり、黄色土が混じる。

出土遺物は、弥生土器の胴体部3点、土師器の底部4点、須恵器の胴体部1点、土師質土器の口縁23点、胴部50点と細片、陶器の胴体部1点、白磁の胴部1点、平形の金具である。

SX13 (Fig.29)

調査区の中央部東寄りに位置する。南部はSX11に切られる。全体形は不明であるが、恐らく隅丸長方形を呈するものであろう。規模は、南北80cm以上、東西88cmを測る。遺構底部は平らであり、検出面からの深さは、9cmを測る。長軸方向は、ほぼ南北である。遺構埋土は黒褐色土であり、黄褐色土が混じる。形態的にはSK1に近似する。

出土遺物は、弥生土器の胴体部1点、土師質土器の口縁1点、胴部14点、底部2点と細片である。

SX14 (Fig.30)

調査区の中央部東寄りに位置する。北端で浅い溝状の遺構を介してSX10と接し、中央ではP71を切っている。遺構の大半は調査区南壁に画されており、全体形は不明である。残存規模は、長軸2m24cm、短軸50

cmを測る。遺構底部は緩やかな凸面を成し、一部に拳大以上の河原石が集まって出土している。検出面からの深さは、13cmを測る。遺構埋土は、上位にSX10埋土の多くを占める暗褐色土が存在し、下位にはにぶい黄褐色土が堆積している。

出土遺物は、土師質土器の口縁2点、胴部11点、底部1点、白磁?の胴部1点である。

SX15 (Fig.31・39)

調査区の中央部東寄りに位置する。平面形態は不整形であり、少なくとも4基の遺構が重複して存在したものと考えられる。ここでは、これらをSX15-1からSX15-4の4つの遺構に分けて報告する。出土遺物については、出自が明確なものについては各遺構出土とし、他はSX15として扱う。

SX15-1は、SX15の東端に位置し、平面形態は円形から不整形円形を呈する。北でP135を切っている。西に隣接するSX15-2を切っている。規模は、長径1m05cm、短径82cmを測る。遺構底部は緩やかな凸面を成し、壁は急に立ち上がる。検出面からの深さは20cmを測る。遺構埋土は、1.褐灰色土 2.暗褐色土である。

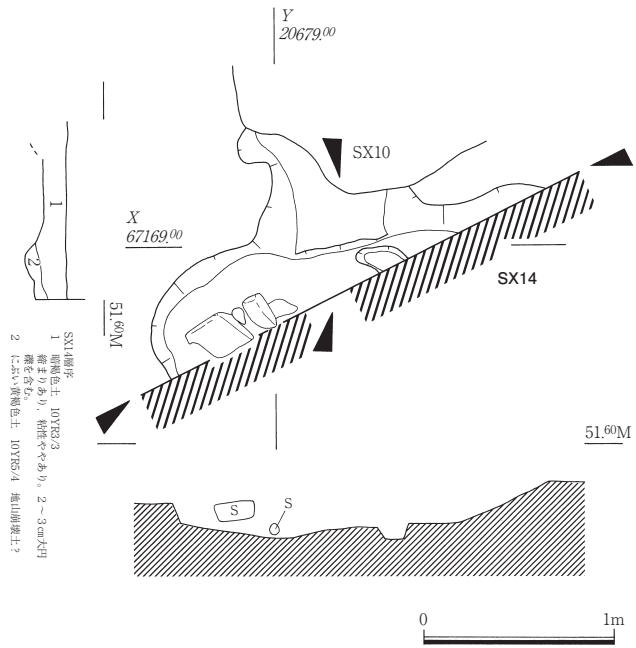


Fig.30 SX14平・断面図 (S : 1 / 40)

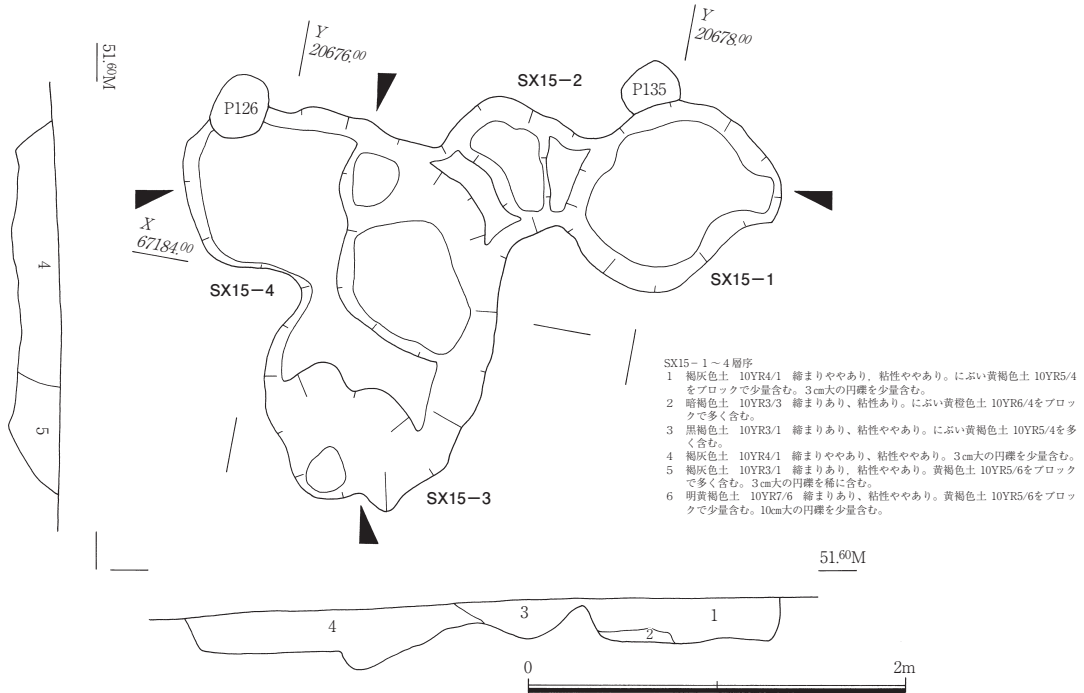


Fig.31 SX15-1~SX15-4平・断面図 (S : 1 / 40)

出土遺物は、土師質土器の胴部10点、底部1点である。

SX15-2は、SX15に関わる遺構群の中では、やや規模の小さなピット状の遺構である。東側でSX15-1に切られ、西側ではSX15-4を切って存在している。平面形態は不整形円形を呈する。規模は南北76cm、東西70cmを測る。検出面からの深さは18cmである。遺構埋土は黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の胴体部3点、土師質土器の胴体部16点、底部6点である。

SX15-4はSX15の北西部分に存在する。SX15-4の東側には恐らく別の遺構が存在したものと考えられ、この別遺構が東側でSX15-2に切られ、南側ではSX15-3の多くを切っている。また、北西側はP126に切られている。SX15-4は東西を長軸方向(N-87°-W)とする遺構と考えられる。平面形態は隅丸長方形であり、規模は東西1m64cm、南北88cmを測る。遺構底部は、SX15-4の西側では比較的平らであり、壁は急に立ち上がる。検出面からの深さは、東側でやや深く36cm、西側では17cmを測る。遺構埋土は、褐灰色土である。ここからは、粘土塊の出土が見られた。

出土遺物は、弥生土器の口縁1点、土師質土器の口縁1点、胴体部17点、糸切り痕を残す底部2点、青磁の碗口縁1点である。

SX15-3はSX15の南端に存在する。先述のようにSX15-4に切られている。平面形態は不整形円形か。規模は長軸96cm、短軸66cmを測る。ピット状の遺構であり、壁は播鉢状の傾斜を有し、西側は他遺構(ピット)に関わるものか、やや深く成る。検出面からの深さは、34cmである。遺構埋土は、褐灰色土である。

出土遺物は、土師質土器の胴体部8点、糸切り痕の底部1点である。

最後に、SX15出土として扱った遺物は、弥生土器の胴体部1点、土師器の底部1点、高坏脚部1点、須恵器の底部1点、甕胴部1点、土師質土器の口縁30点、胴体部98点、底部16点と細片、瓦器の底部1点、瓦質土器の胴体部1点、底部1点、陶器(須恵器?)の胴体部3点、青磁の胴体部1点、底部1点、白磁の体部1点であり、他にサヌカイト片である。

このうち図示したのは、5点である。69と73はSX15-1から出土した土師質土器の杯底部である。70は須恵器の椀?底部である。71と72は外面に鎬蓮弁紋を施した龍泉窯系の青磁碗であり、SX15-3及び4から出土している。

SX16 (Fig. 2)

調査区の中央部に位置する。北側でP157に、南側ではP40に切られるであろう。平面形態は不整形であり、遺構と考えるよりも、一種の落ち込み(木の根痕?)とするべきか。規模は、長軸約2m、短軸66cmを測る。遺構底部一様でなく起伏の激しい凹凸面である。検出面からの深さは、16cmを測る。遺構埋土は、暗灰褐色土である。南側で炭化物の出土が見られる。

出土遺物は、弥生土器の細片、土師質土器の口縁3点、胴部22点、底部1点である。

SX17 (Fig. 2)

調査区の中央部に位置する。遺構埋土から倒木痕跡の可能を有する。平面形態は不整形円形を呈し、規模は直径70cmを測る。遺構底部は概ね平らであり、全体形は播鉢状を呈している。検出面からの深さは、20cmを測る。遺構埋土は、黒色土(黒ボク)である。

出土遺物は、土師質土器の胴部3点と細片である。

3) 溝状遺構

SD 1 (Fig.2)

調査区の北部に位置する。北西方向に下る傾斜面位置する。長軸方向は東西(N-83° -W)であり、確認延長は3m25cmを測る。断面形態は、浅い「U」字から「V」字を呈する。南北方向幅は40cmであり、検出面からの深さは8~17cmを測る。斜面に掘削された溝、または木の根痕であろう。

出土遺物は、土師質土器の口縁が1点のみである。

SD 2・3 (Fig.32・39)

調査区の中央部南に位置する。調査区を分割したことから、この遺構を東西に分ける形に成り、西側をSD2とSX5・6、東側をSD3とした。また、始め調査区の南壁に連なる溝状の遺構が不明瞭で“SX”として扱ったが、溝状の形態が明らかと成ったことから、“SD”を用いた。最終的には、北側が規模の大きな竪穴状の遺構と成り、検出面や断面での観察や精査では南の溝部分と差は認められなかった為、給排水口を伴う池状の遺構?と判断した。ただし、竪穴状の遺構と異なる溝が屈曲して東方向へ延びる可能性も残される。

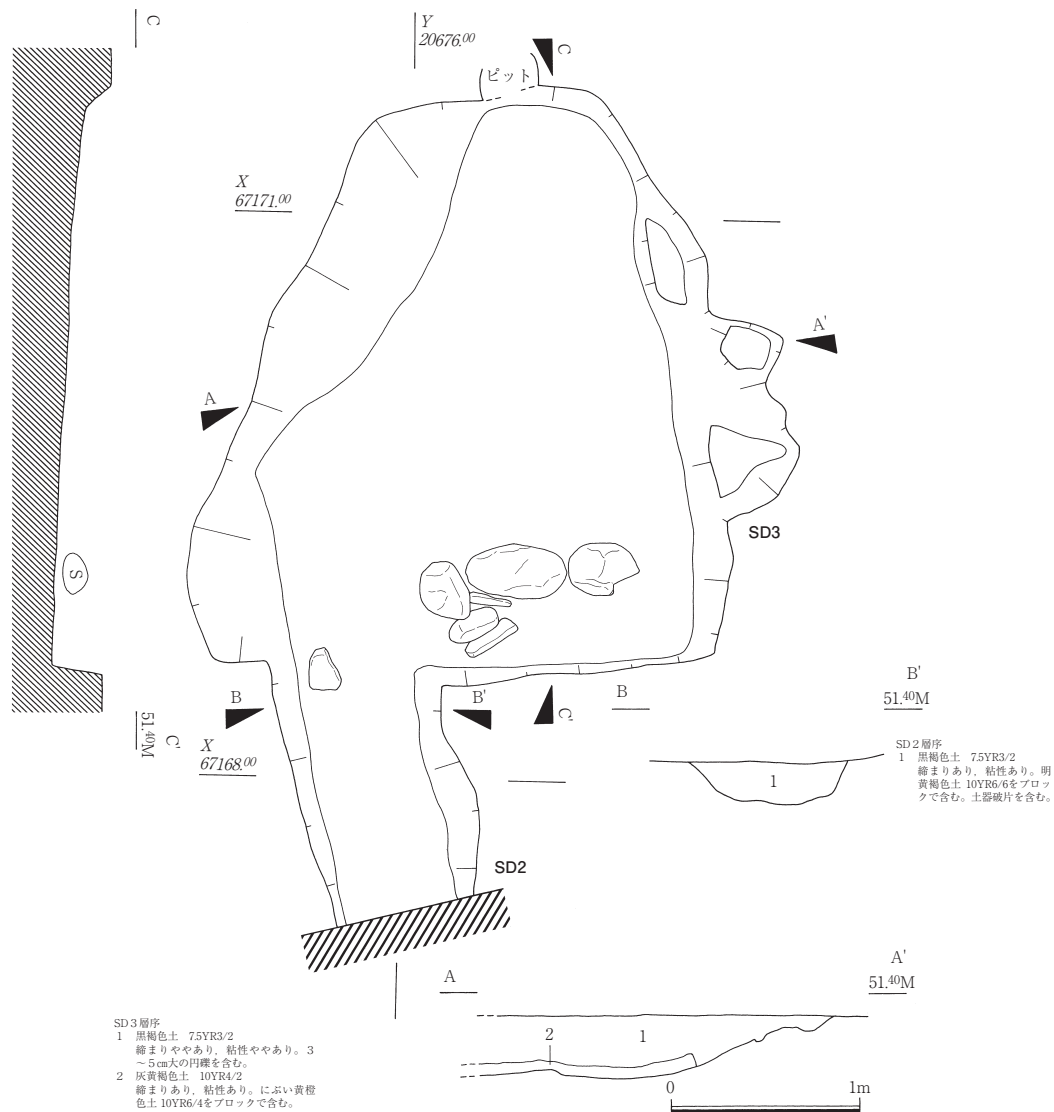


Fig.32 SD 2・3 平・断面図 (S : 1 / 40)

竪穴状の遺構部分は、北西隅角は未検出であるが、不整形を呈している。遺構壁は東と南側で急であり、西側では緩やかである。東壁の中程には浅い張り出しが認められており、SX10または東方へと繋がる構造物が存在した可能性がある。竪穴部分の中央やや南寄りには、規模の大きな円礫を用いて列石が検出されている。竪穴部分の規模は、南北3m12cm、東西2m86cmを測る。遺構底部は概ね平らであり、検出面からの深さは、竪穴状部分で30cm、溝部分で15cmを測る。遺構埋土は、竪穴状部分で1.黒褐色土、2.灰黄褐色土、溝部分では黒褐色土(明黄褐色土混じり)である。

出土遺物は、溝状の部分から土師質土器の口縁3点、胴部31点、底部3点と細片であり、竪穴状の部分の東からは、弥生土器の胴体部2点、須恵器の胴体部1点、土師質土器の口縁16点、胴体部105点、底部7点、瓦質土器の胴体部2点、陶器の胴体部1点、白磁の体部2点、磁器の口縁1点、胴体部1点、西からは、弥生土器の胴体部1点、土師質土器の口縁1点、胴部11点、底部1点と細片、土師器の胴体部1点、底部1点、白磁の体部1点である。このうち図示したのは、4点である。74は青磁の椀であり、口縁下に沈線状の凹部が巡る。75は口縁が短く外反する龍泉窯系の青磁碗又は皿である。76と77は土師質土器の杯底部であり、糸切り痕を残す。

SD4 (Fig.33・39)

調査区の中央部に位置する。西側でSX8を切っている。平面的な精査では明らかに成らなかったが、複数の遺構の集合したものと考えられる。東側には南北に各々1基の浅い方形を呈した遺構が存在する。それぞれの新旧は明らかでない。SD4の上位には後出するSK38が存在し、中央の遺構底部に残された規模の大きな円礫が、その影響で一部排除された可能性がある。中央部分の遺構は、平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は東西2m02cm、南北1m48cmを測る。中央の遺構底部は、東側でやや浅く、西側では深く成る。検出面からの深さは、31cmを測る。主軸方向は、N-72° -Wである。遺構埋土は、暗灰褐色土である。北東側の浅い土坑は、平面形態が

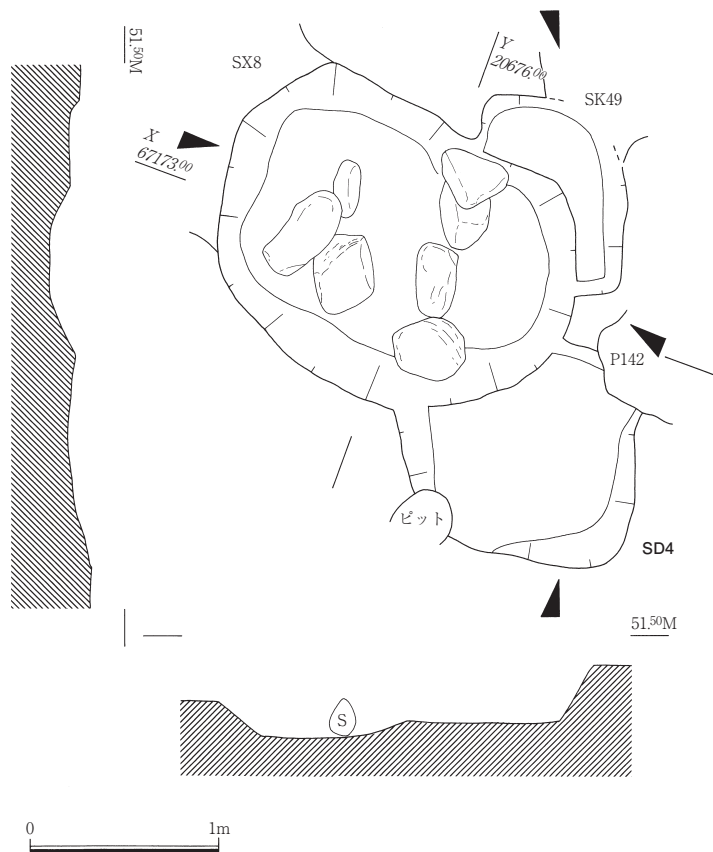


Fig.33 SD4 平・断面図 (S : 1 / 40)

隅丸長方形を呈し、規模は南北1m06cm、東西76cmを測る。検出面からの深さは、16cmである。南東側の土坑は、平面形態が隅丸方形を呈し、規模は一辺1m20cmを測る。検出面からの深さは、14cmである。

出土遺物は、土師質土器の口縁9点、胴部91点、底部5点と細片、瓦質土器の胴体部3点である。このうち図示したのは、土師質土器の杯底部(78)である。

4) ピット

P39 (Fig.34)

調査区の中央部西寄りに位置する。北東側に存在するSK11と同じく、40cm大の扁平な河原石が立った状態で出土した遺構である。また、遺構内からは拳大から人頭大の規模を持つ河原石が出土している。平面形態は不整形から長方形を呈し、規模はSK11よりも小さく、124×88cmを測る。遺構底部は南西側で浅く、北東側で深い。検出面からの深さは、40cmを測る。主軸方向は、N-49° -Eである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の胴体部5点である。

P43・47 (Fig.34・40)

調査区の中央部西寄りに位置する。検出時には、P43は隅丸方形、P47は不整形を呈した、それぞれ独立した遺構として認識された。遺構の掘削を進めるに、埋土に粗砂が混入する変化は見られたものの、固結の弱い二次的な堆積層の分布が、南のSK11からSK12に掛けて見られ、遺構の輪郭を明確にできなかった。平面形態は湾曲する溝状であり、規模は長さ約2m、幅65cmである。検出面からの深さは、35cmを測る。遺構埋土は、P43は黒褐色土、P47は暗灰褐色土である。

出土遺物は、P43では土師質土器の口縁1点、胴体部3点であり、P47では土師質土器の口縁3点、胴体部5点、底部2点である。このうち図示したのは、P47から出土した3点である。88は土師質土器の杯口縁、89は土師質土器の小皿である。90は上下に糸切り痕を残す。円盤状高台の椀底部である。

P48 (Fig.34・40)

調査区の中央部東寄りに位置する。SK18の南東側に隣接して存在する。平面形態は不整楕円形で

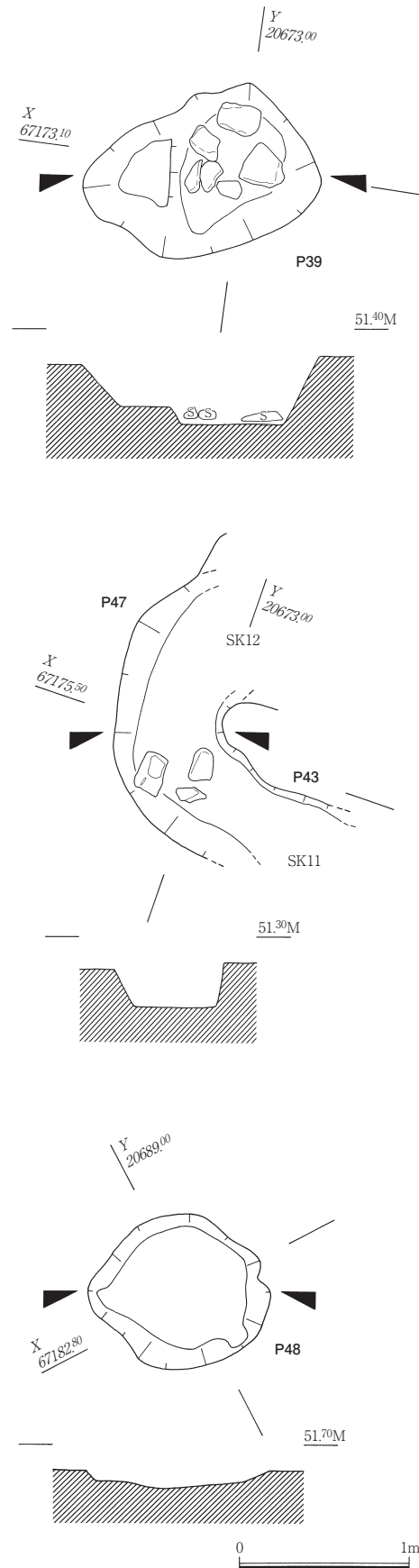


Fig.34 P39・43・47・48平・断面図 (S : 1 / 40)

あり、規模は106×94cmを測る。底部は浅く、緩やかな凹面を成す。検出面からの深さは、11cmを測る。主軸方向は、N-61° -Wである。遺構埋土は黒褐色土であり、炭化物を含んでいる。SK18に近く規模も似ていることから、同様な性格の遺構と考えられる。

出土遺物は、土師質土器の口縁2点、胴体部15点、底部1点、と細片である。このうち図示したのは、土師質土器の小皿口縁(91)である。

P52 (Fig.12)

調査区の中央部東寄りに位置する。南西側でSK18-1と接する。平面形態は不整形であり、規模は82×68cmを測る。P52は極浅く、平らな底部が辛うじて残されていた。検出面からの深さは、3cmを測る。主軸方向は、N-38° -Wである。遺構埋土は、黄色土を含む黒褐色土である。

出土遺物は、土師質土器の口縁2点、底部1点と細片である。

P86 (Fig.35)

調査区の中央部東寄りに位置する。ピット状の深い主体部と、先後関係が明らかでない浅い周辺部がある。平面形態は円形であり、規模は直径93cmを測る。検出面からの深さは、周辺部で10cm、西側の主体部では38cmを測る。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師器の胴体部1点、土師質土器の口縁3点、胴体部6点と細片である。

P97 (Fig.35)

調査区の中央部東寄りに位置する。柱穴と考えられる安定した形態を示す。平面形態は楕円形であり、規模は長径64×40cmである。底部は西で浅く東で深い。検出面からの深さは、西で27cm、東では52cmを測る。長径方向は、N-65° -Eである。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師器の底部1点、土師質土器の口縁5点、胴体部13点、糸切りの底部1点である。

P145 (Fig. 2・40)

調査区の中央部東寄りに位置する。東側に暗灰褐色土の浅い凹部が存在し、P145はこれを切っている。平面形態は円形であり、規模は直径28cmである。検出面からの深さは、20cmを測る。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、弥生土器の細片、土師質土器の口縁2点、胴体部17点と細片である。このうち図示したのは、糸切り痕のある土師質土器の小皿(104)である。

P147 (Fig. 2・40)

調査区の中央部東寄りに位置する。西側の上位を浅い

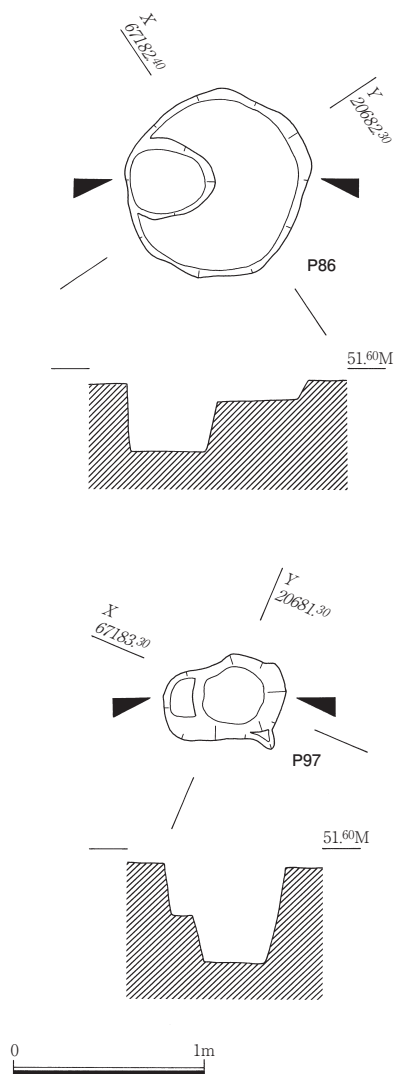


Fig.35 P86・97平・断面図 (S : 1 / 40)

土坑SK49に切られている。平面形態は円形であり、規模は直径70cmである。底部は南側にやや傾斜しており、検出面からの深さは、26cmを測る。遺構埋土は、黒褐色土であり、下位にはにぶい黄褐色土が多く混ざっている。

出土遺物は、土師質土器の口縁9点、胴体部16点、底部1点と細片、須恵器の壺口縁1点、陶器の胴体部1点である。このうち図示したのは、土師質土器の杯底部(106)と須恵器の壺?口縁(107)である。

P158 (Fig. 2・41)

調査区の中央部東寄りに位置する。遺構の稠密域に存在する、規模の小さなピットである。土師器の皿が3枚重なって出土している。平面形態は円形であり、規模は直径26cmである。検出面からの深さは、16cmを測る。遺構埋土は、黒褐色土である。

出土遺物は、土師器の皿3点、土師質土器の口縁1点と細片である。このうち図示したのは、111から113の土師器の皿3点である。口縁に強いナデが施され、外面には段が形成される。底部には、微かに粘土紐巻き上げによる接合痕が残る。

3. 包含層出土の遺物

Ⅲ層出土の遺物 (Fig.42)

嘗ては段丘上を表土として覆っていたと考えられる腐植土層(構成土は黒ボク)は、現在では段丘崖の上下に極僅か残されている他には、遺構や倒木痕跡などにその存在の名残りを留めている。

調査区の南西端では、上の腐植土を起源とする包含層が発見されており、幾らかの遺物が纏まって出土している。表土及び旧耕作土とは区別して、これをⅢ層として扱った。

115は縄文土器の深鉢口縁であり、外面に2条の刻み列、内面に原体小口による刺突が施される。SX4出土の52に近似する。116は青磁の碗口縁であり、龍泉窯系。117は土師質土器の杯口縁である。内面はナデが施され、外面にはロクロ目が残る。118は土師質土器の小皿であり、底部に糸切り痕が残る。119は青磁皿の屈曲する体部破片である。恐らく龍泉窯系。120は口縁が緩やかに内湾する土師質の杯。121は底部にヘラ切り痕を残す土師器の皿。122高台が欠損した陶器の鉢底部である。胎土は白灰色であり、内面に緑色の自然釉がかかる。瀬戸・美濃産? 123は土師質土器の杯口縁。124は土師質土器の皿であり、糸切り痕の残る外底は凹面を成す。125は土師器の皿であり、底部には粘土紐の巻き上げによる接合痕を残す。126は土師質土器の杯口縁であり、口縁はやや外反する。127は土師質土器の杯であり、底部に回転糸切り痕?を残す。128は土師質土器の皿であり、底部に糸切り痕を残す。129は土師質土器の皿であり、底部に糸切り痕を残す。130は土師器の皿?であり、底部にはヘラ切り痕(ナデ?)が残る。131は土師器の皿である。高い高台が『八』字状に付く。底部には、粘土紐の巻き上げによる接合痕がよく残される。132は土師器の碗である。円盤状の分厚い底部を有する。133は焼成不良の須恵器碗である。重ね焼きに伴うであろう『十』字状の焼け跡が、火襷風に残される。底部には回転糸切り痕が残される。134は土師質土器の杯底部であり、糸切り痕が残される。

4. まとめ

1) 出土遺物

今回の調査で発見された遺物のうち、部位の明らかなものはおよそ4,800点であった。このうち、遺構からの出土遺物は約4,000点である。包含層からの遺物としたものは、約800点であり、主に調査区の西端部で検出された黒色土と中央部での遺構検出に際して発見されたものである。遺物の多くは、土師質土器と土師器で占められており、器形は杯、小皿、皿、椀などである。弥生後期土器や縄文土器も僅かではあるが、一定量包含層や規模の大きな遺構から破片で出土している。以下では、出土遺物の主なものを取り上げることで、林田遺跡の一面を見ることが出来たらと考える。

縄文土器

3点を図示した。2は深鉢の胴体部に不明瞭ながら“RL”の縄文が施紋されている。52と115は形態と内面の刺突から同一個体の可能性がある。52はキャリパー型の口縁を有するものと見られ、115の口縁外面には少なくとも幅広の低い隆帯が上下二段に施され、この上を半截竹管状原体によりやや弧状に刻まれる。52ではこの刻みは不明瞭であるものの、二段の隆帯の谷間にあたる部分に、刻みまたは刺突による窪みが残されている。縄文中期第二様式の深鉢と考えられる。図では、口縁を平縁として示したが、波状口縁の可能性がある。

土師器

遺構からの出土遺物では、3の底部はやや湾曲し、低い断面台形の高台が付く。高台は形骸化した印象を与えているが、底部に糸切りの痕跡は留めていない。高台基部の接合痕を残しながらも概ねナデ消している。13は、内面に縦位のヘラナデが施される。外面には断面台形から蒲鉾型を呈した高台が、接合痕を残して付く。胎土は白色系である。26の底部外面には静止糸切り痕が認められる。46は椀と考えられる。摩滅が著しく、部分的に残る高台の形態は明らかでない。内面はナデが施され、胎土は白色系である。50の内面はナデまたはミガキにより丁寧に仕上げられている。高台は低く、断面台形であり、接合痕を残して付く。58は底部端が腰折れ型に明確に残された製品で、糸切りによる成形の後に、底部中央寄りに段面三角形の高台を付けた椀と考えられる。85の皿は、P158出土の遺物と共通する。口縁に強いナデが施され、外面に段が形成されている。外面には凹凸を残し、内面はナデで仕上げられる。90は回転糸切りによって作られた円盤に、粘土を貼付して体部を立ち上げる。97の底部は、緩やかな凸面を成し、断面台形の高台は端から内側に寄って付く。接合痕を外側に残し、内側はナデで仕上げられる。111から113は、P158からの出土であり、皿3点が重なって出土している。口縁の内・外面に強いヨコナデが施され、外面の口縁下には明瞭な段が形成される。内面は丁寧にナデ仕上げされる。111・112は赤褐色系、113は白色系を呈する。133は焼成不良な須恵器または還元雰囲気焼成された土師器の椀である。厚い底部には糸切り痕が残されている。重ね焼きに伴う道具？の痕跡が火襷状に残されている。

包含層からの出土遺物では、121の底部はヘラ切りによる？内・外面は丁寧にナデで仕上げられる。130も同じく、底部はヘラ切りによる？内面は丁寧なナデが施される。土師質土器の杯や皿などの底部外面には、切り離し後に付けられたと考えられるヘラ跡や粘土の擦り跡が残されており、121や130などの底部破片はこのような状態の部分であった可能性がある。131の底部には高い高台

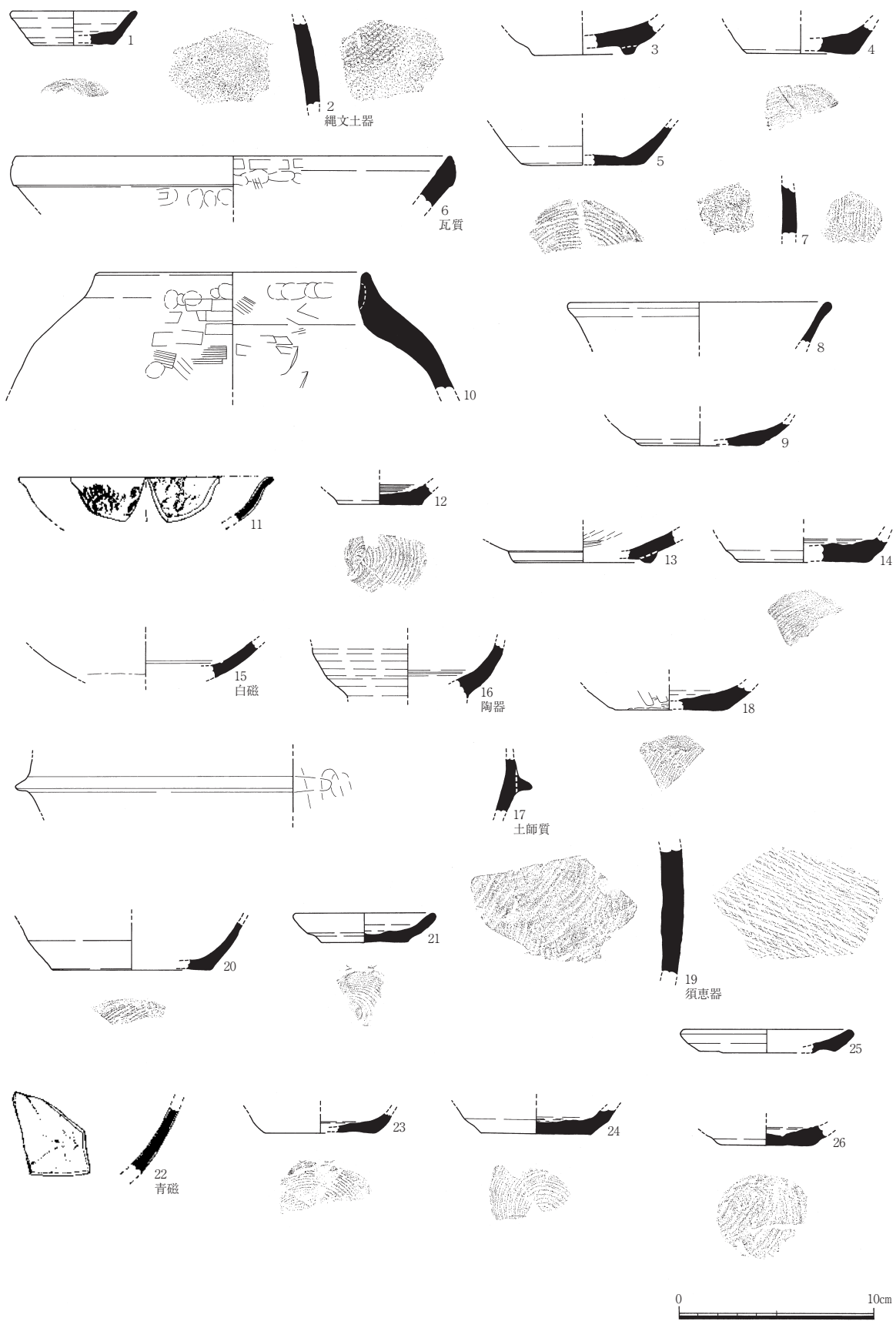


Fig.36 SK出土遺物 その1 (S : 1 / 3)

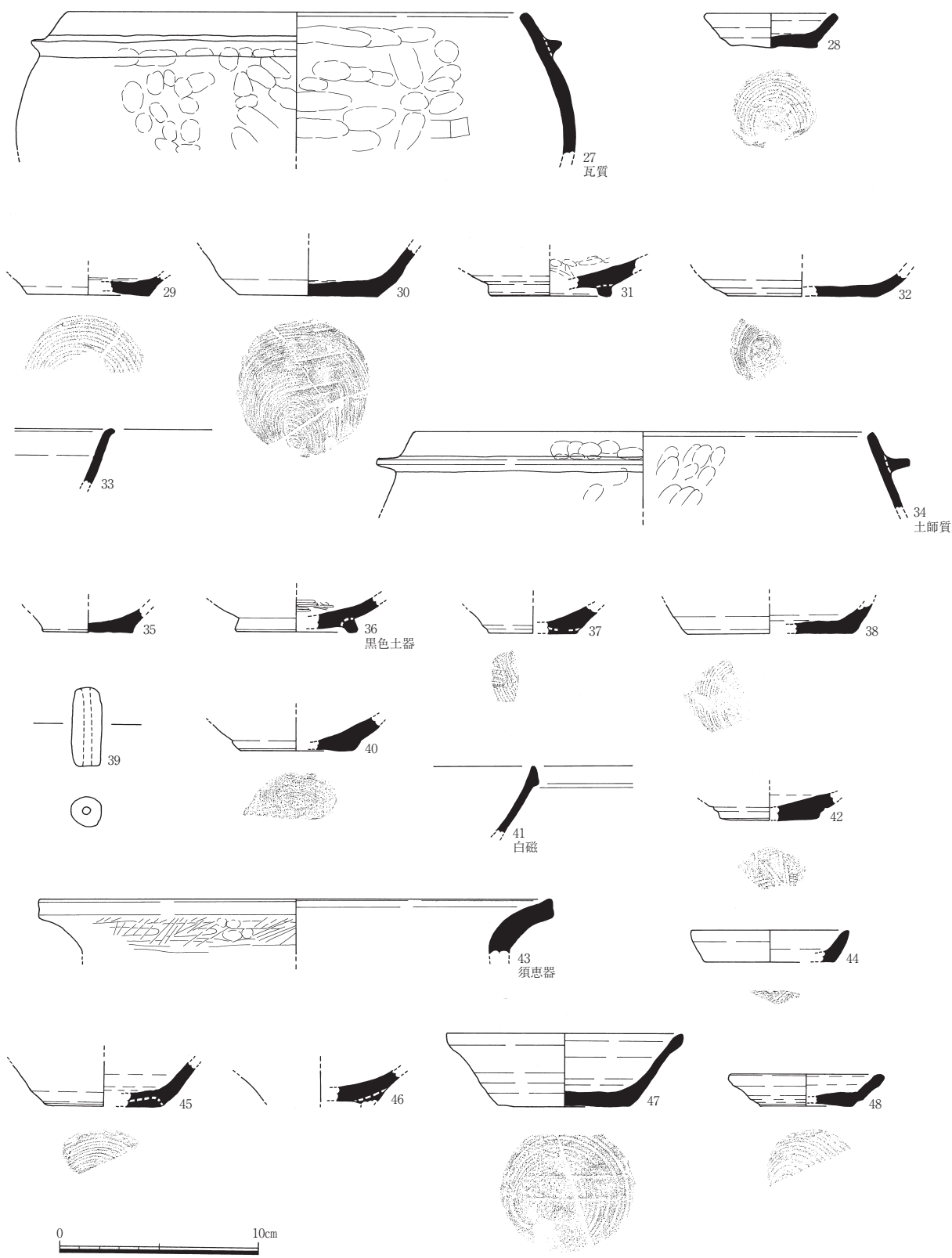


Fig.37 SK出土遺物 その2 (S : 1 / 3)

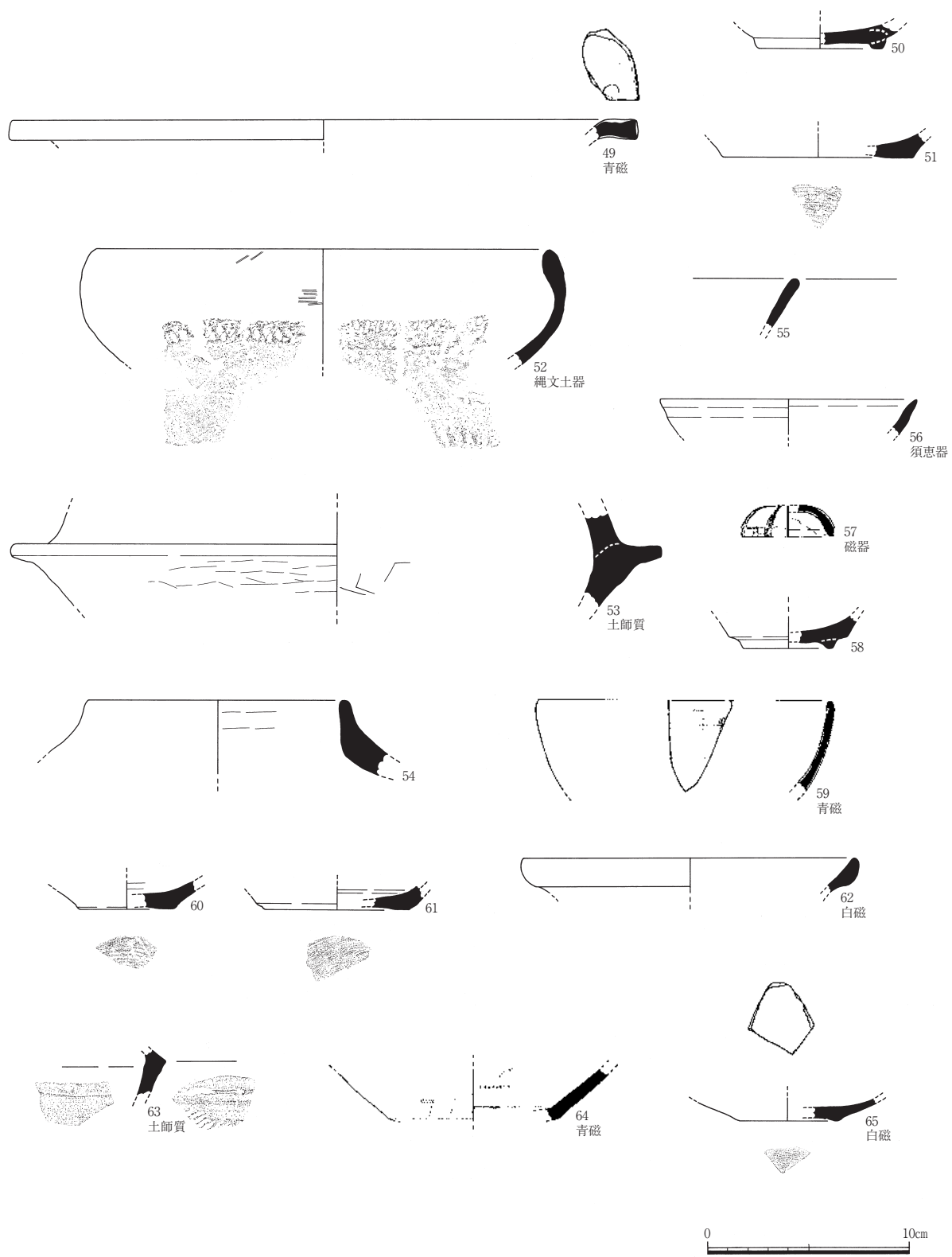


Fig.38 SX出土遺物 (S : 1 / 3)

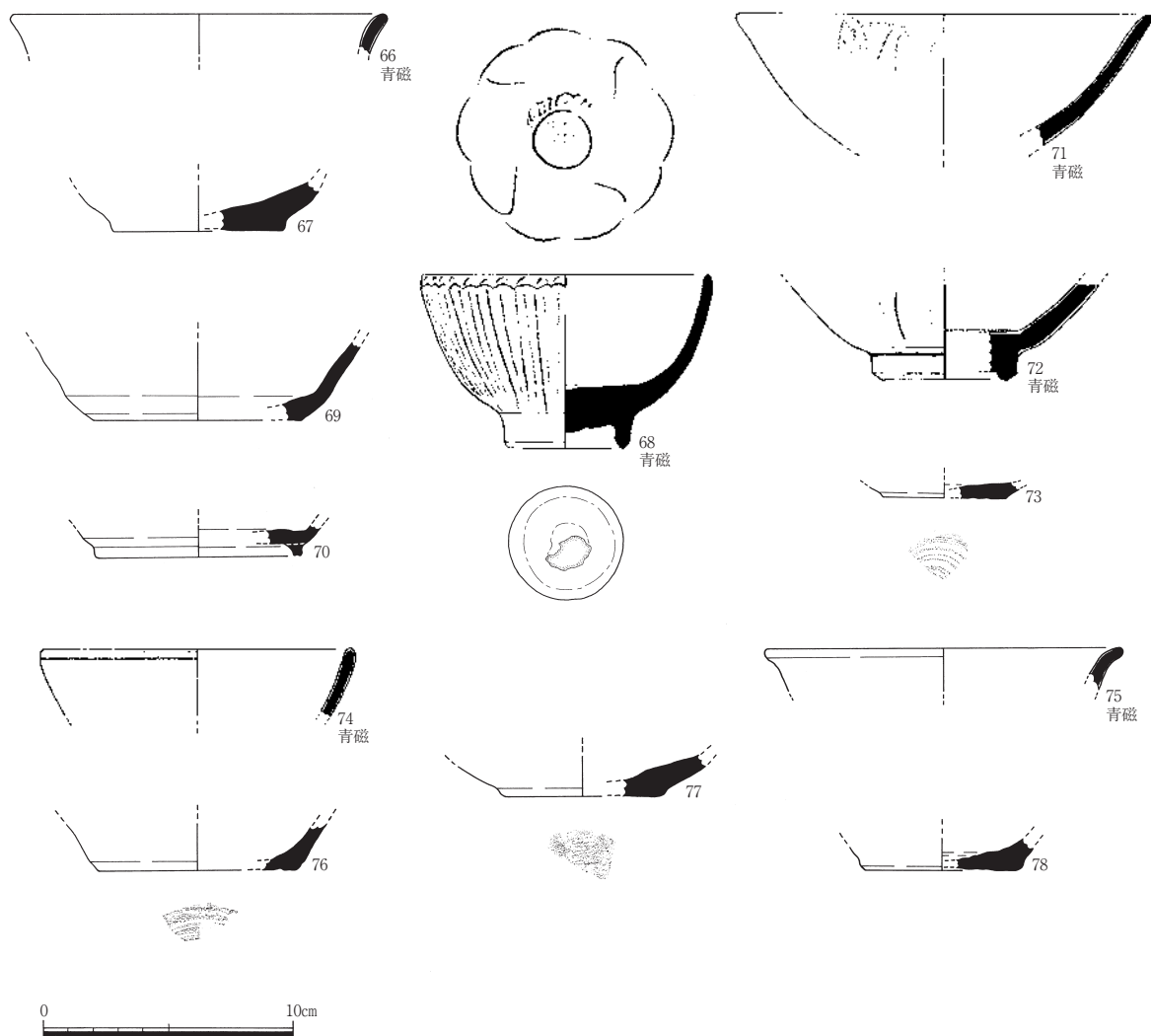


Fig.39 SX・SD出土遺物 (S : 1 / 3)

が付き、接合痕は丁寧にナデ消される。内・外面共に仕上げは丁寧であるが、高台内は粘土紐の接合痕が顕著に残されている。132は円盤状の高台部分を持つ碗である。

青磁

同安窯系、龍泉窯系のものが認められる。22はI-2・a類と考えられる。内面に片切彫りによる草花紋を施しており、外面は無紋である。胎土は淡い灰白色で、釉は緑灰色に発色している。64は同安窯系の碗であり、I-1・b類と考えられる。内面の体部と底部の境には、屈曲により沈線状の窪みが見られる。内面に櫛目紋が施され、外面体部中位以下は無釉である。68はB-IV類の碗と考えられる。外面には、細線蓮弁紋が描かれおり、横位に連続する剣頭と概ね隔たりを持つ。内面見込みにはヘラによる花卉が描かれ、中央にスタンプによる文字が施されている。高台内は蛇ノ目釉剥ぎを行い、窯道具胎土が一部付着している。59はC-II類の碗と考えられる。外面口縁にヘラによる雷紋が施される。体部にはヘラによる蓮弁紋か。49の盤は、口縁を型作りにより輪花に仕上げたものである。断面形は長方形を成し、端部でやや肥厚する。上面には、沈線状の窪みが施され

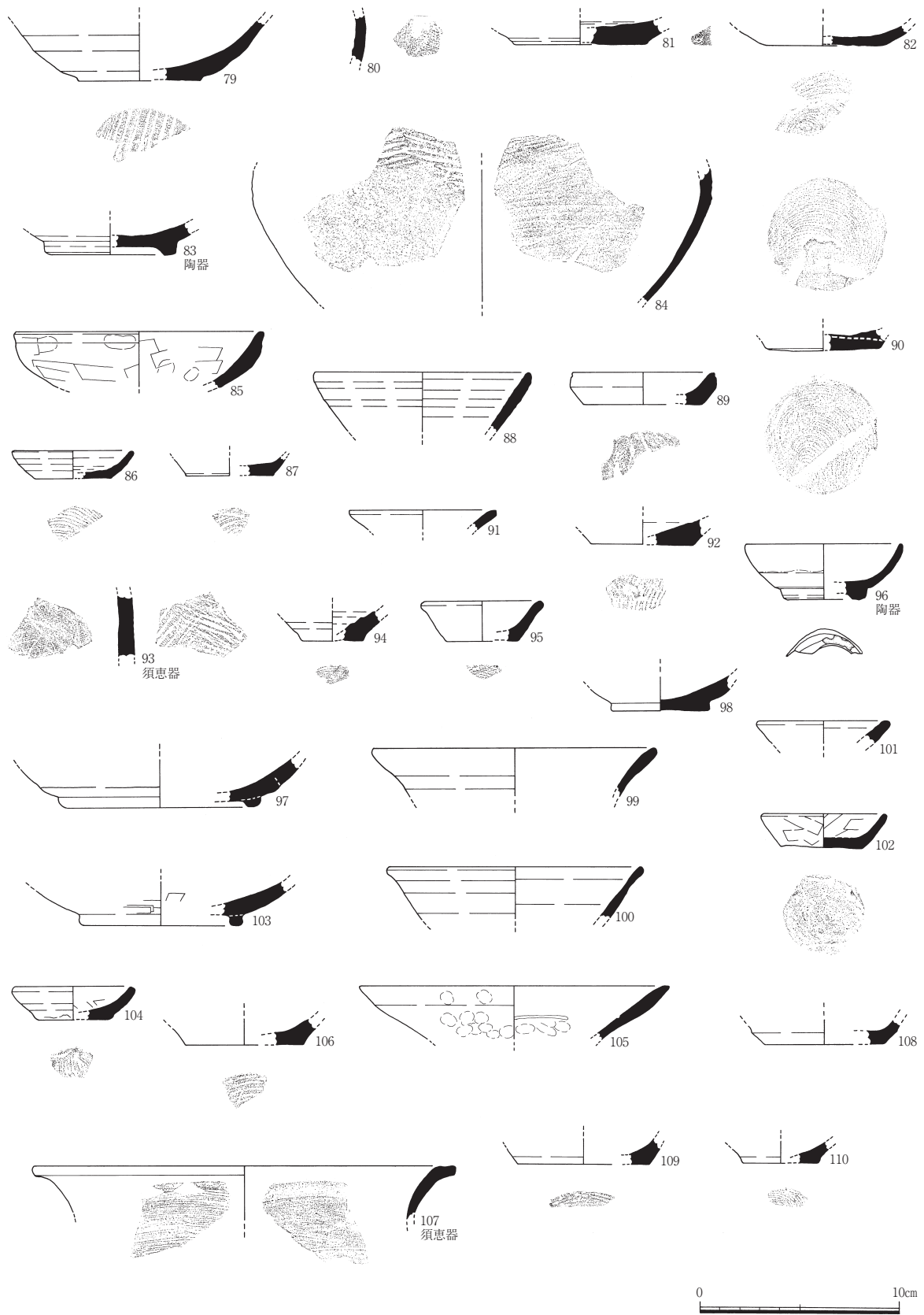


Fig.40 ピット出土遺物 その1 (S : 1 / 3)

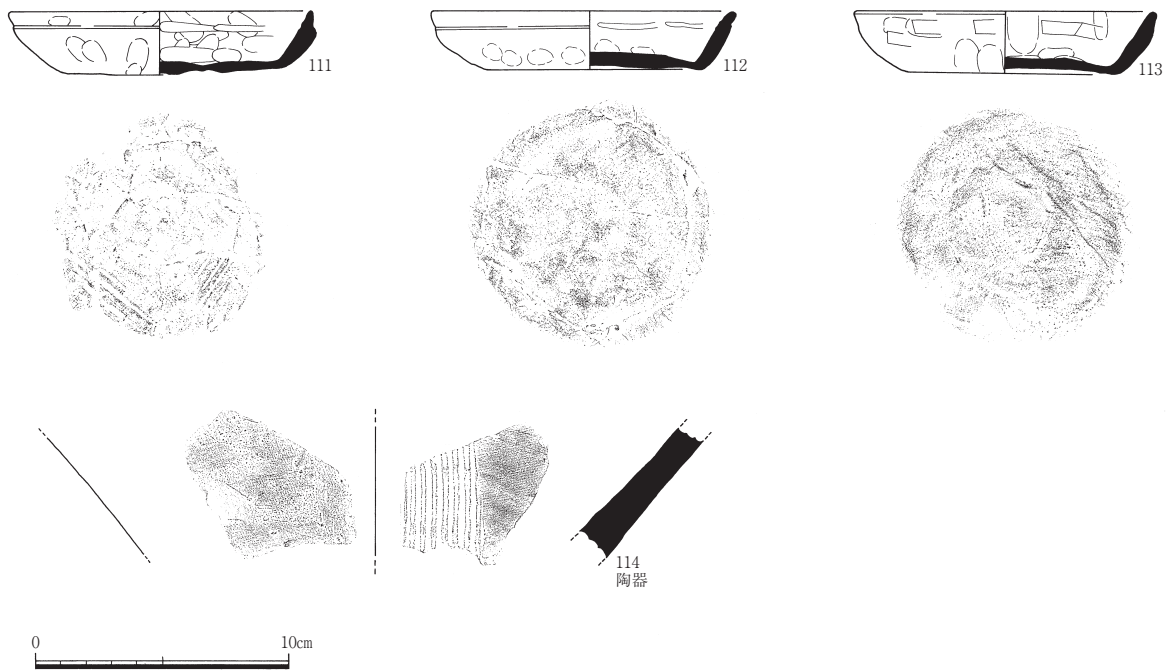


Fig.41 ビット出土遺物 その2 (S : 1 / 3)

る。淡い灰白色の胎土持ち、釉の発色は淡青色を呈する。66は、口縁が端反りを呈するD類と考えられる。やや厚く仕上げられた器壁に、三度重ねて掛けられた釉薬が見事に残る。71は、I - 5類の碗と考えられる。外面には片切彫りによる丁寧な鎬蓮弁紋が施されている。釉薬の発色がやや不良であり、一部では淡い褐色を呈する。灰白色の胎土には、多くの円孔が残されている。72は、I - 5類の碗と考えられる。外面は恐らく片切彫りによる鎬蓮弁紋が施されているであろう。高台内は浅く削り出され、畳付けはやや内傾して削られる。淡く発色する釉薬は、一部で褐色を帯びている。畳付け以内は露胎する。74は、丸形の碗E類と考えられ、口縁外面には1条の沈線が巡る。釉の発色は、淡い緑灰色であり、細貫入が認められる。75は、端反りの口縁を持つD類の碗と考えられる。胎土は淡い灰白色であり、釉薬は淡い青灰色に発色している。116は、端反りの口縁を持つもので、D類の碗と考えられる。胎土は淡い灰白色であり、釉の発色は青味を帯びた淡い緑灰色である。細貫入が見られる。119は皿であり、体部下位で屈曲し、口縁は外反する。稜花皿の可能性を持つが、内・外面に施紋は見られない。釉は黄色を帯びた濃い緑灰色を呈し、細貫入が認められる。焼成不良または二次的な被熱か。

白磁

15は、IV - 1・a類の皿と考えられる。体部内面に1条の沈線を施し、外面にはヘラケズリが施されている。釉はやや緑色を帯び、外面の低位は露胎する。33は、皿類の皿と考えられる。口縁は短く外側へ屈曲する。内面の胴部中位に微かな段を留める。内・外面の釉は、やや褐色を帯び、外面口縁下に釉垂れが認められる。41は、IV - 1類の碗と考えられる。口縁は外側に断面三角形の玉縁状を成して肥厚する。やや透明感のある白色の胎土で、円・裂の気孔が残される。57は合子の蓋と考えられる。外面は、型作りにより蓮弁が施される。釉薬は淡い青色に発色し、平らに仕上げら

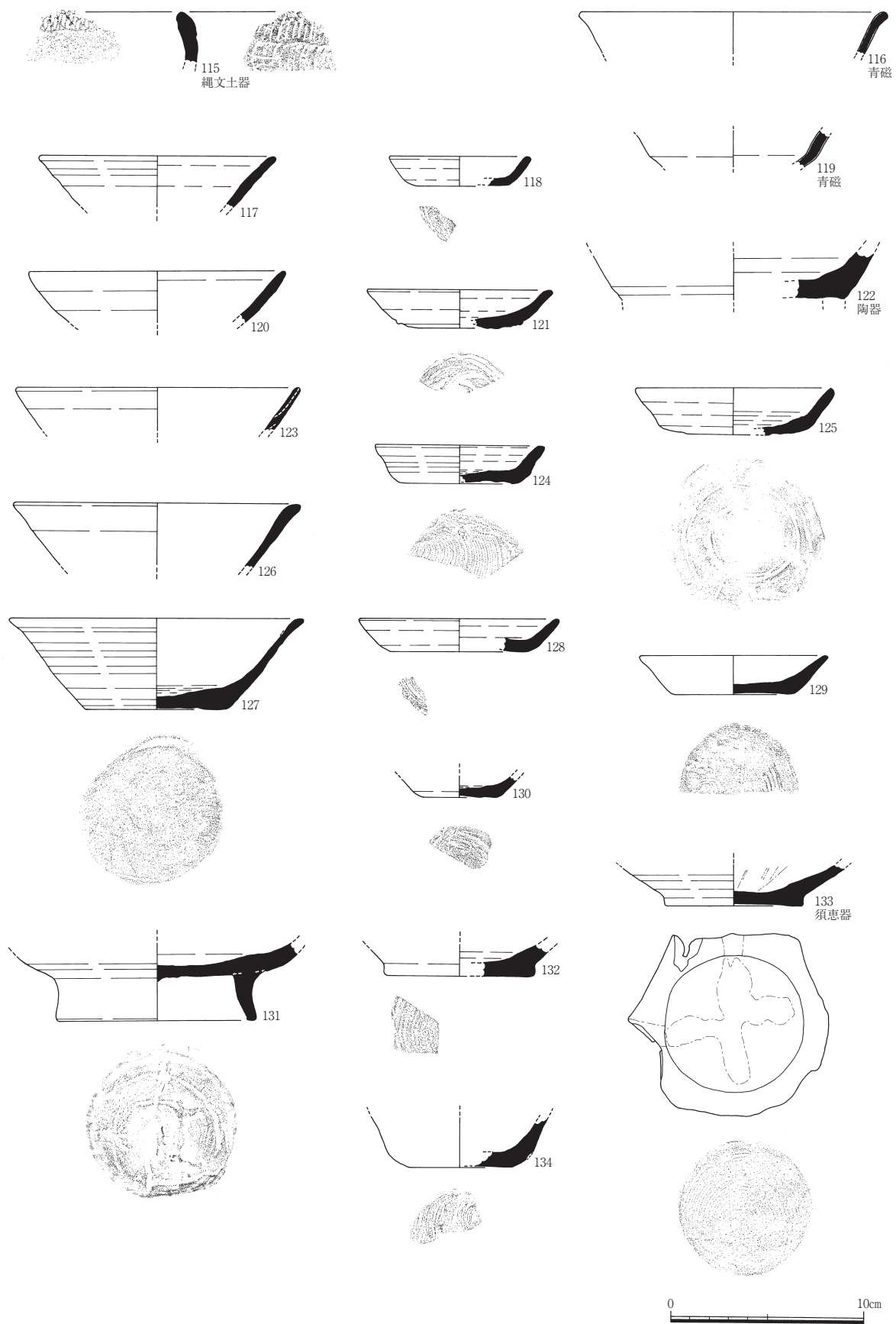


Fig.42 包含層出土遺物 (S : 1 / 3)

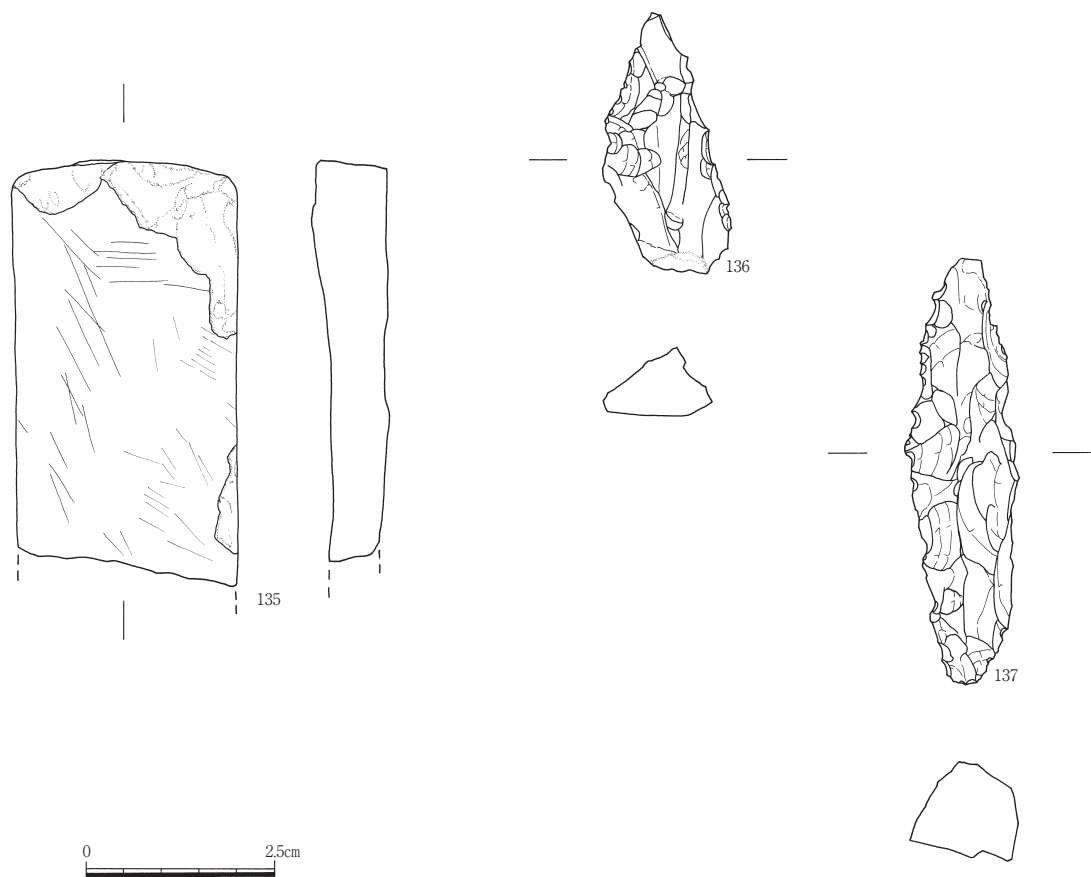


Fig.43 出土石器・石製品 (S : 1 / 1)

れた口唇と内外面の口縁は釉剥ぎ、または露胎で仕上げられる。62は、IV-1類の碗と考えられる。口縁外面は蒲鉾型の玉縁を成して肥厚する。釉の発色は、淡い灰白色を呈す。65は、VIII-2・a類の皿と考えられる。見込みに浅い沈線による施紋が見られるが、意匠は不明である。底部は碁笥底を成し、釉剥ぎして露胎する。釉は淡く青色を帯び、細い貫入が見られる。

その他

11は染付であり、蓋皿か。内面には草花紋、外面には宝珠紋または唐草文を施す。肥前系? 16は丸形の碗である。内面に薄く灰釉が掛かり、淡い緑灰色を呈する。外面は露胎し、低位ではケズリ痕を残す。31は、陶器の碗である。内面は丁寧に仕上げられるが、ヘラ痕を残す。規模の大きな裂孔が多く残り、粗雑な印象を受ける。36は黒色土器A類の碗である。内面に横位のヘラミガキが施される。43は須恵器の甕である。灰白色を呈し、胎土中に砂粒を含んでいる。外面口縁に右上がりのタタキ目?が残される。83の碗は、内面に淡い灰白色の釉が薄く掛かり、外面は露胎する。高台は台形を呈し、外側は直立、内側は傾きを持って削り出される。114は、播鉢の体部であり、内面にはナデの後、断面四角形の播り目が残る。内・外面は褐色であり、胎土は灰色を呈し、黒斑を含む。122の鉢は、底部内面にはロクロ目が残されており、緑色の自然釉が掛かる。瀬戸・美濃産? 煮沸具としては、53の羽釜は土師質であり、整った形態を示す。摂津型である。17・34は土師質であり、27は瓦質の鍋である。

2) 検出遺構

遺構は、多くが調査区の中央以北に存在しており、後世に於ける遺構の削平と共に、特に中央部では遺構間の切り合いが甚だしい。この中には、良く似た形態の遺構が重複、または隣接して存在しており、時期的・空間的な土地の利用が行われたものであろう。

ピット群

掘立柱建物を構成するものであろう。実際建物のプランを提示することはできなかったが、主に土坑群に対して先行して存在した遺構と考えられる。SK46やSK48に係わるピット群P140・142・146・152やP148・149は、上物の建て替えに伴うものと考えられる。また、P86やP147などは、ピットと浅い土坑が重複乃至隣接して存在する。構造的なものか。

土坑群

調査区の西側で発見されたSK4～6は、円形を呈し、黒ボクを起源とする黒色土を遺構埋土としており、深度や遺物の出土状況に共通点が見られた。また、東側で発見されたSK25やSK30は、形態や規模、保存状態が良い点などに共通点が見られたが、後者は遺物の出土がやや多く見られた。貯蔵穴的な性格であろうか。SK2・SK35は隅丸方形を呈する形態が共通し、同規模の遺構から離れて単独で存在する特徴を持つ。SK11とP38は隣接し、同規模の扁平な河原石が立った状態で存在していた。SK15～17には、4から5基の遺構が存在し、一部で重複する。時間的な先後関係はあるものの、不整円形から不整方形を呈し、掘削深度も同程度であることから、同じ性格の遺構であったことが推定される。土壙と考えられ、ここを墓地として占地した時期があったと考えられる。SK19・21～24・26・29などは同規模の円形から隅丸方形を呈する遺構であり、遺構間に適当な距離を保って比較的整然と並んでいることから、同時期のものと考えられる。SK32・39・44・49などは、円形から不整円形の形態と同様な規模を示しており、可成り激しい切り合いを留めている。周辺に存在するSK36・37・40・41などを含めてやや広い範囲で、土地の占有があったものと考えられる。これらの多くは、土壙であろうか。SD2は、調査区南側の切り通し部分に向かって伸びるであろう溝状遺構である。この溝は、北側のSD2・3に通じる給排水口的性格を持つものであろう。SD2・3の東に存在する舟形の土坑SX10は、比較的緩やかに設けられた北側を侵入口とする穴蔵的な遺構であろうか。また、SD4を含めてSD2・3と共に、水に関わる苑池遺構であろうか。

遺構について言及できる遺物は少ないが、先述の各遺物への検討を考慮すると、SK4～SK6は、SK25と共に縄文時代に機能した可能性がある。SK2・SK35は、土地の活用が落ち着く近世以降のものか。整然と並んだ、SK19・21などは、調査区南のSK18などと共に、12世紀代に機能していたものであろう。SK36・SK37などは、12世紀代に機能時期を考えられる。SK32・SK39などは、明確にし難いが同様な時期のものであろうか。SD2・3は、16世紀代の遺構と考えられる。また、SX10は、15世紀前半には機能を終えたものであろうか。出土遺物としてはやや古いものが多く存在する。SX11は、先行する西側が16世紀初頭には埋積されていたものと考えられる。SX15は、13世紀代の機能時期が考えられる。

3) 中世の林田遺跡

今回の調査区で発見された遺物は、量的に多くはない。しかし、古代末から中世にかけての林田

遺跡と周辺の様子を窺うには欠くことができない。担当者の力不足は否めないが、I章で述べた様な物部川の水運を利用して進められていたであろう生活の痕跡は、遺物が主に認められる10世紀以降16世紀に亘って顕著である。今では、それについて語るものは数少ないが、以下では多少ともそれらを傍証することができればと考える。まず、「長宗我部地俵帳」では、“林田ニノ堀” “ツメ” “ヤシキ” “三ノ堀” の表現が認められ、中屋敷、下屋敷などの記載が見られる。これは、小字名に“八幡”の名が残されており、平成11年に行われた調査では、調査Ⅱ区で南北方向の大溝が43m確認されている。大溝は、16世紀代に機能を終えており、林田城跡に関わる堀と考えられる。調査区の一部は、この林田城跡の一部、または関わるものと考えて良いであろう。調査区の周辺では、地俵帳に記載されている“鹿園寺”が、小字“シカソノ”に存在したと考えられる。また、その山際には日吉神社が存在している。これらの寺社が存在する基礎には、物部川左岸に占める林田城跡周辺の地形的・地理的位置と共に、中世以前の段階で城跡が設けられる経済的な背景が存在してものと考えられる。古代末における物部川の河道が、何処であったか明確でない。しかし、段丘崖下の比較的近い場所を流れた時期があったとすれば、水運に携わることで富の蓄積に成功した集団があり、やがてそれを背景とした各施設の設置や充実が行われたと考えてもよいであろう。また、城跡西側の段丘崖下に“ヤシキノマル” “サンノヘ” の小字名が認められることから、河道に隣接した場所に交易を司る施設が存在した可能性がある。

参考文献

- 網野善彦『日本社会の歴史』岩波新書
上田篤『日本の都市は海からつくられた』中公新書
『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会1995年
『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会1993年
『小倉城跡 2』財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財事業室1997年
『日本出土の貿易陶磁 西日本1』国立歴史民俗博物館1993年
『林田遺跡 I』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
『林田遺跡 II』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会1979年

表2 林田遺跡ピット計測表1

遺構 No	規模 規模(cm)	深さ (cm)	平面形態	遺構埋土	出土遺物	備考
P 1	直径35	17	円形	黒褐色土	弥生土器胴体部 1点(80)・土師質土器底部 1点(79)	SX 1 に切られる。
P 2	直径25	14	円形	黒褐色土	土師質土器口縁 2点	
P 3	直径30	13	円形	黒褐色土		
P 4	直径25	13	円形	黒褐色土	土師質土器底部 1点(81)	拳大の円礫を含む。
P 5	直径30	9	不整円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 1点	
P 6	直径25	18	円形	黒褐色土	土師質土器口縁 1点・胴体部 2点	
P 7	94×30	20	不整楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁 3点・胴体部 5点・底部 1点(82)	木根痕?
P 8	44×28	28	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 4点・瓦質土器胴体部 1点	
P 9	42×26	23	円形	黒褐色土	土師質土器口縁 2点・胴体部 6点、白磁?底部 1点(83)	
P 10	48×42	45	楕円形	黒褐色土	土師質土器鍋口縁 4点・胴体部 5点	
P 11	直径30	11	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 4点・細片	
P 12	直径40	23	円形	暗灰褐色土	土師質土器口縁 4点・胴体部32点(84)・底部 2点・細片	
P 13	36×30	8	不整形	黒褐色土	土師質土器細片	炭化物
P 14	60×48	24	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁 1点・細片	
P 15	直径30	20	円形	黒褐色土	土師質土器口縁 2点・胴体部 3点・細片	
P 16	直径30	13	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 1点	
P 17	直径26	20	円形	黒褐色土	土師質土器口縁 1点(85)・胴体部11点	
P 18	42×33	13	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部14点	SK 9 内
P 19	直径30	21	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 1点	
P 20	40×28	20	楕円形	黒褐色土	弥生土器胴体部 8点・底部 1点	
P 21	46×30	12	不整形	黒褐色土	土師質土器胴体部 1点	
P 22	直径32	26	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部10点	1cm大のやや扁平な円礫
P 23	56×44	27	不整楕円形	黒褐色土	弥生土器 1点・土師質土器胴体部12点	
P 24	35×23	11	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 2点	
P 25	43×32	12	楕円形	茶褐色土	土師質鍋胴体部 1点・土師質土器 3点	
P 26	直径30	24	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部22点・底部 2点(86)	
P 27	直径44	40	円形	黒褐色土 (黄色土)	土師質土器胴体部11点	袋状を呈し、低位には粘性の強い黒ボク土の二次堆積が見られる。
P 28	66×38	19	不整楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 3点	
P 29	直径32	22	円形	灰褐色土	土師質土器胴体部 2点	
P 30	直径28	9	円形	灰褐色土	土師質土器口縁 2点・胴体部 5点	
P 31	直径35	44	円形	黒褐色土		
P 32	58×46	27	楕円形	灰褐色土	チャート剥片(136)	
P 33	80×52	24	不整楕円形	灰褐色土	土師質土器口縁 1点・胴体部 8点・底部 3点(87)	
P 34	50×32	23	楕円形	灰褐色土	土師質土器口縁 1点・胴体部 1点	
P 35	48×36	35	楕円形	黒褐色土	土師質土器底部 1点	
P 36	直径48	21	不整円形	灰褐色土	弥生土器胴体部 1点、土師質土器口縁 1点・胴体部11点、頁岩剥片(137)	炭化物
P 37	52×44	26	不整円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 5点	
P 38	46×35	37	不整楕円形	黒褐色土	弥生土器胴体部 1点・土師質土器口縁 1点・胴体部 4点	
P 39	130×86	40	不整長方形	黒褐色土	土師質土器胴体部 5点	扁平な円礫を含む。土壌?
P 40	直径40	35	円形	黒褐色土	弥生土器胴体部 1点、土師質土器胴体部 5点	
P 41	直径54	58	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部 1点	
P 42	36×32	39	不整方形	黒褐色土	土師質土器胴体部 4点・細片	
P 43	64×(80)	22	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁 1点・胴体部 3点	
P 44	直径22	19	円形	黒褐色土	土師質土器口縁 2点・胴体部12点・細片	

表3 林田遺跡ピット計測表2

遺構 No.	規模 規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態	遺構埋土	出土遺物	備考
P45	直径26	19	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部1点・細片	
P46	42×30	53	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部3点・底部1点	遺構底に黒褐色粘土が堆積する。
P47	64×(100)	26	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁3点(89)・胴体部5点・底部2点(88・90)	
P48	106×92	12~15	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点(91)・胴体部15点・底部1点・細片	炭化物
P49	75×64	10	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・底部1点・細片	礫
P50	72×55	10	不整形	黒褐色土	弥生土器胴体部1点、土師質土器口縁2点・胴体部1点	
P51	75×68	5	不整形	黒褐色土	弥生土器胴体部1点、土師質土器胴体部2点	炭化物
P52	86×76	8	不整形	暗灰褐色土 (黄褐色土 ブロック)	土師質土器口縁2点・底部1点(92)・細片15点	
P53	直径40	18	円形	黒褐色土	土師質土器細片	
P54	直径24	5~7	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部3点	
P55	直径26	20	円形	黒褐色土	土師質土器細片	柱痕あり
P56	45×31	35	不整形	黒褐色土	土師質土器細片	柱痕あり
P57	28×20	40	円形	黒褐色土	土師質土器底部1点、4cm大の扁平な円礫	攪乱溝下で検出
P58	直径18	15	不整形	黒褐色土	須恵器甕胴部1点(93)	浅い皿状
P59	65×(56)	20	不整形	黒褐色土	土師質土器胴体部2点	
P60	58×40	30	不整形	黒褐色土	土師質土器底部2点	
P61	直径37	20	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部1点	
P62	46×33	25	円形	黒褐色土	土師質土器底部1点	
P63	一辺30	33	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部7点・底部1点・細片	
P64	44×27	40	不整形	黒褐色土	土師質土器細片	
P65	40×33	30	不整形	黒色土	弥生土器胴体部1点、土師質土器口縁3点・胴体部3点	
P66	46×41	25	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部1点	
P67	48×(42)	22	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部3点・細片	
P68	直径36	50	不整形	黒褐色土		底部は黒褐色の粘土
P69	80×70	20	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部5点・底部1点・細片	鍋底、30cm大の円礫
P70	直径39	32	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部8点・細片9点	炭化物
P71	15×(15)	30	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部2点	SX14内
P72	53×36	50	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部2点	SX10内、扁平円礫を含む。
P73	80×60	22	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部2点・細片	P74と繋がり瓢箪形を成す。
P74	34×28	15	不整形	黒褐色土	土師質土器細片	浅い凹部
P76	52×42	10~15	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部2点・細片	
P77	30×23	25	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁3点・胴体部5点・細片	
P78	直径40	25	楕円形	黒褐色土	土師器細片、土師質土器口縁5点・胴体部4点・底部2点・陶器胴体部1点	
P79	直径22	25	円形	黒褐色土	土師器胴体部1点・土師質土器口縁1点・胴体部3点	柱痕?
P80	直径30	37	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部3点	SX10内
P81	48×42	12	楕円形	黒褐色土	土師器胴体部1点・土師質土器口縁1点・胴体部1点	
P82	一辺23	25	方形	黒褐色土	土師質土器胴体部1点	
P83	直径60	35	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部1点	攪乱溝下で検出
P84	直径28	30	円形	黒褐色土	土師質土器口縁3点・胴体部6点・底部2点(94)・細片、瓦質土器口縁1点・胴体部1点	
P85	直径26	20	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部3点・底部1点	
P86	直径40	36	円形	黒褐色土	土師器胴体部1点、土師質土器口縁3点・胴体部6点・細片	北東側に浅い土坑部を伴う。
P87	直径38	31	円形	黒褐色土	土師質土器口縁4点・胴体部14点・細片	炭化物
P88	直径26	29	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部9点、青磁体部1点(細連弁紋)	

表4 林田遺跡ピット計測表3

遺構 No	規模 規模(cm)	高さ (cm)	平面形態	遺構埋土	出土遺物	備考
P 89	直径32	30	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部2点	SX10内、黄色粘土を含む。
P 90	38×34	27	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部4点	SX10内
P 91	直径28	21	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点(95)・胴体部1点・須恵器胴体部1点	SX10内
P 92	50×44	11	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁3点・胴体部1点・底部1点	
P 93	35×23	9	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点	
P 94	41×36	20	不整形	黒褐色土	土師質土器細片	
P 95	42×32	33	円形	黒褐色土	土師器1点、土師質土器口縁4点・胴体部8点、磁器碗1点(96)	攪乱溝下で検出
P 96	42×40	10	不整形	黒褐色土	土師器底部1点(97)・土師質土器底部1点	
P 97	64×44	50	長方形	黒褐色土	土師器底部1点、土師質土器口縁5点・胴体部13点・底部1点	
P 98	直径25	20	円形	黒褐色土	土師質土器底部1点	
P 99	80×64	25	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部7点・底部2点(98)・細片	
P 100	56×20	20	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部1点・細片	木痕?
P 101	直径22	15	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点	
P 102	直径22	10	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部2点・底部1点	攪乱溝端部
P 103	80×50	10	円形	黒褐色土	土師質土器底部1点	一部破壊される。
P 104	直径30	25	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部3点・底部1点・細片	
P 105	48×32	15	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁5点・胴体部1点・細片	
P 106	42×22	20	楕円形	黒褐色土	土師器口縁1点・胴体部5点・細片	
P 107	直径28	29	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部6点・細片	攪乱溝下で検出
P 108	48×38	20	不整形	黒褐色土	土師質土器口縁5点・胴体部2点	
P 109	44×34	25	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部1点、陶器胴体部1点	SX10内
P 110	直径35	35	円形	黒褐色土 (灰褐色土)	土師質土器口縁10点(99・100)・胴体部4点・底部4点	
P 111	54×40	20	楕円形	灰褐色土	土師質土器胴体部1点・底部1点	
P 112	直径35	20	円形	黒褐色土	土師質土器細片	
P 113	72×51	25	不整形	黒褐色土		深く良好に残る。
P 114	50×46	19	不整形	黒褐色土 (灰褐色土)	土師器1点、土師質土器口縁1点・胴体部6点	ピット2個が重なる。
P 115	直径27	10	円形	黒褐色土	土師器胴体部1点、土師質土器胴体部1点	
P 116	30×21	20	楕円形	黒褐色土	土師質土器皿口縁2点	攪乱溝下で検出
P 117	直径38	30	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部4点・細片	
P 118	52×38	25	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁5点・胴体部6点・底部1点・細片	
P 119	直径31	15	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点(101)・胴体部5点	
P 120	直径23	35	円形	黒褐色土	土師質土器口縁3点・胴体部19点・細片	
P 121	直径24	14	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部2点・底部2点	
P 122	73×38	11	不整形	黒褐色土	土師質土器胴体部4点・細片	浅い凹部?
P 123	直径30	39	円形	黒褐色土	土師器胴体部1点(外面タタキ)、土師質土器胴体部8点・細片	
P 124	直径35	29	円形	黒褐色土	土師質土器口縁4点・胴体部40点・底部3点・細片	
P 125	18×22	8	不整形	黒褐色土	土師質土器胴体部2点・底部1点	
P 126	34×30	33	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部2点	SX7内
P 127	直径24	20	円形	黒褐色土	土師質土器細片	
P 128	24×20	26	楕円形	黒褐色土	弥生土器胴体部1点、土師質土器胴体部2点・底部1点	
P 129	直径25	36	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・胴体部6点・細片	P133と切り合う。底面に平石。
P 130	50×40	18	不整形	黒褐色土	弥生土器胴体部1点、土師質土器口縁4点・胴体部7点・細片	
P 131	63×58	7	円形	黒褐色土	土師器底部1点、土師質土器口縁2点・細片	SK34西
P 132	直径29	33	円形	黒褐色土	土師質土器口縁3点・白磁胴体部1点	

表5 林田遺跡ピット計測表4

遺構 No.	規模 規模(cm)	深さ (cm)	平面形態	遺構埋土	出土遺物	備考
P133	直径24	37	円形	黒褐色土	土師質土器小皿口縁1点(102)・口縁2点・胴部4点	
P134	28×20	30	楕円形	黒褐色土		
P135	直径32	26	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部5点・細片、瓦質土器胴体部1点	炭化物
P136	直径36	22	円形	黒褐色土	土師質土器口縁3点・胴体部16点・細片	SX15に切られる。
P137	直径35	45	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部1点	SK36内
P138	直径36	25	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部2点	
P139	直径24	34	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部5点・底部3点	SK42内北端
P140	直径32	17	円形	黒褐色土	土師質土器壺口縁1点	炭化物。SK46内
P141	直径36	47	円形	黒褐色土	土師器底部2点(103)・胴体部3点、緑色チャート剥片	SD4内
P142	直径30	39	円形	黒褐色土		SK46内
P143	直径24	14	円形	黒褐色土	土師質土器口縁2点・細片	SK47内
P144	44×40	15	不整形	黒褐色土	土師質土器胴体部4点・細片	SK47内
P145	直径22	20	円形	黒褐色土 (灰褐色土)	弥生土器細片、土師質土器口縁2点(104)・胴体部17点・細片	東側に浅い凹部を含む。
P146	34×31	53	円形	黒褐色土	土師器口縁1点(105)、土師質土器胴体部3点・底部1点・細片	炭化物。SK46内
P147	直径70	25	円形	黒褐色土	土師質土器口縁9点・胴体部16点・底部1点・細片、須恵器壺口縁1点(106)・陶器胴体部1点(緑釉)	西側の灰褐色土を埋土とする凹部(SK49)に切られる。
P148	直径30	30	円形	黒褐色土	土師質土器口縁6点・胴体部12点・底部3点・細片	SK48内
P149	直径27	34	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部3点・底部1点・細片	SK48内、円礫を含む。
P150	直径35	29	円形	暗灰褐色土 (黄褐色土)	土師質土器胴体部2点・底部1点・細片	SK47内、P143と重複する。
P151	直径31	19	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部5点	
P152	34×26	38	楕円形	黒褐色土	土師質土器細片	SK46内
P153	34×33	20	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部3点	
P154	25	10	不整形円形	黒褐色土	土師質土器胴体部4点・細片	SK44に切られる。
P155	直径30	13	円形	黒褐色土	土師器胴体部1点、土師質土器胴体部2点	SK37を切る
P156	直径33	20	円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部4点・細片	SK44に切られる。
P157	直径62	42	円～楕円形	暗灰褐色土	土師質土器胴体部3点・底部2点(109・110)・細片	ピット2個が重なる?
P158	直径26	16	円形	黒褐色土	土師器皿3点(111・112・113)、土師質土器口縁1点・細片	地鎮祭祀
P159	30×18	30	楕円形	暗褐色土	土師質土器胴部3点・細片	
P160	直径36	37	円形	黒褐色土	土師質土器口縁5点・胴体部20点・底部4点・細片35点	SK49に切られる。粘土塊や炭化物を含む。
P161	32×26	24	楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部3点・細片	SK46内
P162	70×42	25	不整形楕円形	黒褐色土	土師質土器口縁1点・胴体部4点・細片	炭化物
P163	30×26	28	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部1点・細片、陶器播鉢体部1点(114)	
P164	28×20	14	楕円形	黒褐色土	土師質土器胴体部1点	
P165	直径17	8	円形	黒褐色土	土師質土器胴体部1点	
P166	直径30	30	円形	黒褐色土	土師質土器細片	
P167	直径32	20	円形	暗灰褐色土	土師質土器胴体部8点・細片	

表10 林田遺跡出土遺物観察表5

図版 No - No	遺物 遺構 他 層	出土地点 他 層	器種	器形	部位	法量(cm)				特徴	色調			備考
						口径	器高	胴径	底径		内面	外面	胎土	
40-94	P84		土師質土器	杯	底部	-	[1.5]	-	3.0	内面ロクロ目 外面ロクロ目のちナデ(底)回転系切り痕 平らな底部から体部は上方、のち直線的に外上方に立ち上がる。胎土精製。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	
40-95	P91		土師質土器	杯	-	5.8	2.0	-	3.7	内面ナデ 外面ナデ(底)回転系切り痕 平らな底部から体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁で短く外反する。砂質胎土。	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	
40-96	P95		磁器	小杯	-	8.0	2.8	-	4.1	内面透明釉 外面(体上)透明釉(体下)露胎、体部は上位に至るまでヘラケズリ高台は削り出しによる。内側は浅く削り、外側は腰折れ状を成す。体部から口縁は内湾して外上方へ立ち上がる。豊付けに粘土が付着する。	灰白 N8/	灰白 N8/	灰白 N8/	
40-97	P96		土師器	椀	底部	-	[2.4]	-	9.5	内面ナデ 外面ナデ? 粘土接合痕を残す。底部から体部は内湾して外上方に立ち上がる。断面台形から蒲鉾型を呈する高台が付く。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 5YR7/3	
40-98	P99		土師質土器	杯	底部	-	[1.7]	-	5.0	内面ナデ 外面ナデ 底部は平底で緩い凹面を成す。底部端は直立し、体部は内湾して外斜め上方に立ち上がる。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	
40-99	P110		土師質土器	杯	口縁	14.0	[2.4]	-	-	内面ナデ 外面ロクロ目のちナデ 口縁は外反して外上方に立ち上がる。口縁は外側に肥厚する。口唇は太く丸く修める。胎土精製。	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	
40-100	P110		土師質土器	杯	口縁	12.3	[2.7]	-	-	内面ロクロ目、ナデ 外面ロクロ目、ナデ? 口縁は直線的に外上方へ立ち上がる。口唇は太く丸く修める。外側にやや肥厚する。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	
40-101	P119		土師質土器	小皿	口縁	6.6	[1.1]	-	-	内面ナデ 外面ナデ 口縁は直線的に外上方へ立ち上がる。口唇は太く丸く修める。	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	
40-102	P133		土師質土器	小皿	-	6.1	1.8	-	4.0	内面ロクロ目のちナデ 外面ナデ(底)回転系切り痕 底部は平底で緩やかな凹面を成す。体部から口縁は直線的に外上方へ立ち上がる。口唇は丸く修める。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	ロクロ回 転は右
40-103	P141		土師質土器	椀	底部	-	[2.2]	-	7.9	内面ナデ 外面ナデ 底部から体部は緩く内湾して上方に立ち上がる。底部に断面分銅型の高台が付く。ロクロ成形。	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	
40-104	P145		土師質土器	小皿	-	5.8	1.7	-	3.6	内面ロクロ目 外面ロクロ目のちナデ(底)回転系切り痕 平らな底部から体部は内湾して外斜め上方に立ち上がる。口唇は太く丸く修める。	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	
40-105	P146		土師器	壺	口縁	15.6	[2.7]	-	-	内面ナデ 外面押圧痕、ナデ 口縁は直線的に外上方へ立ち上がる。口唇は細く丸く修める。丸底壺?	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	
40-106	P147		土師質土器	杯	底部	-	[1.3]	-	6.0	内面ナデ 外面ナデ(底)回転系切り痕 平らな底部から体部は外反して外上方へ立ち上がる。砂質胎土。	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	
40-107	P147		須恵器	壺	口縁	21.2	[2.7]	-	-	内面ナデ(口唇)強いナデ 外面ナデ 口縁は外反して外側へ大きく広がる。口唇は直立からやや内傾する面を成す。内面はナデにより大きく窪む。	灰 N6/	灰 N6/	青灰 5B5/1	
40-108	P149		土師質土器	杯	底部	-	[1.2]	-	6.0	内面ナデ 外面ロクロ目(底)回転系切り痕 平らな底部から体部は内湾して外上方に立ち上がる。	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	にぶい褐 7.5YR5/4	
40-109	P157		土師質土器	杯	底部	-	[1.3]	-	6.6	内面ナデ 外面ロクロ目(底)回転系切り痕 平らな底部から体部は内湾して外上方に立ち上がる。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	
40-110	P157		土師質土器	杯	底部	-	[1.1]	-	3.8	内面ナデ 外面ロクロ目、ナデ(底)回転系切り痕 底部は平底でやや突出する。体部は内湾気味に外上方へ向かう。	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	灰白 10YR8/2	
41-111	P158		土師器	皿	-	11.9	2.5	-	8.7	内面(体)ナデ 中位に連続的な横方向のヘラ押圧による沈線状の鈍い凹部を形成。(底)押圧痕 外面(体)ナデ(口唇)強いヨコナデにより段部が形成される。(底)指頭による押圧痕、ナデ、ヘラ押痕 底部は平底、分厚い器壁の体部が直線的に外上方に立ち上がる。口唇は丸く修める。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	
41-112	P158		土師器	皿	-	12.0	2.3	-	9.0	内面(体)ナデ:ヘラ状工具による連続的な押圧を加え沈線状の鈍い凹部を形成。(底)押圧痕 外面(体)ナデ(口唇)強いヨコナデによる段部が形成。(底)押圧痕、粘土接合痕を残す。 底部は緩い凹面を成す。体部から口縁は直線的に外上方に立ち上がる。一部では短く外反して立ち上がる。口唇は丸く修める。	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/6	
41-113	P158		土師器	皿	-	11.8	2.5	-	8.2	内面(体)ナデ(底)粘土紐接合に伴う渦状の押圧痕、ナデ 外面(体)ナデ(底)押圧痕(渦状) 緩い凹面を成す底部から体部は、直線的または内湾気味に外上方に立ち上がる。	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	
41-114	P163		陶器	擂鉢	体部	-	[5.1]	-	-	内面回転ナデ 外面回転ナデのちハケ状原体によるナデ 体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 2.5YR5/4	灰 7.5Y6/1	小規模は 凹孔と規 模の大き が異なる 残る。

写真図版



調査区北部（南西から）



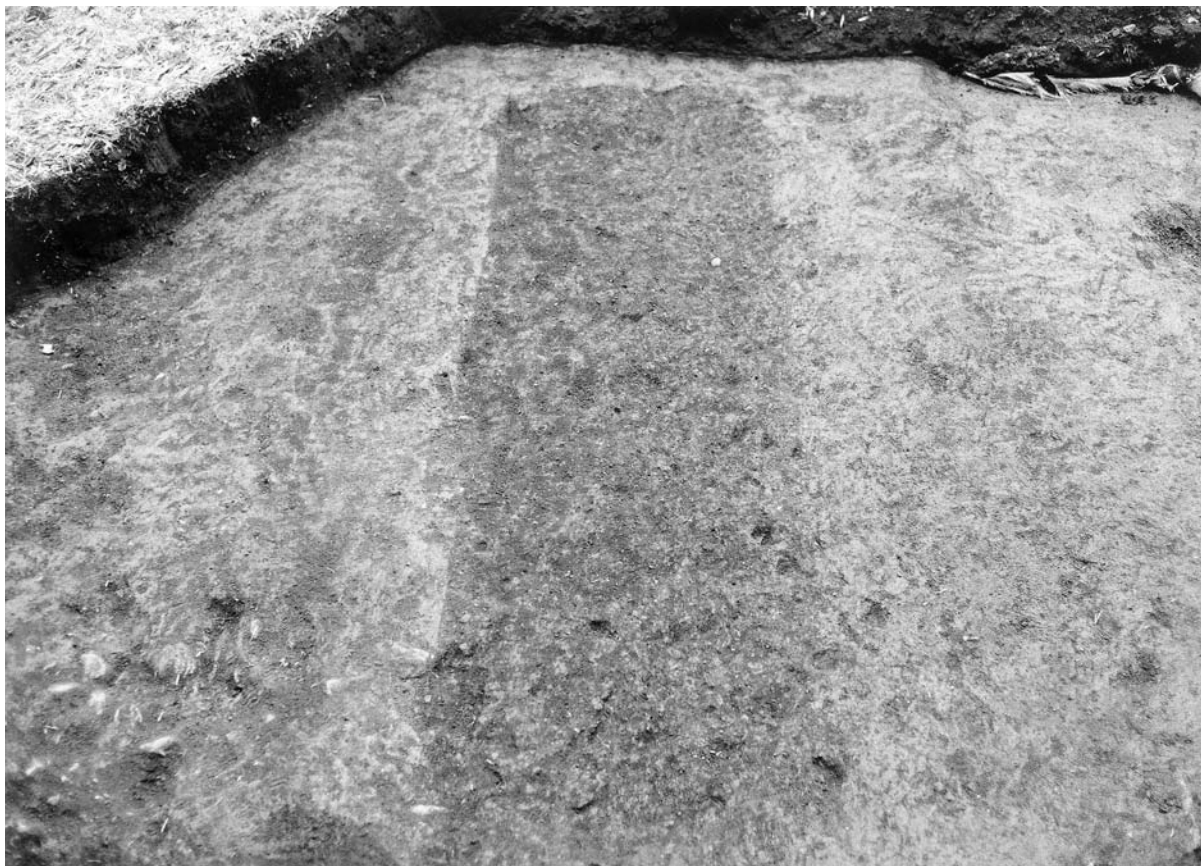
調査区西部（北東から）



調査区東部（西から）



同上（東から）



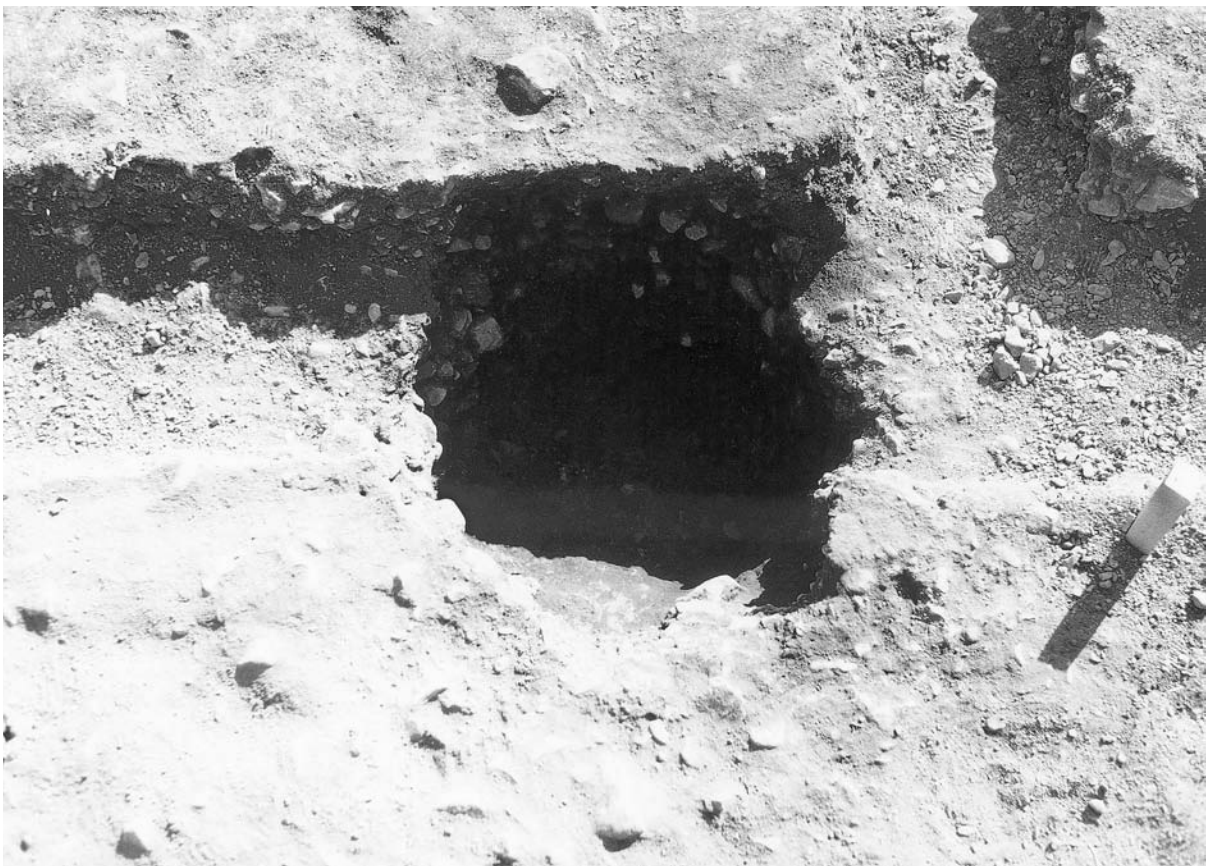
SK 1 検出状態（北から）



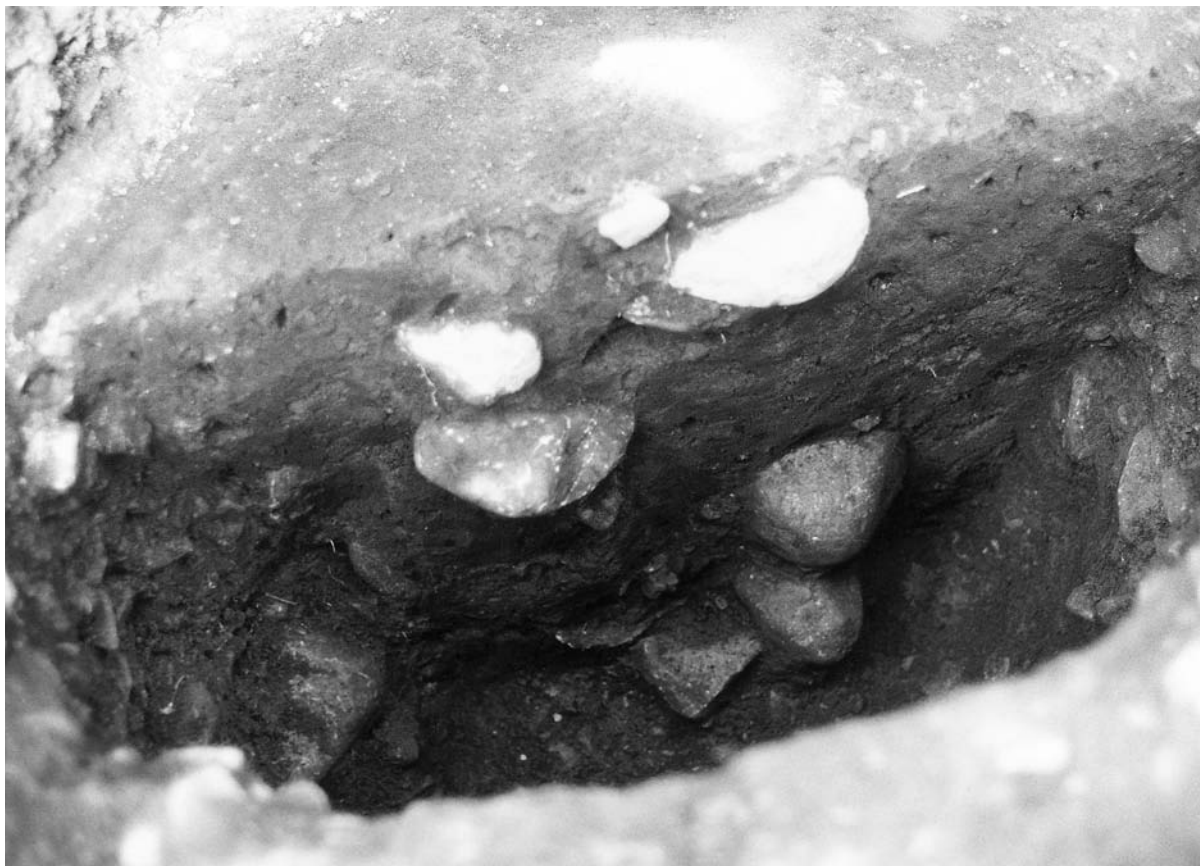
同 半截状態（西から）



SK 2 半截状態（東から）



SK 4 完掘状態（北から）



SK 5 半截状態（南から）



同 完掘状態（南東から）



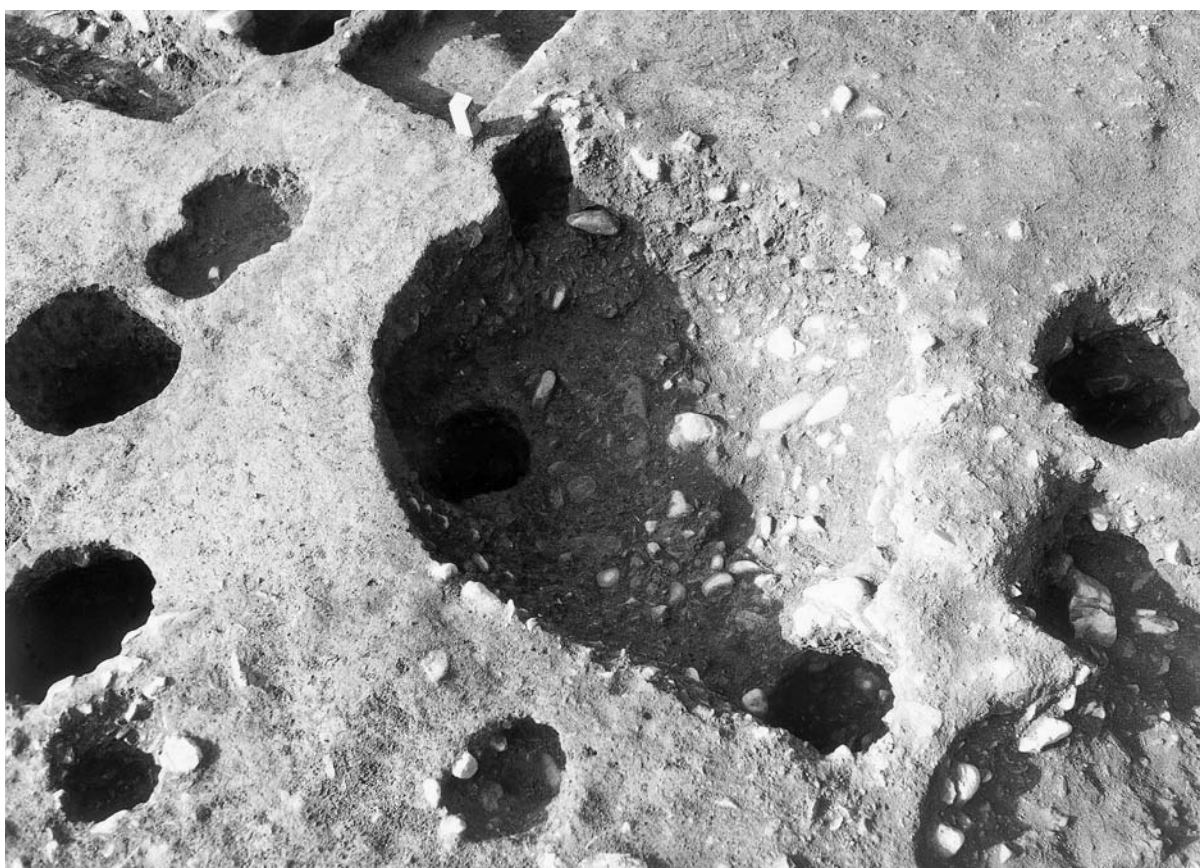
SK 6 半截状態 (南から)



同 完掘状態 (西から)



SK 7 半截状態 (南東から)



同 完掘状態 (北東から)



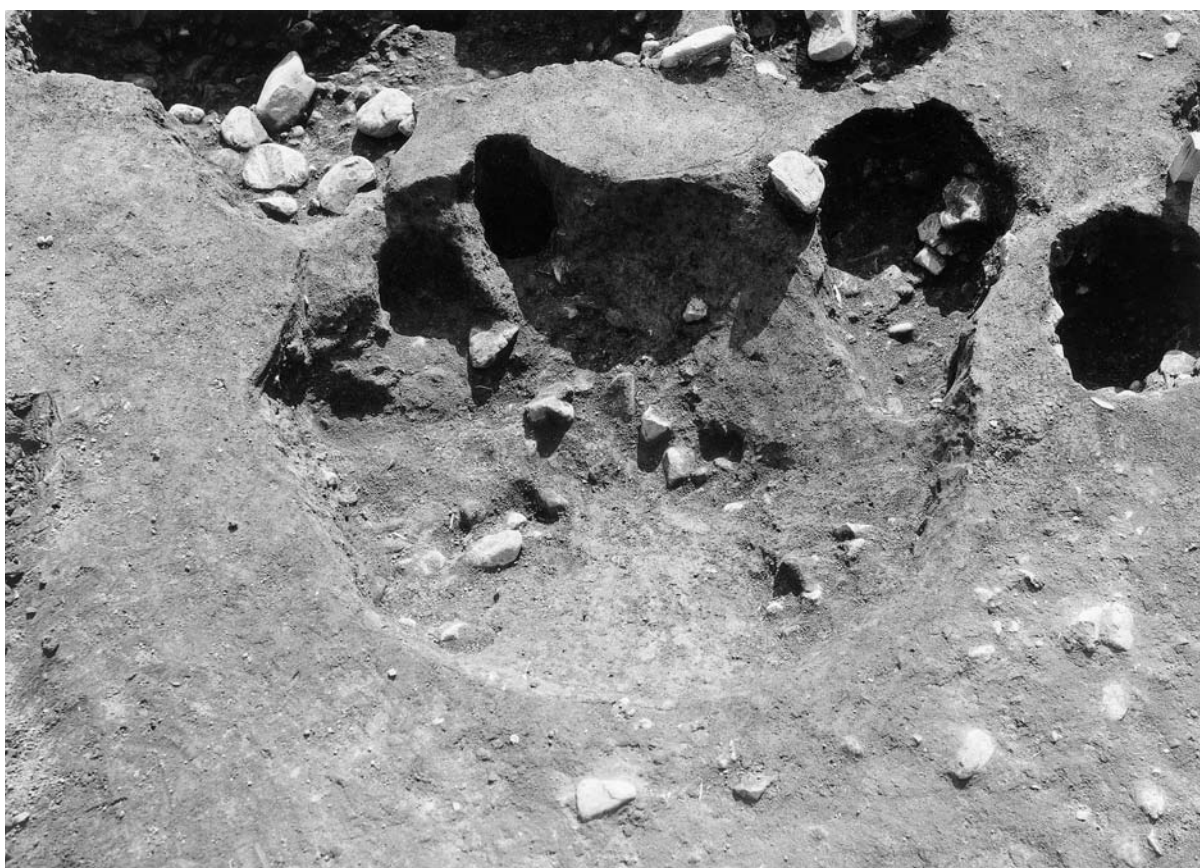
SK 9 半截状態 (南から)



同 完掘状態 (北から)



SK11 完掘状態（北東から）



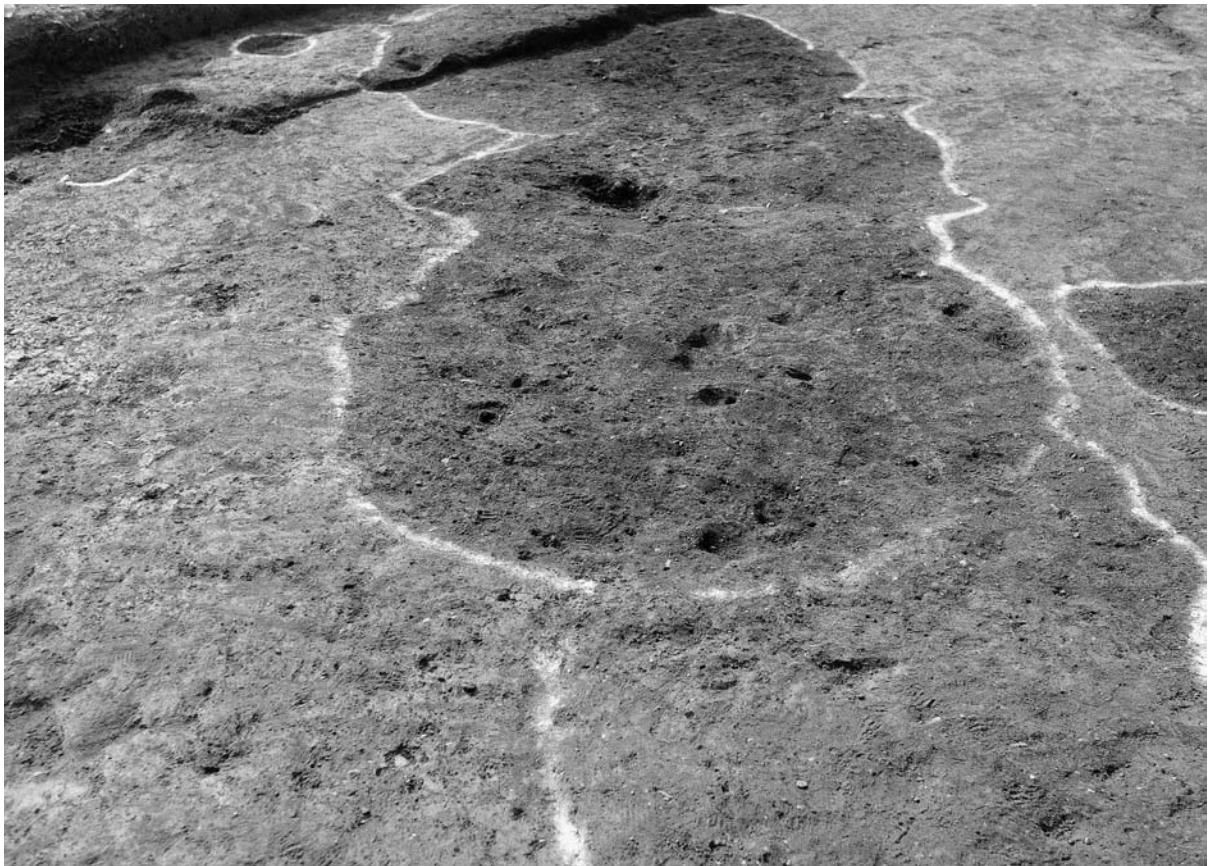
SK12 完掘状態（北から）



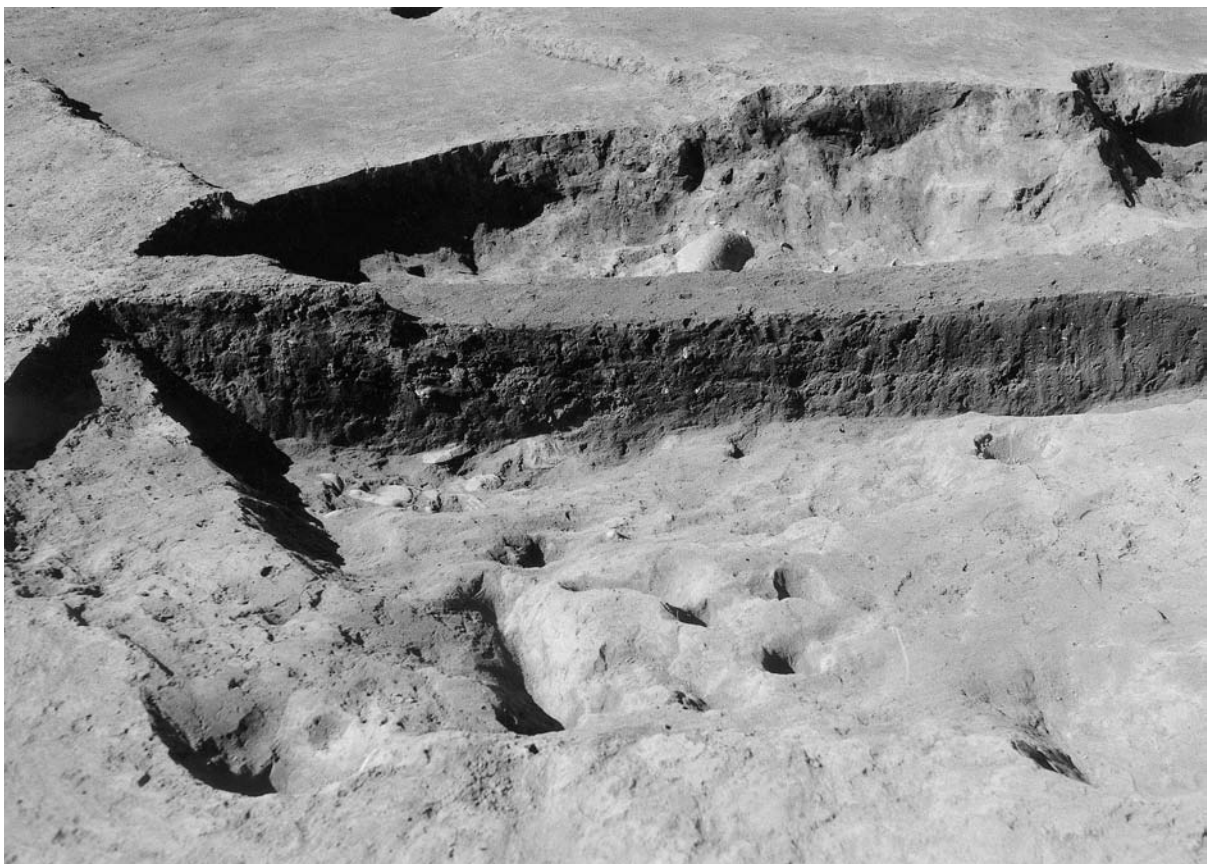
SK13 半截状態（南から）



同 完掘状態（北から）



SK15・16・17 半截状態（北から）



SK15 半截状態（東から）



SK15・16 半截状態（北から）



SK17 完掘状態（北から）



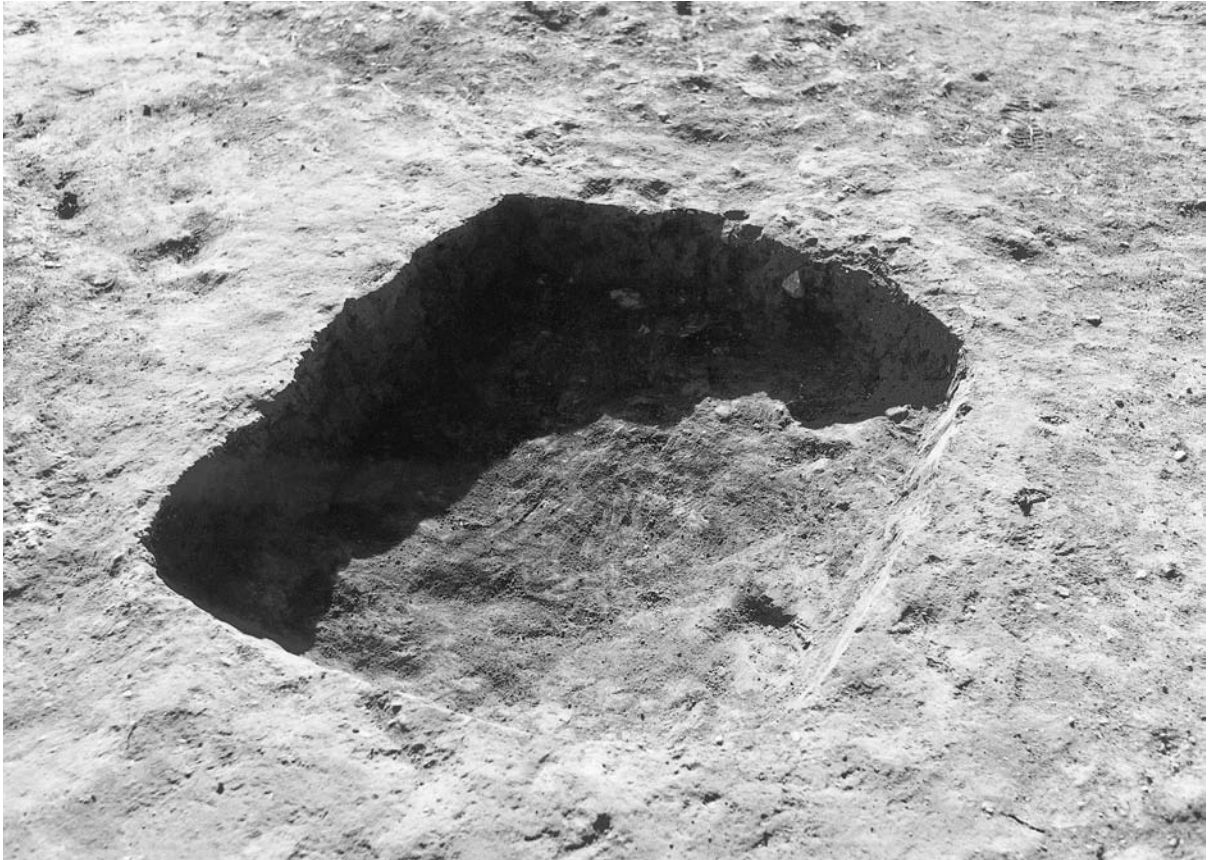
SK19 半截状態（南西から）



同 完掘状態（西から）



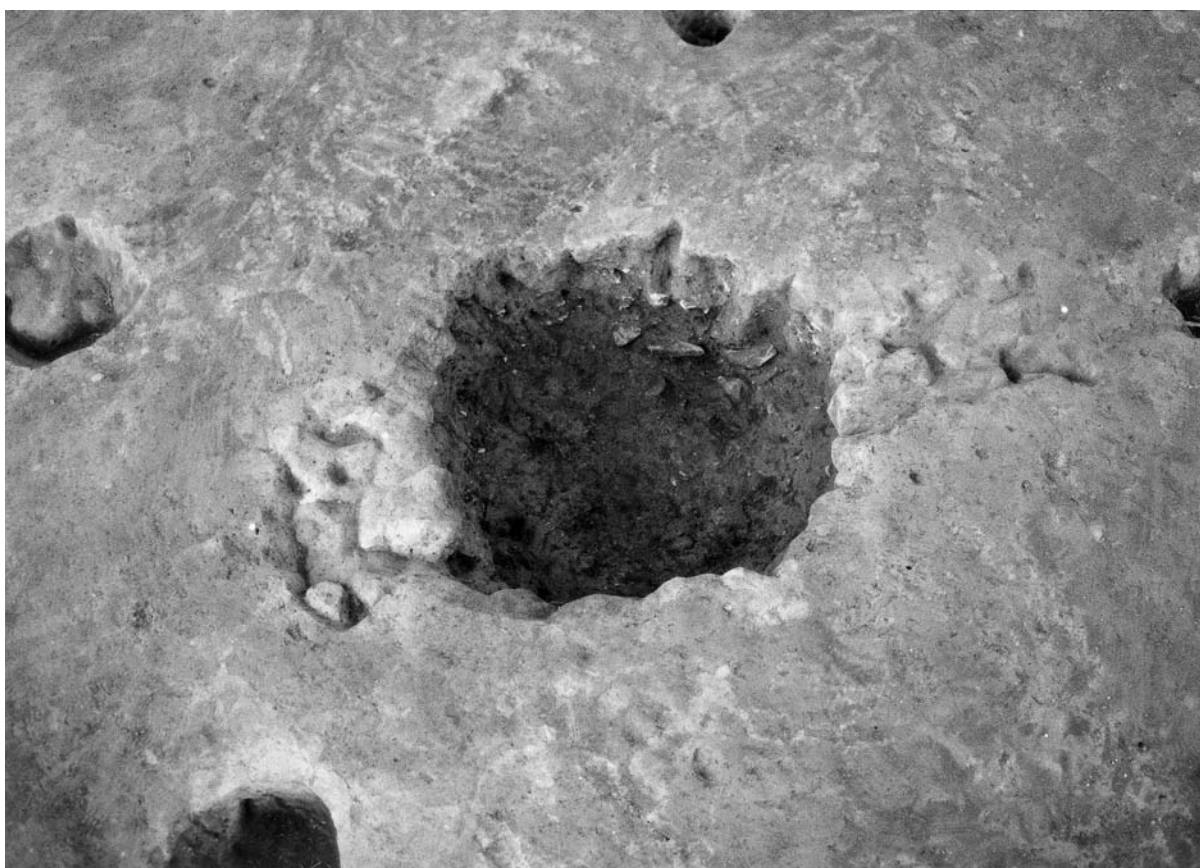
SK21 半截状態（南から）



同 完掘状態（北東から）



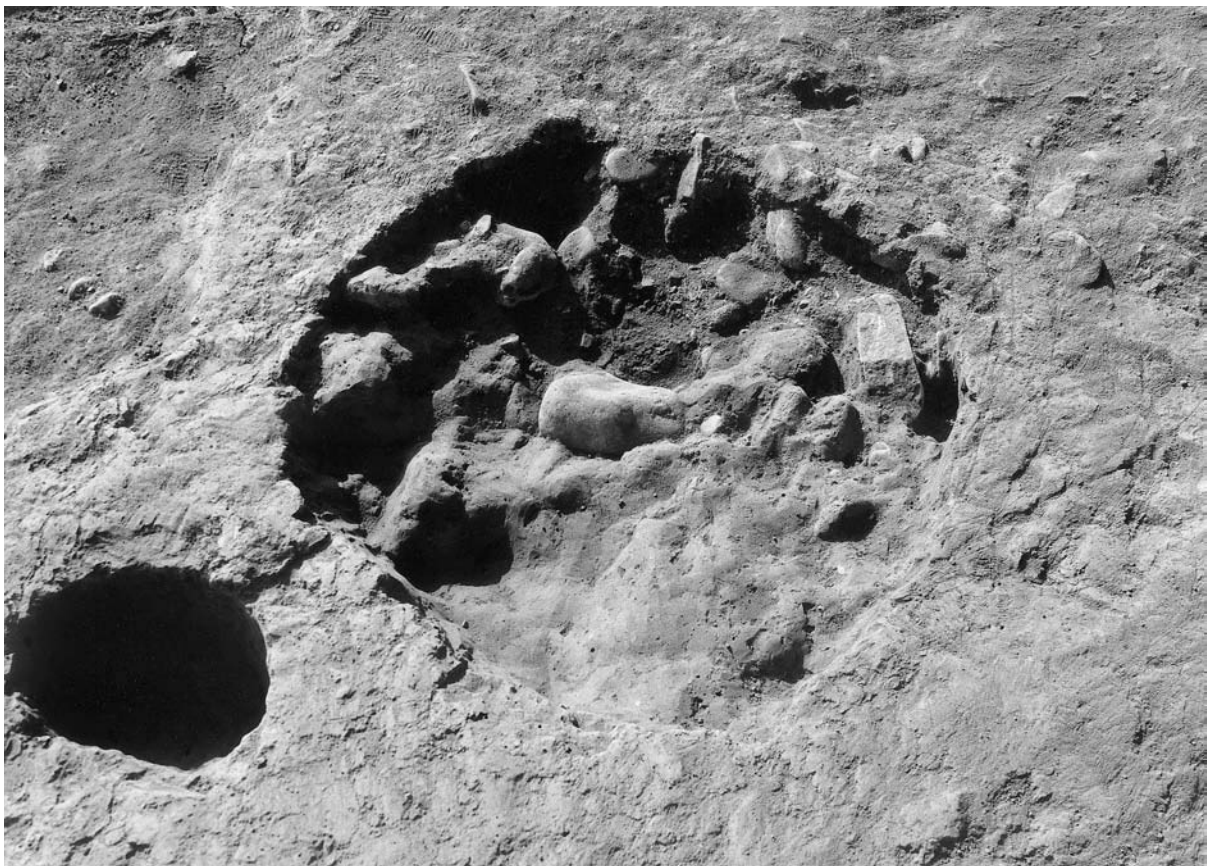
SK25 半截状態（南から）



同 完掘状態（南から）



SK24 半截状態（東から）



SK29 完掘状態（東から）



SK30 半截状態（南東から）



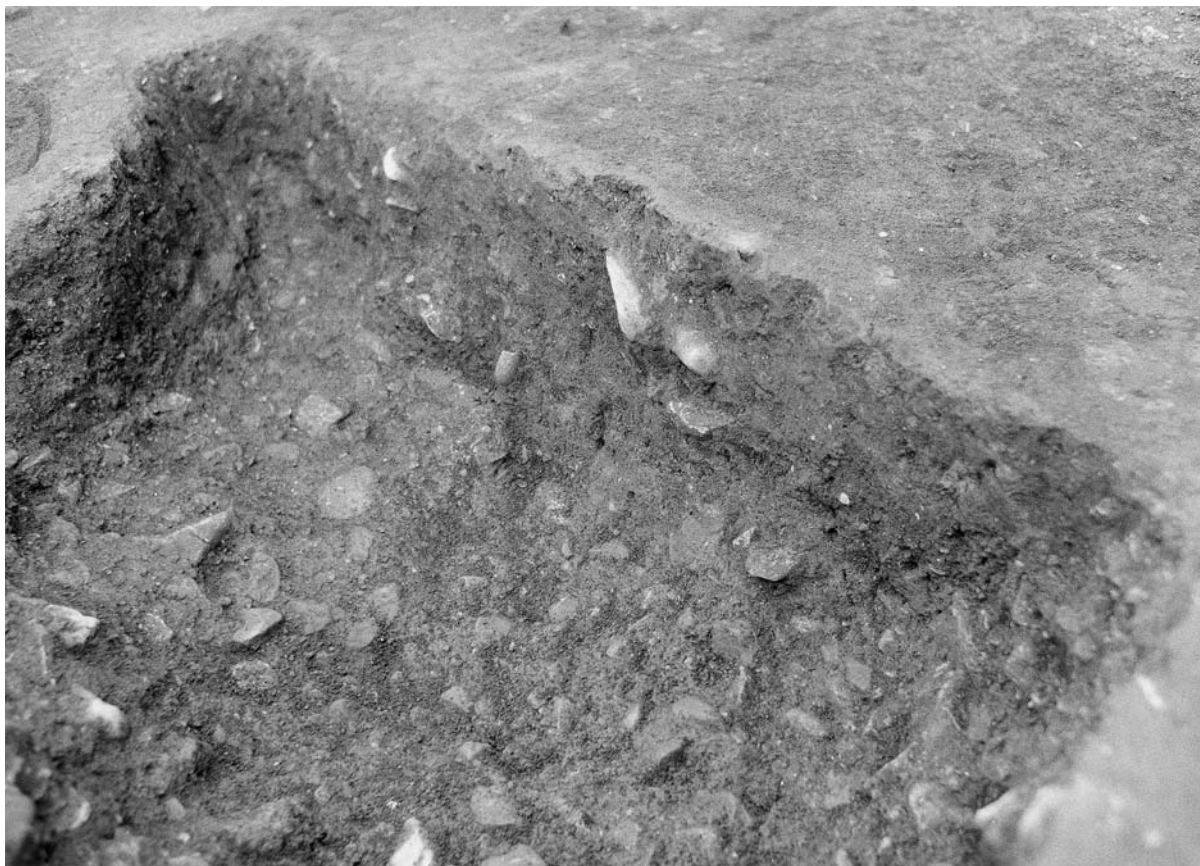
同 完掘状態（東から）



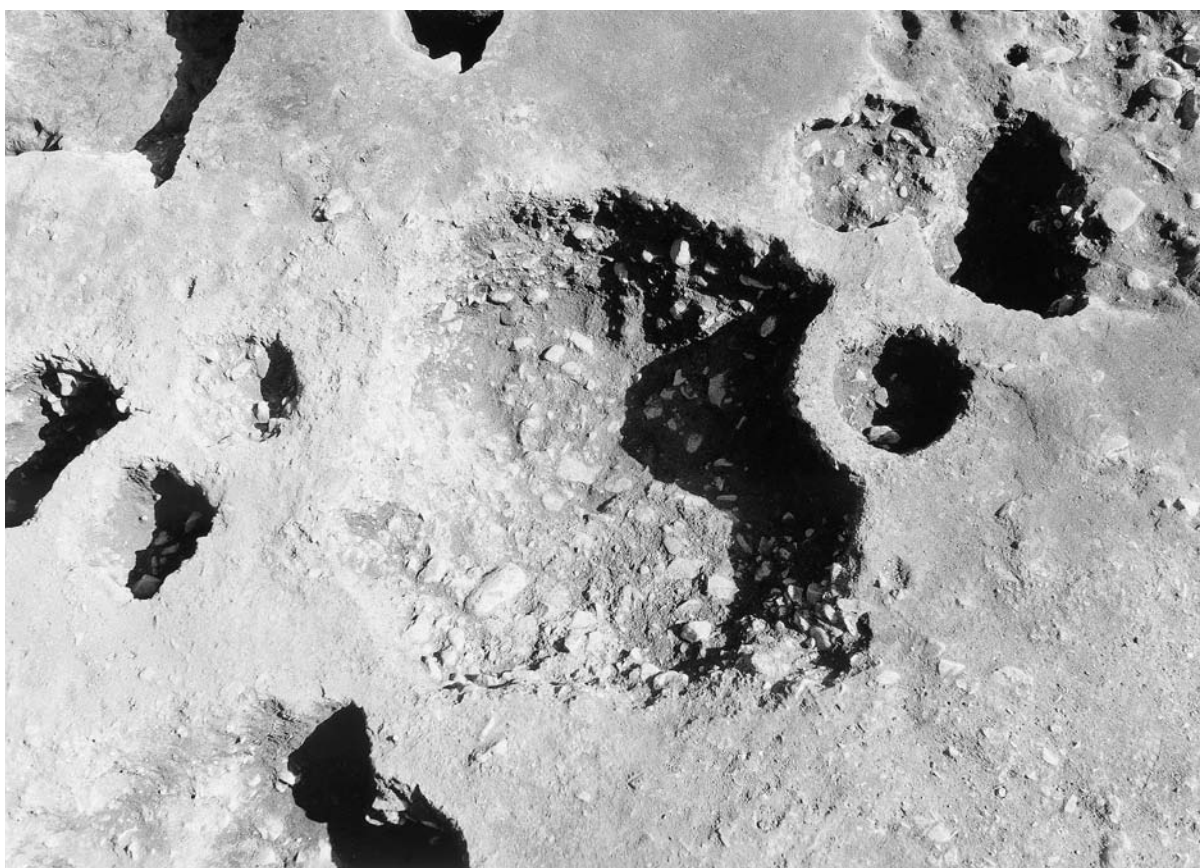
SK34 半截状態（南東から）



SK35 完掘状態（南から）



SK37 半截状態 (南東から)



同 完掘状態 (北から)



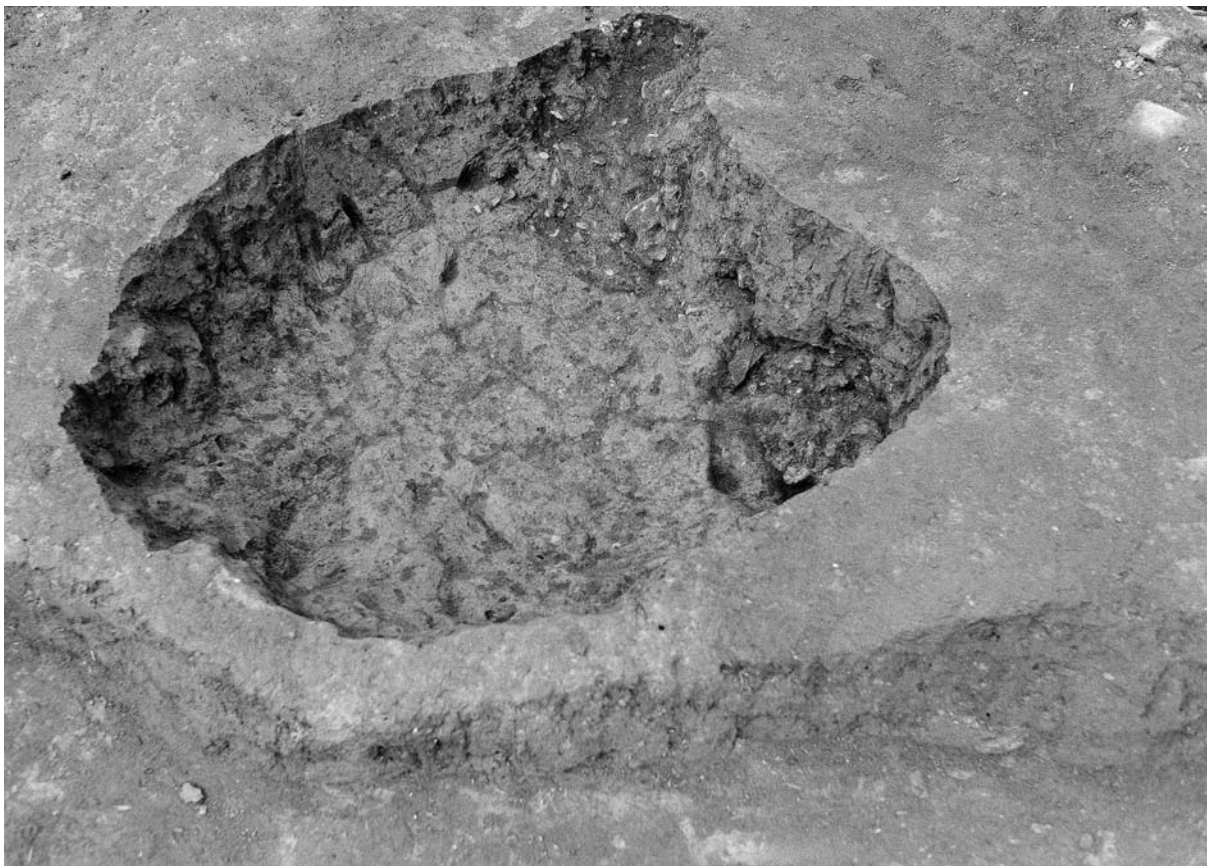
SK39 半截状態（南東から）



SK35（手前）・SK45（奥）完掘状態（南から）



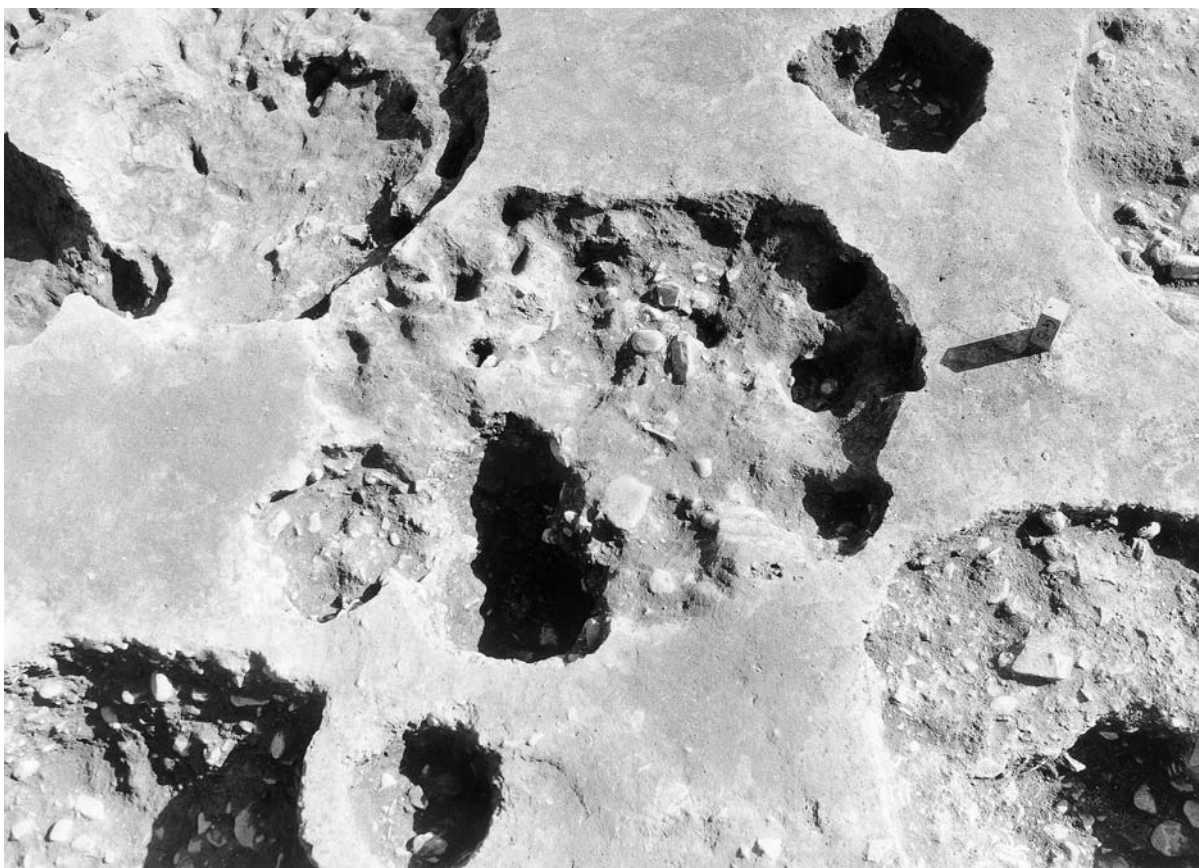
SK41 半截状態（南から）



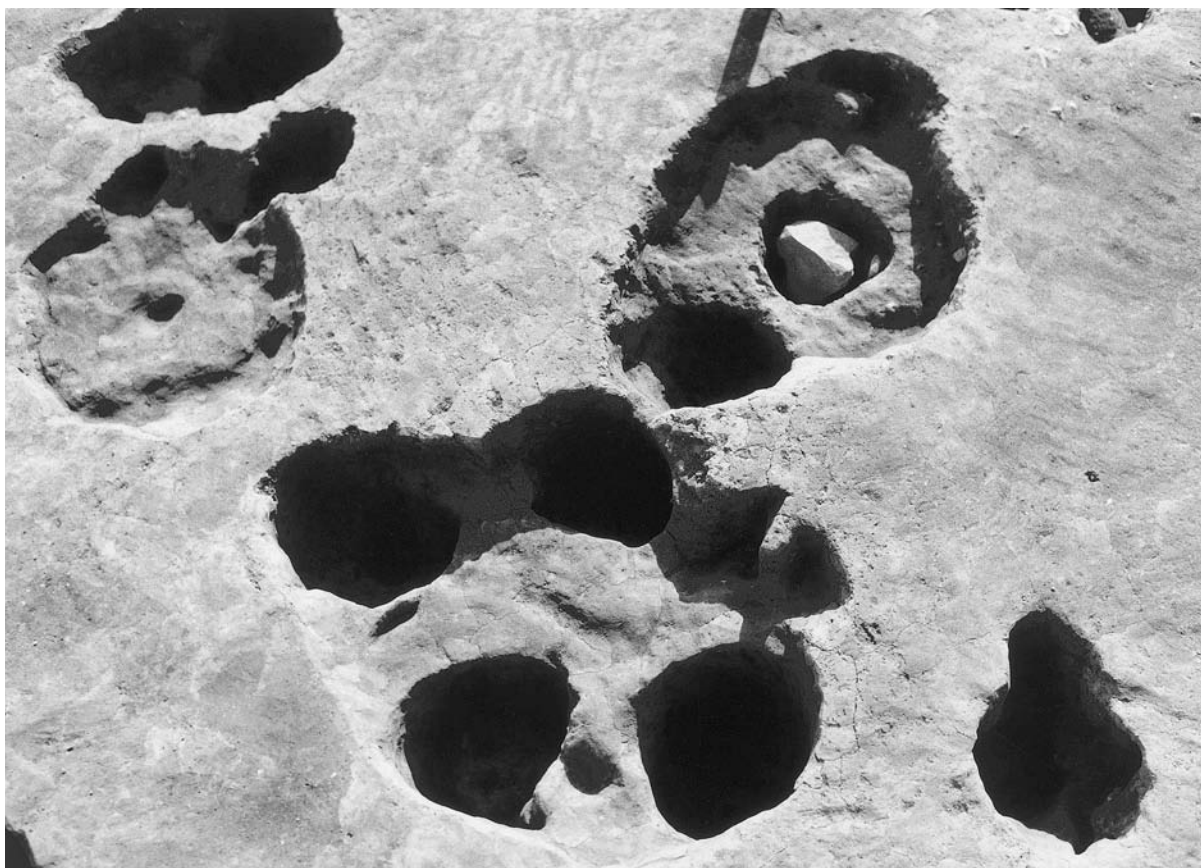
同 完掘状態（東から）



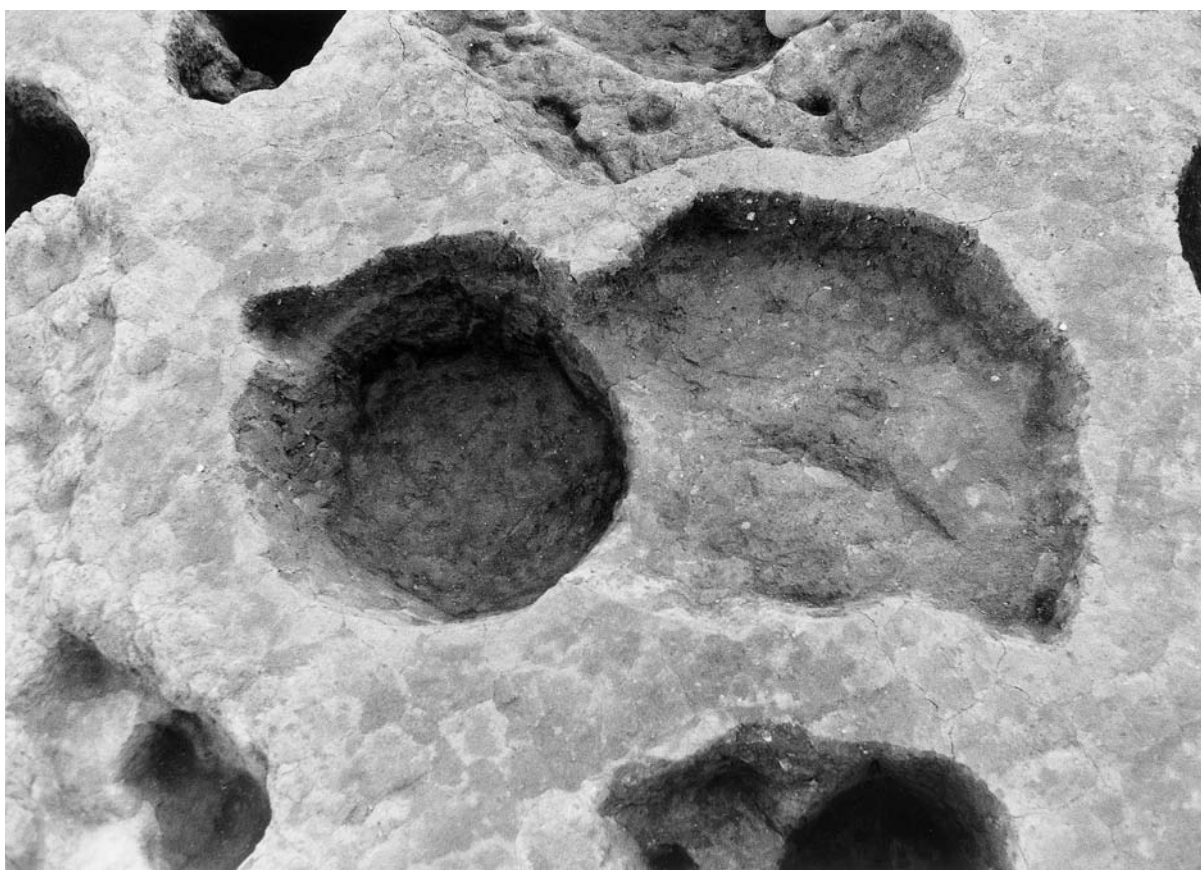
SK43 半截状態 (南西から)



同 完掘状態 (北から)



SK46 (手前)・SK48 (奥) 半截状態 (北東から)



SK49 (右)・P147 (左) 完掘状態 (北から)



P95 遺物出土狀態 (96)



P158 遺物出土狀態 (111 · 112 · 113)



SX 3 半截状態 (東から)



SX 7 完掘状態 (西から)



SX10 半截状態（南西から）



同 上 （北西から）



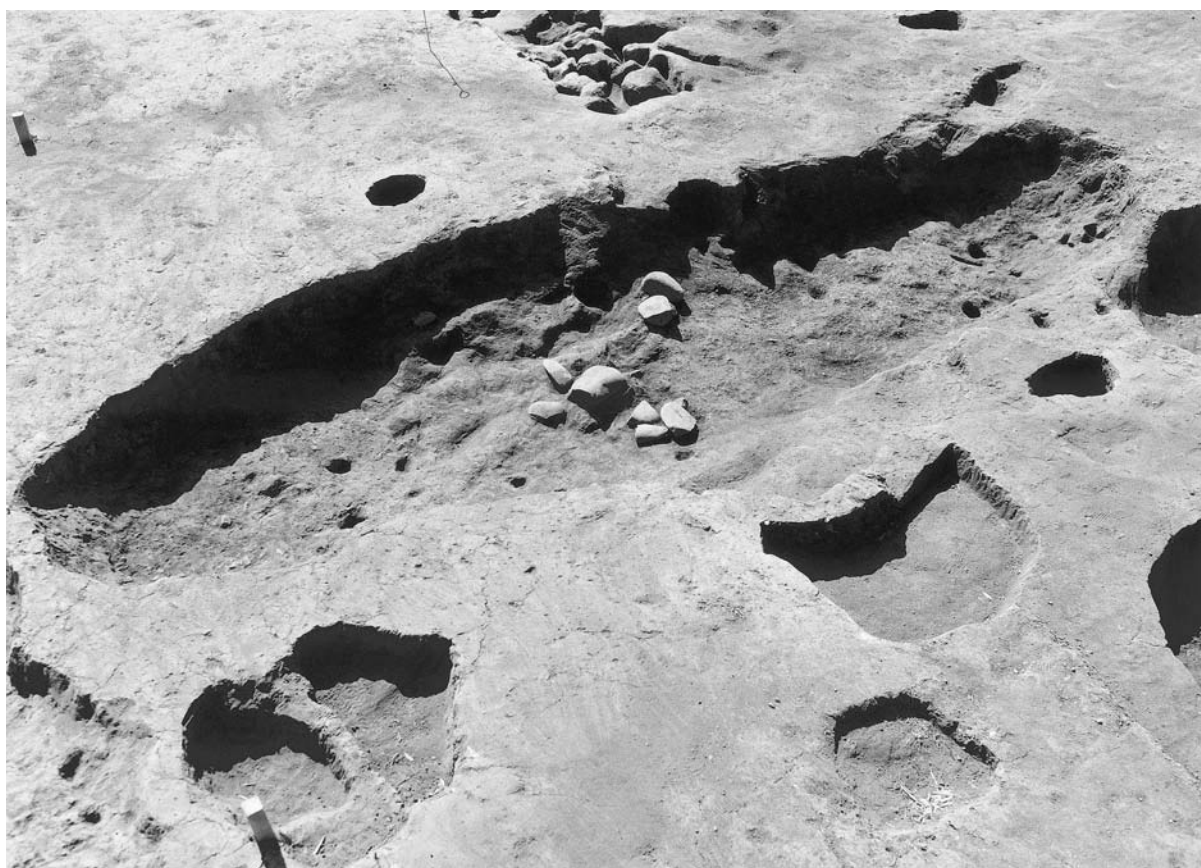
SX10 完掘状態（東から）



同 上（南から）



SX11 半截状態 (南西から)



SX11 完掘状態 (北から)



SX15-1,-2 半截状態 (南東から)



同 上 (南西から)



SX15-3,-4 半截状態 (南西から)



SX15-1~4 完掘状態 (北西から)



SD 2 半截状態 (南から)



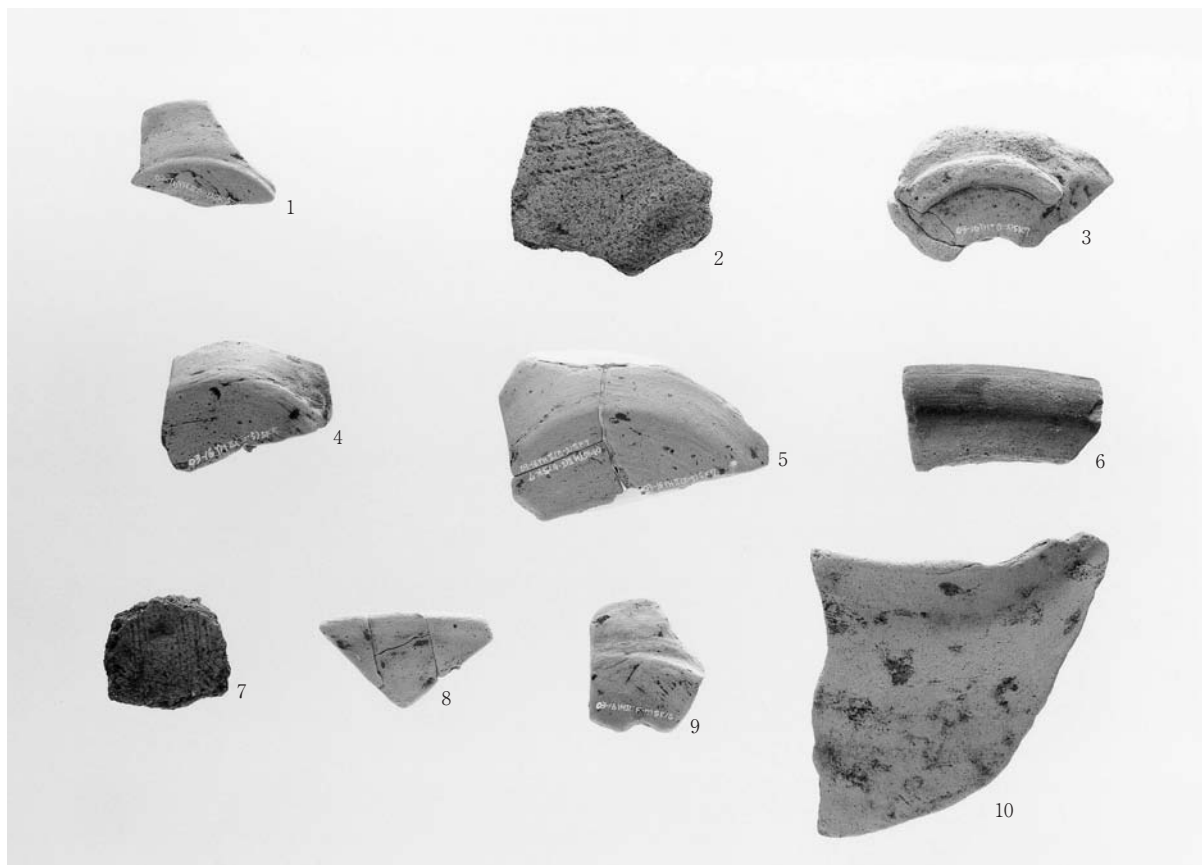
同 完掘状態 (東から)



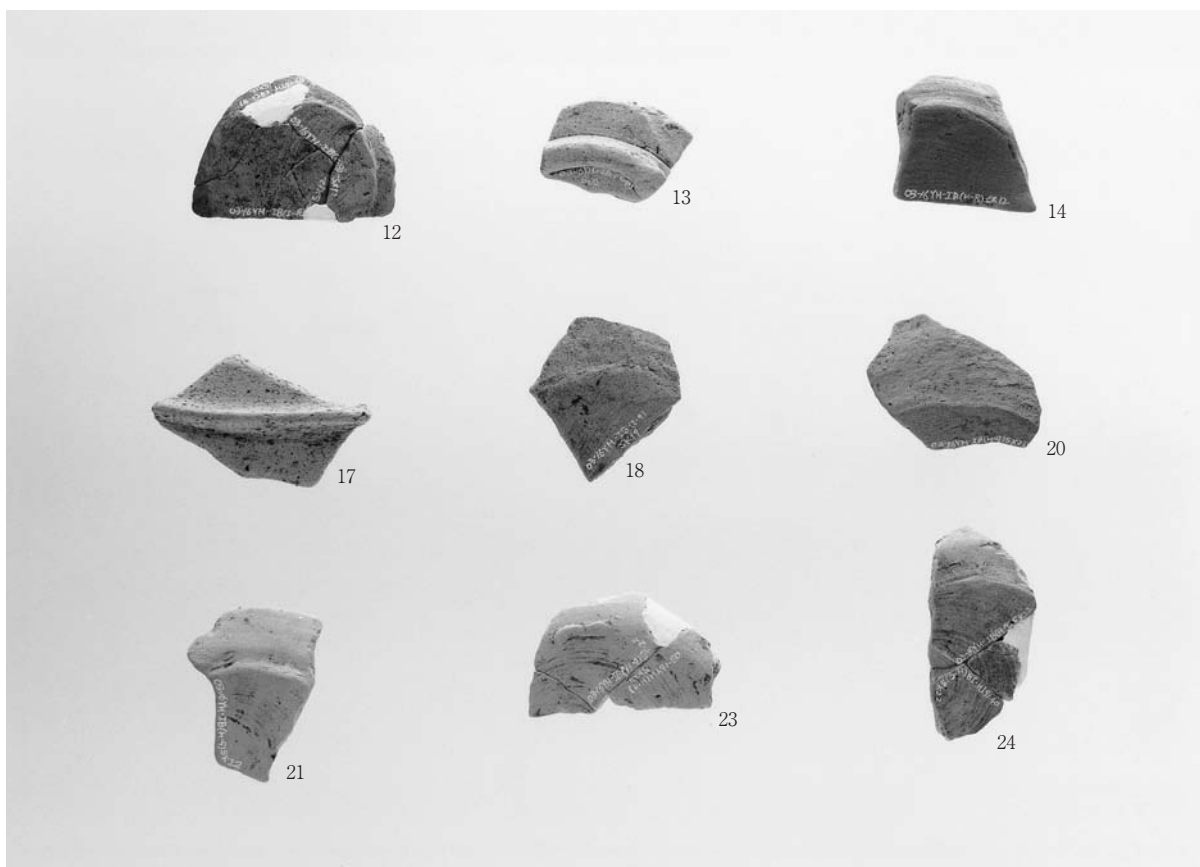
SD 3 完掘状態（北から）



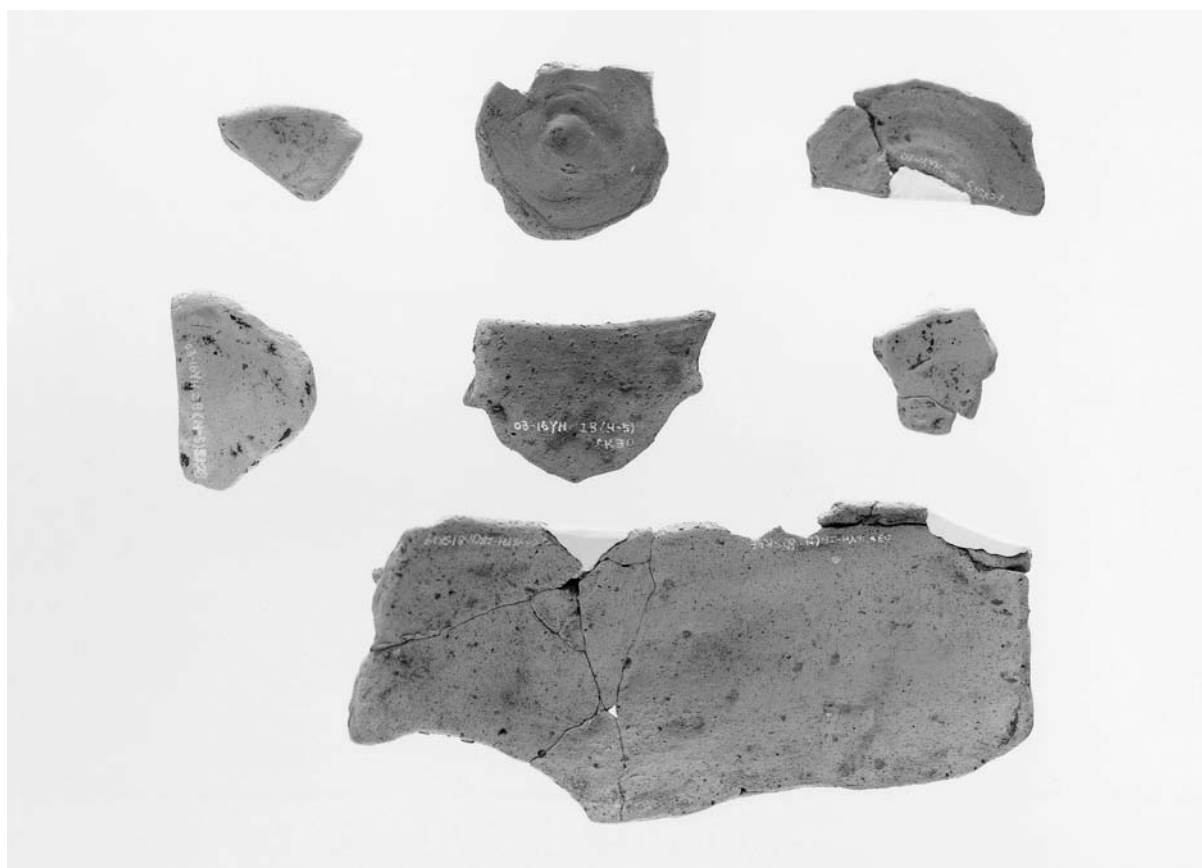
SD 4 完掘状態（北から）



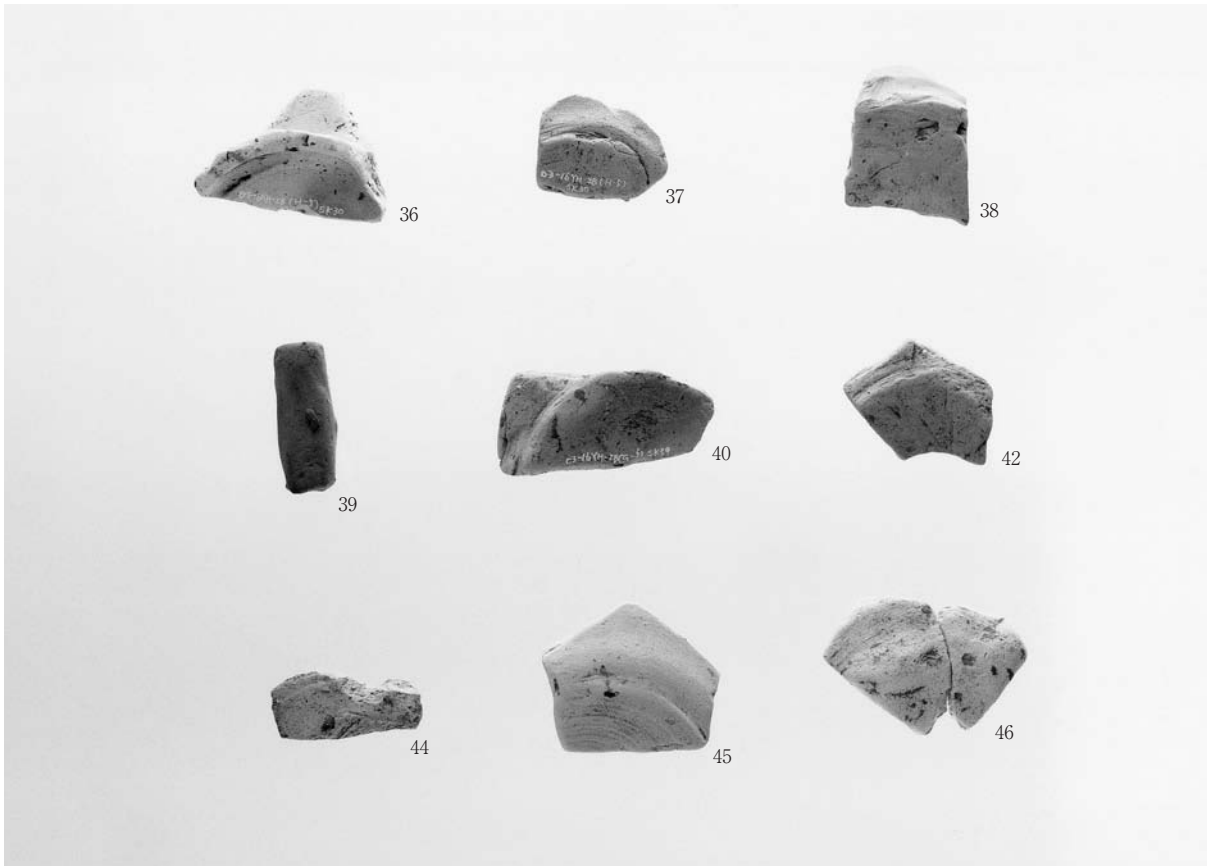
出土遺物 1 (上: 外面, 下: 内面)



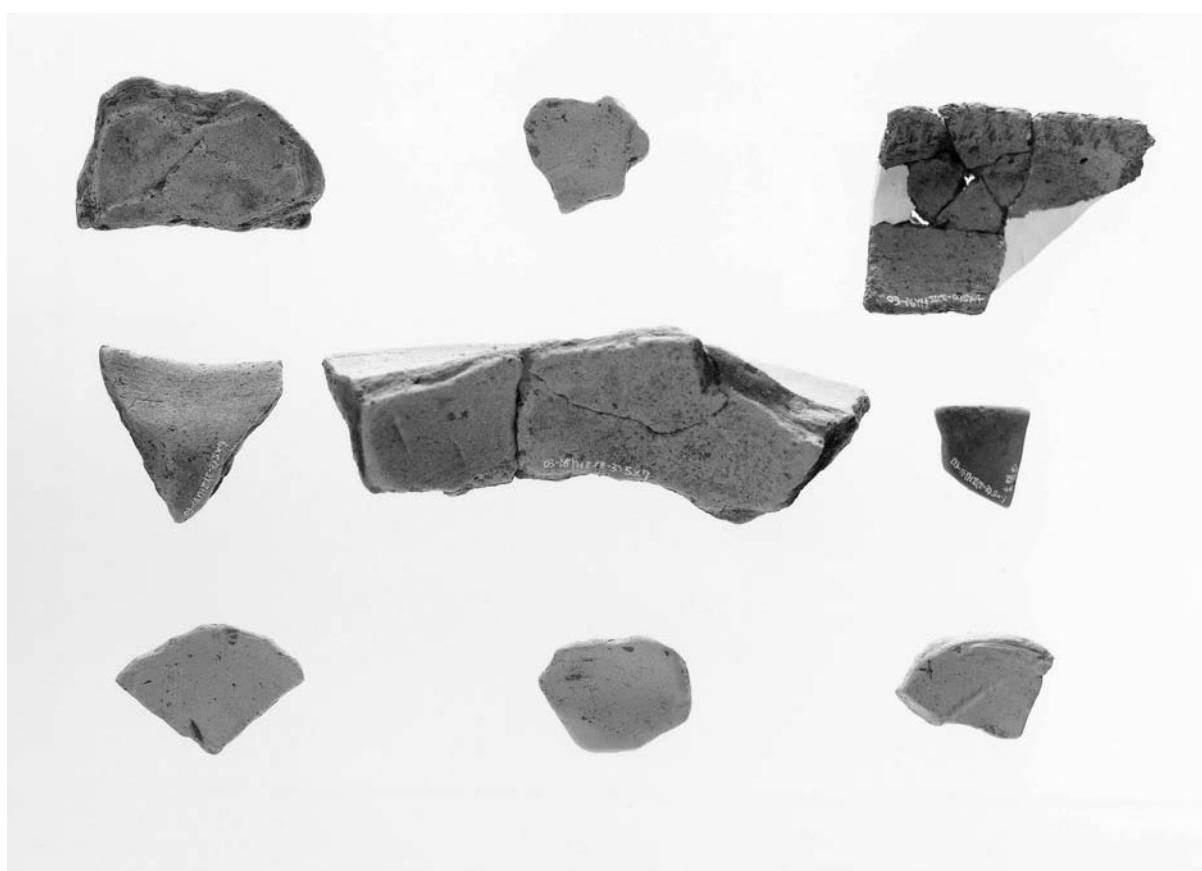
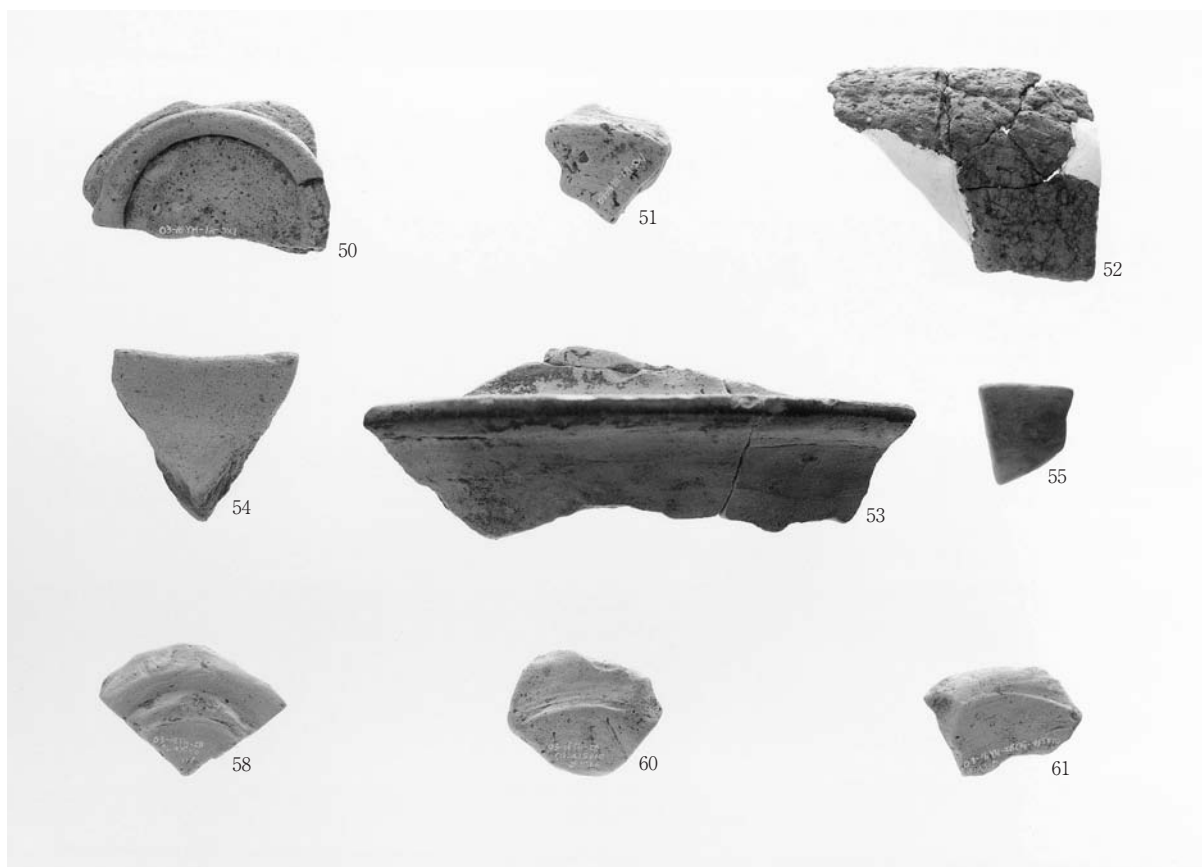
出土遺物 2 (上：外面, 下：内面)



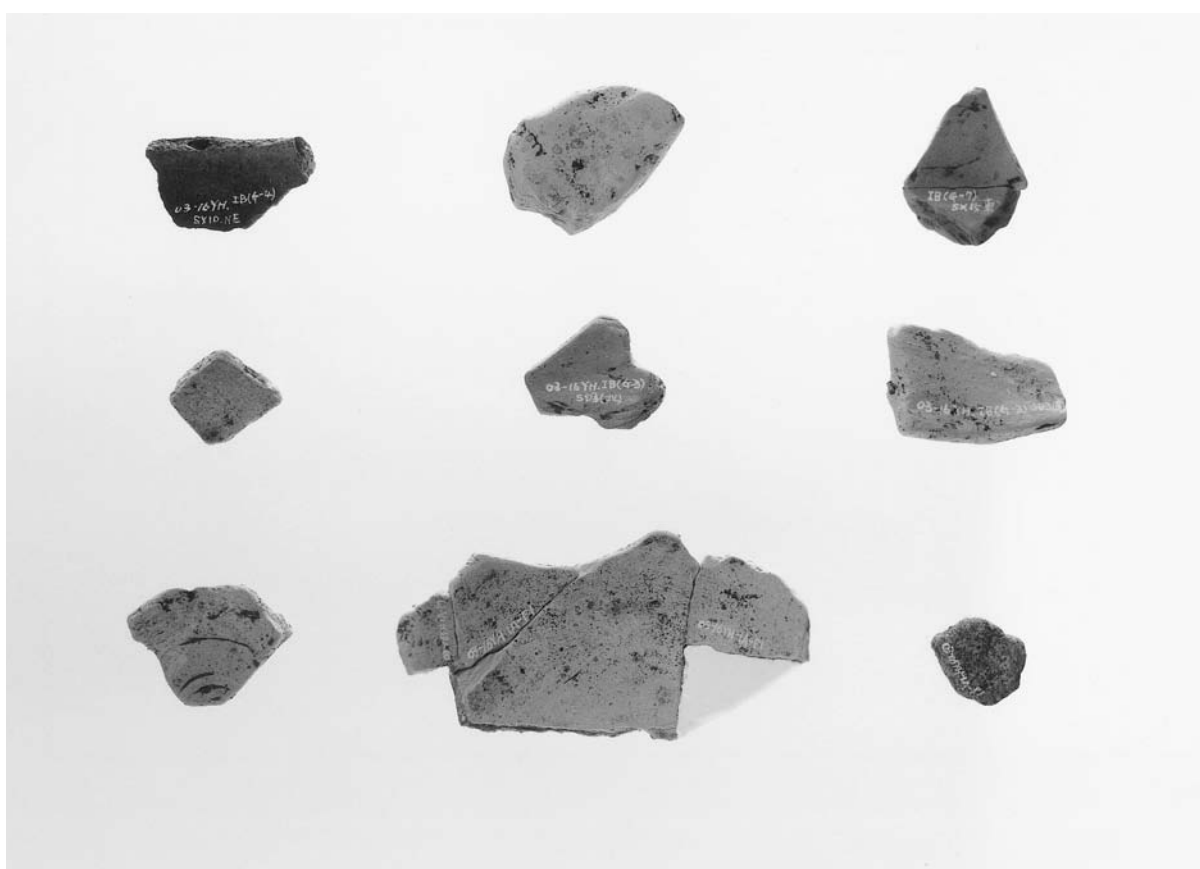
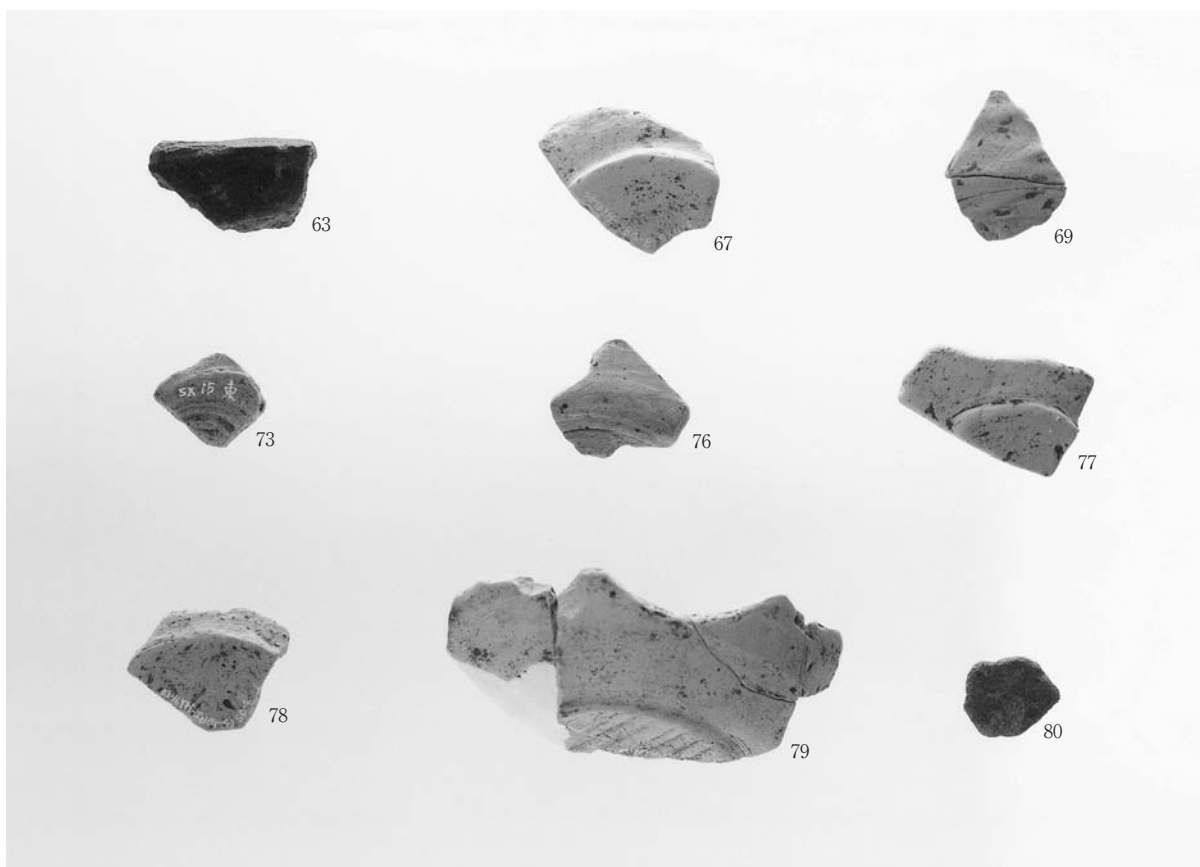
出土遺物3 (上:外面, 下:内面)



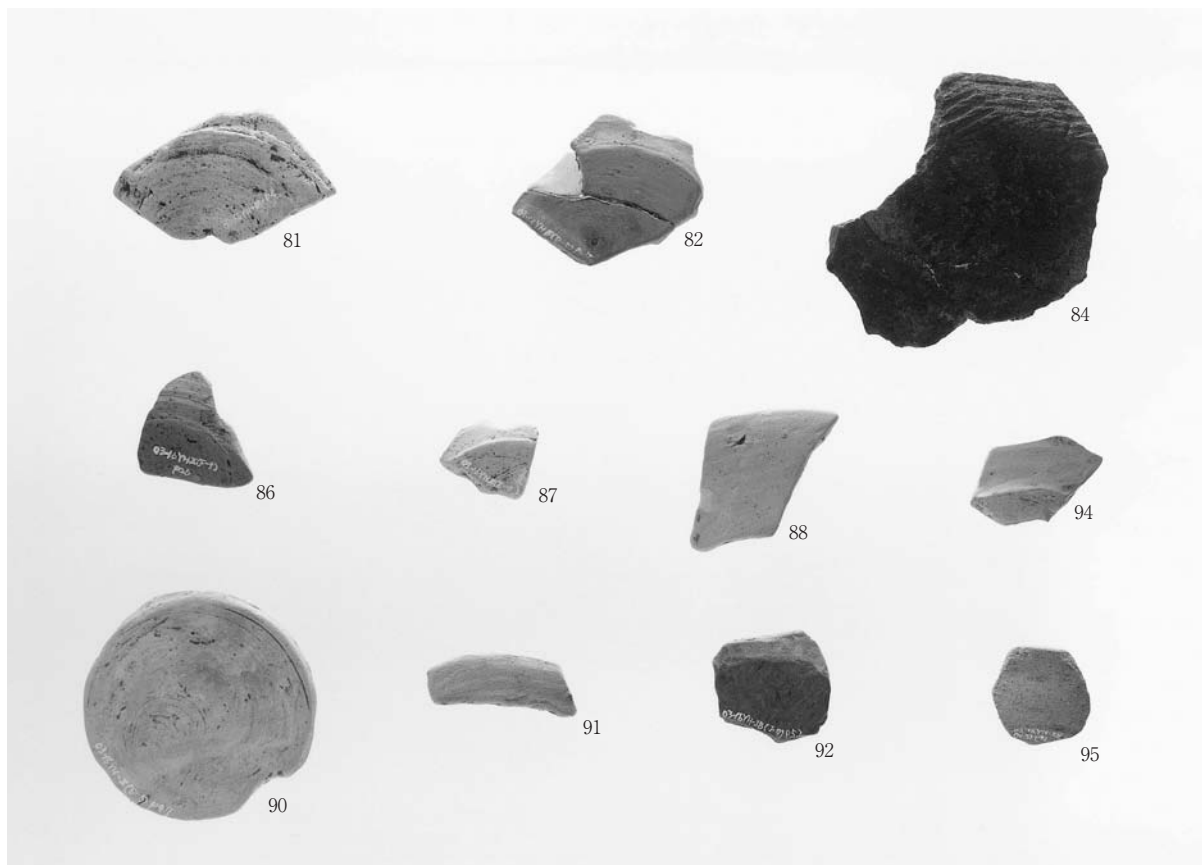
出土遺物 4 (上：外面, 下：内面)



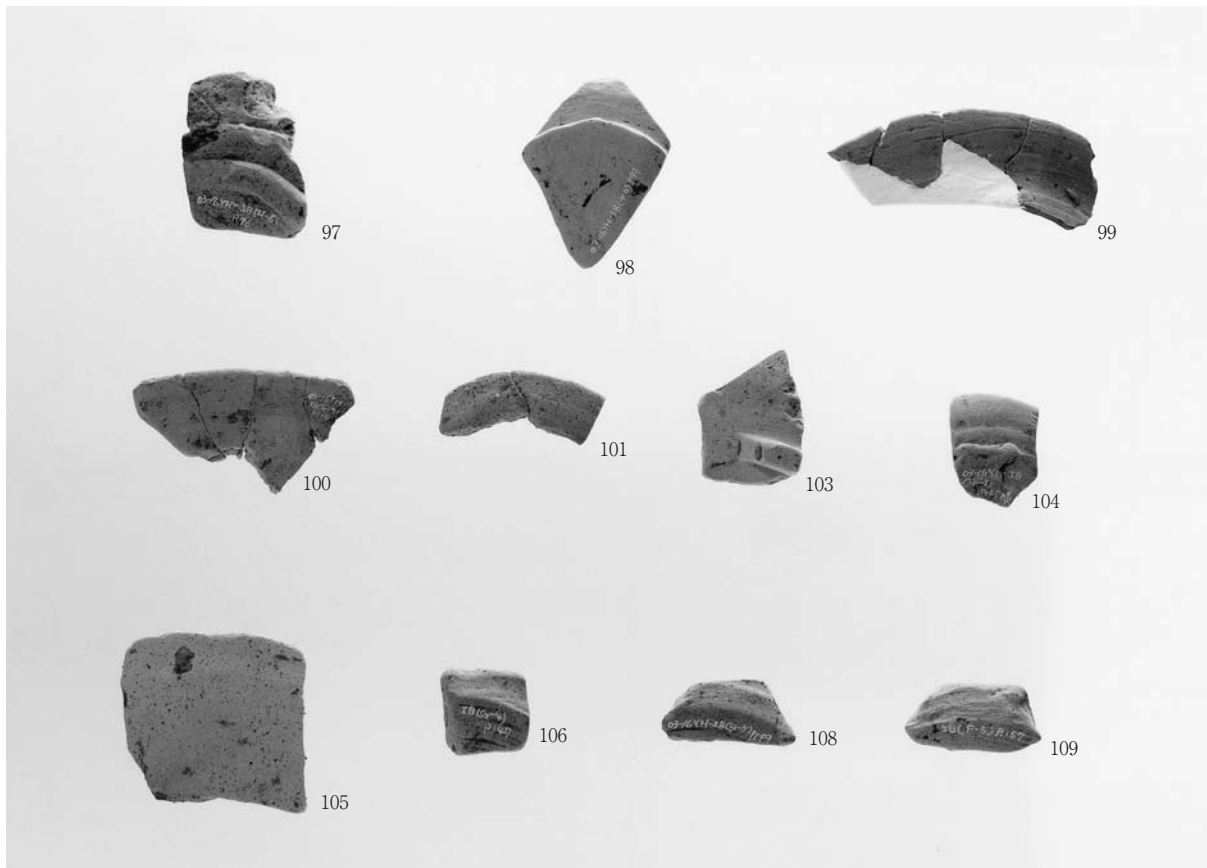
出土遺物5 (上：外面, 下：内面)



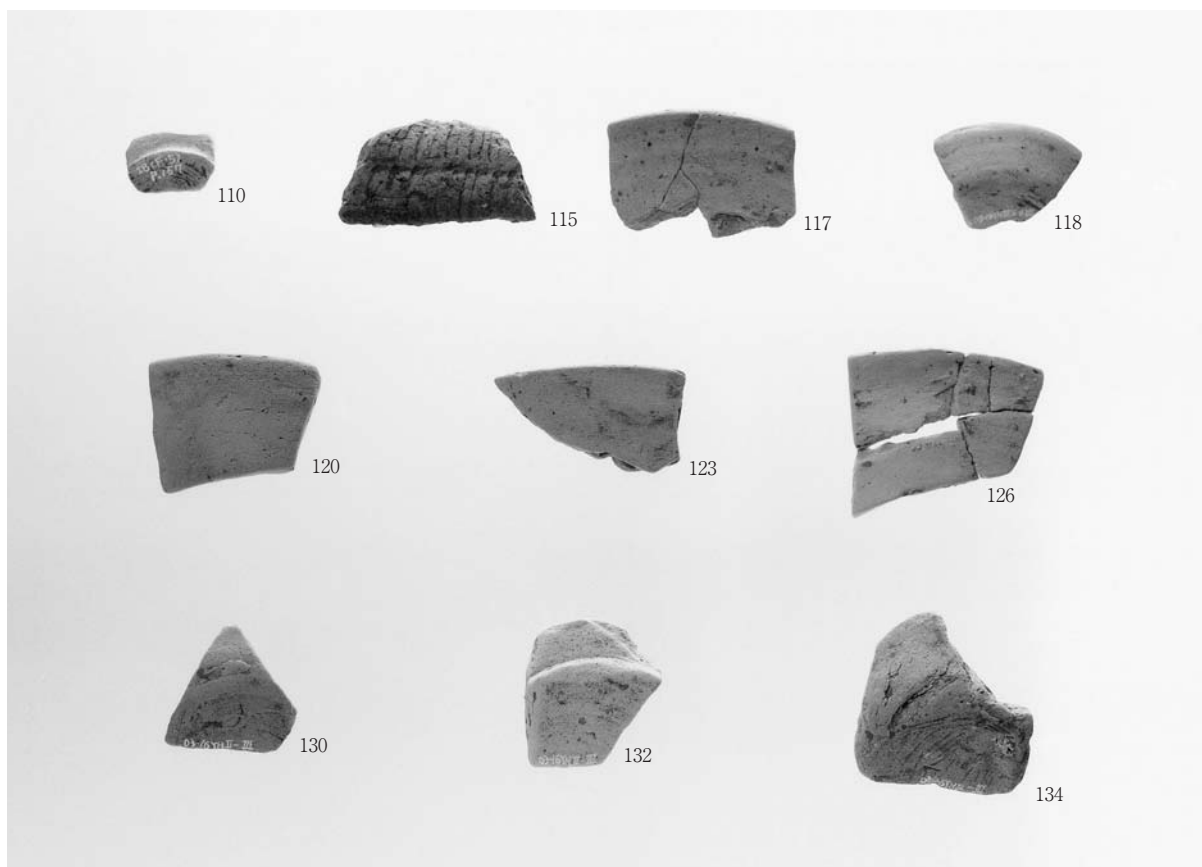
出土遺物 6 (上：外面，下：内面)



出土遺物7 (上：外面，下：内面)



出土遺物 8 (上：外面, 下：内面)



出土遺物9 (上：外面，下：内面)



報告書抄録

ふりがな	はやしだいせき							
書名	林田遺跡Ⅲ							
副書名	県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第92集							
編著者名	藤方正治							
編集機関	財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL088-864-0671							
発行年月日	2005年2月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はやしだいせき 林田遺跡	こうちけん 高知県 とさやまだらう 土佐山田町 かも 加茂	39323	190181	33度 36分 20秒	133度 43分 21秒	20040120) 20040317	700	県道宮ノ口深淵線整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
林田遺跡	集落	縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土・桃山時代、江戸時代	土坑、柱穴、溝状遺構	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、国産陶器、貿易陶磁				

(財)高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第92集

林 田 遺 跡 Ⅲ

県道宮ノ口深淵線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年2月28日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社